

フランス王ルイ 9 世の聖遺物収集について ： 13 世紀国王コレクションの公開の意義

首都大学東京大学院 人文科学研究科 文化基礎論専攻
歴史・考古学教室 博士前期課程 2 年
学修番号：15867101 武智 あさぎ

【目次】

はじめに.....	3
第 1 章 聖遺物とルイ 9 世.....	9
第 1 節 聖遺物の信仰.....	9
第 2 節 ルイ 9 世の生涯	10
(1) 十字軍出発前—幼い王の即位と成長	10
(2) 十字軍へのお発—信心と挫折.....	11
(3) 十字軍帰還後—政務と有能な側近達	13
第 3 節 ルイ 9 世による受難の聖遺物購入の時代	14
第 2 章 受難の聖遺物の披露	17
第 1 節 受難の聖遺物とはなにか	17
第 2 節 聖遺物のパリ到着当日（1239 年 8 月 18 日及び 1241 年 3 月 29 日）の様子—同時代の人々の記述より	18
(1) ギョーム・ド・ナンジ	19
(2) ゴーティエ・コルヌ	22
(3) マシュー・パリス	25
(4) ジョフロワ・ド・ボーリユー	28
(5) ギョーム・ド・シャルトル	30
(6) 複数の記述から再構成する当日の状況	32
第 3 節 ルイ 9 世による受難の聖遺物披露の意義	34

第3章 公開された場としてのサント＝シャペル	36
第1節 サント＝シャペルの特徴と歴史.....	36
(1) 建設時期と建設後の歴史	36
(2) サント＝シャペルのモデル	36
(3) 研究史	37
第2節 贖宥状の発行—サント＝シャペルに招かれた人々（1244 年 から 1265 年）	38
(1) サント＝シャペルの贖宥に関する史料	38
(2) サント＝シャペルの贖宥の意義	42
第3節 礼拝規定書（Ordinal）に登場する人々（14、15 世紀）	44
(1) サント＝シャペルの礼拝規定書に関する史料.....	44
(2) 礼拝における人々の行動	47
第4節 礼拝堂内の装飾—聖遺物を伝える内装.....	48
(1) グランド・シャッス	48
(2) ステンドグラス.....	49
第5節 聖遺物の公開の場としての検討.....	51
結論	53
参考文献.....	55
参考図	60

はじめに

本稿では、13 世紀のフランス王ルイ 9 世（在位：1226-1270 年）が行った聖遺物コレクションについて検証する。ルイ 9 世とは、カペー朝の王の一人であり、そしてフランスで列聖された唯一の王である。それ故にこの王についての研究はフランス国内だけでも膨大な数が存在する一方で、後世の彼への評価はいずれの研究においてもある共通性を持っている。その共通性とは、しばしばこの王の美德として引き合いに出される、慈愛、正義、平和である¹。彼は正義と慈愛を基盤に平和を保つため「諸侯にたいしては君主、教会にたいしては正義の王、そして諸王にたいしては調停者としてふるまった」という評価がなされてきた²。一方で、慈愛には反するような気性の荒さや、「いかなる王よりも権威的で家臣にも高位聖職者にも容赦しない」³一面も持ち合わせた王とも評されてきた。

次に、このような評価をルイ 9 世に与えてきた、具体的な研究を挙げていく。最も古く最重要な研究は 1698 年に没した Louis Sébastien Le Nain de Tillemont の *Vie de Saint Louis : Roi de France*⁴である。これは現在では残っていない史料を利用し、全体を見通す視点が充実している点で重要な研究となっている⁵。そしてこの著作がルイ 9 世研究の始まりとするなら、ジャック・ル＝ゴフの *Saint Louis* (1996 年)⁶によってそれまでの様々な研究が統合され、一つの完成形となったと言える。ル＝ゴフの功績は、多様な史料を再構成してルイという王の人生の伝記を完成させたことであるが、それが高く評価される所以の一つは、ルイの治世全体を明らかにしている文献が存在していないという実態にある⁷。例えば、H.Wallon の *Saint Louis et son temps* (1876 年)⁸や Élie Berger の *Saint Louis et Innocent IV; étude sur les rapports de la France et du Saint-Siège* (1893 年)⁹、同著者の *Histoire de blanche de castille, rein de France* (1895 年)¹⁰は全体の研究書としての質の高さにもかかわらず、治世全体の再構成はなされていない¹¹。

その他のルイの治世全体を取り扱っている研究は以下の通りである。Charles Victor Langlois は *Saint Louis, Philippe le Bel, les derniers Capétiens directs (1226-1328)* (1901 年)¹²においてルイ 9 世とフィリップ 4 世二人の王について論じている。William. C.

¹ 佐藤彰一、中野隆生編『フランス史研究入門』、山川出版社、2011 年、83 頁

² 柴田三千雄、樺山紘一、福井憲彦『フランス史』1（世界歴史大系）、山川出版、1995 年、210 頁

³ 福井憲彦編『フランス史』（世界各国史、12）、山川出版社、2001 年、120 頁 一部改編。

⁴ Louis Sébastien Le Nain de Tillemont, *Vie de Saint Louis : Roi de France*, publiée par J. de Gaulle, 6vol., Paris, 1847-1851

⁵ ジャック・ル＝ゴフ著、岡崎敦、森本英夫、堀田郷弘訳『聖王ルイ』、新評論、2001 年、1170 頁

⁶ Le Goff, J., *Saint Louis*, Paris, 1996 尚、本稿においてはル＝ゴフ、前掲書、2001 年の翻訳本を使用している。

⁷ Fawtier, R., translated by Butler, B. and Adam, R.J., *The Capetian Kings of France : Monarchy & Nation*, London 1960, p.11 尚、このような実態は文書の不足によるものであるが、これはルイ 9 世にだけでなくフィリップ 4 世も同様である。

⁸ Wallon, H., *Saint Louis et son temps*, Paris, 1876, 2vol

⁹ Berger, É., *Saint Louis et Innocent IV : étude sur les rapports de la France et du Saint-Siège*, Thorin, Paris, 1893

¹⁰ Berger, É., *Histoire de blanche de castille, rein de France*, Paris, 1895

¹¹ Fawtier, R., *Ibid*, pp.11-12, n8

¹² Langlois, C.V., *Saint Louis, Philippe le Bel, les derniers Capétiens directs (1226-1328)*, Paris, 1901

Jordan は *Louis IX and the Challenge of the Crusade : a Study in Rulership* (1979 年)¹³ においてルイが行った十字軍の過程を明らかにした。そして Jean Richard は *Saint Louis : roi d'une France féodale, soutien de la Terre sainte*, (1983 年)¹⁴においてルイの統治における平和の理論と実践による特異性を描いている。そして Alain Saint-Denis は *Le siècle de saint Louis* (1996 年)¹⁵において簡潔ながらも明確にルイの一生を捉え、彼の治世の中心となるいくつかの出来事について著している¹⁶。また、人口や技術革新といった具体的なデータを用いてルイ 9 世時代の社会について考察しているものが Gérard Sivéry による *Saint Louis et son siècle* (1983 年)¹⁷である。

テーマ別の研究については膨大な数が行われているが主要ないくつかをここで挙げる。列聖の手続きについては Louis Carolus-Bareé の *Le procès de canonisation de Saint Louis* (1995 年)¹⁸において失われた文書の復元が試みられている。また Robert Folz は *Les saints rois du moyen âge en Occident* (1984 年)¹⁹において、中世を通してさまざまな地域に出現する聖なる王が、いかにして当時の人々の間で「聖王」として認識され得たかについて検証した。そしてその一例としてルイ 9 世を取り上げ、彼が後世に伝説を新しく作る必要無く聖人として当時の人々に認知されていたという特殊性を指摘している。王が十字軍から帰還後特に懇意にしていたシトー修道会については、Anselme Dimier の *Saint Louis et Cîteaux* (1964 年)²⁰に詳しい。同時代の重要な人物との関係については、王の弟アルフォンス・ド・ポワティエ²¹をめぐって Edgard Boutaric が *Saint Louis et Alfonse de Poitiers* (1870)²²で、ほぼ同時代を生きた神聖ローマ皇帝フリードリヒ 2 世²³に

¹³ Jordan, W.C., *Louis IX and the Challenge of the Crusade : a Study in Rulership*, Princeton, 1979

¹⁴ Richard, J., *Saint Louis : roi d'une France féodale, soutien de la Terre sainte*, Paris, 1983 尚、本稿では英訳版の Richard, J., Translated by Birrell, J., *Saint Louis : Crusader King of France*, New York, 1992 も参考にしている。

¹⁵ Saint-Denis, A., *Le siècle de saint Louis*, Paris, 1996 尚、本稿では、アラン・サン＝ドニ『聖王ルイの世紀』、白水社、2004 年の翻訳本を使用している。

¹⁶ この他にも *Septième centenaire de la mort de saint Louis : actes des colloques de Royaumont et de Paris, 21-27 mai 1970*, publiés par Louis Carolus-Barré, Paris, 1976、Pernoud, R., *Un chef d'état, Saint Louis de France*, Paris, 1960 などが注目すべき伝記として挙げられる。

¹⁷ Sivéry, G., *Saint Louis et son siècle*, Paris, 1983

¹⁸ Carolus-Bareé, L., *Le procès de canonisation de Saint Louis (1272-1297) : essai de reconstitution*, Rome, 1995

¹⁹ Folz, R., *Les saints rois du moyen âge en Occident : (VIe-XIIIe siècles)*, Société des Bollandistes, Bruxelles, 1984

²⁰ Dimier, A., *Saint Louis et Cîteaux*, Paris, 1964

²¹ アルフォンス・ド・ポワティエ 1220-1271 年 ルイ 8 世の息子、ルイ 9 世の弟として誕生。1241 年よりポワティエ伯となるが、イングランド王に支えられた貴族たちの反乱が起こりルイとともにこれを鎮圧した。1249 年よりトゥールーズ伯となる。義父レーモン 7 世の死 (1250 年) によりサントンジュ、オーヴェルニュ、ローヌ谷一部を相続し、広大な領土を持つこととなる。1248 年、1270 年の両十字軍に参加し、その最中の 1271 年に病死した。Kibler, W., and, Zinn, G., edited, *Medieval France : an Encyclopedia*, p.27 参照。尚、それぞれの伯領の位置などは図 1 「ルイ 9 世没時のフランス王国」に示す。

²² Boutaric, E., *Saint Louis et Alfonse de Poitiers : Étude sur la réunion des provinces du Midi & de l'Ouest à la couronne et sur les origines de la centralisation administrative d'après des documents inédits*, Paris, 1870

²³ 神聖ローマ皇帝フリードリヒ 2 世 在位：1212-1250 年 武芸、文芸的教養を持ち、特に文学については造詣が深かった一方で、皇帝と教皇の対等を主張し、たびたび教皇と対立し生涯で二度破門された。『キリスト教大事典』、931 頁参照。

については、Robert Fawtier が *Saint Louis et Frédéric II* (1950 年)²⁴で、イングランド王ヘンリー 3 世²⁵との関係については Gavrilovitch が *Etude Sur Le Traite de Paris de 1259 Entre Louis IX, Roi de France, Henri III, Roi D'Angleterre* (1899 年)²⁶でそれぞれ論じている。さらに、ルイの宮廷美術については Robert Branner の *St Louis and the Court Style in Gothic Architecture* (1965 年)²⁷、及び *Manuscript Painting in Paris during the Reign of Saint Louis : a Study of Styles* (1977 年)²⁸に詳しい。そして彼の治世の中でもっとも注目されてきた十字軍については、前述の William Ch. Jordan の研究に詳しいが、特に出立に利用されたエーグ・モルトについては同著者による *Supplying Aigues-Mortes for the Crusade of 1248 : the Problem of Restricting Trade* (1976 年)²⁹で詳しく述べられている。その他にも十字軍については Étienne Delaruelle による *L'idée de croisade au moyen âge* (1980 年)³⁰といった研究がある。領地の統治については Robert Michel の *L'administration royale dans la sénéchaussée de Beaucaire au temps de Saint Louis* (1910 年)³¹、Joseph Reese の *The Administration of Normandy under Saint Louis* (1932 年)³²、同著者による *La conscience du roi. Les enquêtes de 1258-1262 dans la sénéchaussée de Carcassonne-Béziers*, (1974 年)³³といった研究がなされている。

ルイ 9 世については以上のように様々な観点から研究が行われてきた。数多くいるフランス王の中で、ルイ 9 世がこのように特別に着目されていることについて、以下では彼の前後の王、フィリップ 2 世、フィリップ 4 世と比較しつつその特殊性を述べる³⁴。彼らはそれぞれ異なる方法で、カペー王朝を発展させた王達である。

フィリップ 2 世は、父ルイ 7 世の連立王となった直後の 1179 年に即位し、その治世は 43 年及んだ。彼の治世は国外においては対イングランドとの関係を軸に進んだ。イングランドのリチャード獅子王、続くジョン王との対立は、フィリップ、リチャード両王が共に

²⁴ Fawtier, R., *Saint Louis et Frédéric II*, dans convegno internazionale di studi federiciani, Palermo, 1950

²⁵ イングランド王 ヘンリー 3 世 在位：1216－1272 年 父ジョン王が失ったノルマンディ、アンジュー、アキテーヌの大半を取り戻すべく外交的、軍事的圧力をかけるも、1259 年にガスコーニュの領有の代わりにこれらを正式に手放すこととなった。ルイ 9 世とは妻同士を介し義理の兄弟の関係にあった。
Medieval France : an Encyclopedia, pp.442-443

²⁶ Gavrilovitch-M, *Etude Sur Le Traite de Paris de 1259 Entre Louis IX, Roi de France, Henri III, Roi D'Angleterre*, Paris, 1899

²⁷ Branner, R., *St Louis and the Court Style in Gothic Architecture*, London, 1965

²⁸ Branner, R., *Manuscript Painting in Paris during the Reign of Saint Louis : a Study of Styles*, Berkeley, 1977

²⁹ Jordan, W.C., "Supplying Aigues-Mortes for the Crusade of 1248 : the Problem of Restricting Trade" in *Order and innovation in the Middle Ages : Essays in honor of Joseph R. Strayer*, edited by Jordan, W.C., and, McNab, B., and, Ruiz, T.F., Princeton, 197, pp.165-172

³⁰ Delaruelle, É., *L'idée de croisade au moyen âge*, Torino 1980

³¹ Michel, R., *L'administration royale dans la sénéchaussée de Beaucaire au temps de Saint Louis*, Paris, 1910

³² Strayer, J.R., *The Administration of Normandy under Saint Louis*, Paris, 1932

³³ Strayer, J.R., "La conscience du roi. Les enquêtes de 1258-1262 dans la sénéchaussée de Carcassonne-Béziers" Tillemont, dans *Mélanges Roger Aubenas*, Montpellier, 1974

³⁴ 実際にはそれぞれの間にはルイの父（ルイ 8 世）と息子（フィリップ 3 世）が王位についているが、彼らの治世は共に短いものであったので割愛した。

第3回十字軍に参加したにもかかわらず、先に帰国したフィリップがジョンと組みノルマンディを獲得したことから始まった³⁵。フィリップはアッコンの争奪戦に参加していたにもかかわらず、フランドル伯の相続問題を優先し聖地への進軍を中止しており、このことは宗教心と世俗の統治関係において、ルイ9世との違いを象徴的に表す出来事として捉えることができる³⁶。ノルマンディをフィリップに奪われたリチャードは、ジョンと和解後にフランス軍をフレルトヴァルに追いつめるが、教皇インノケンティウス3世によって和解が調停される³⁷。しかしリチャードは城壁シャトー・ガイヤールを築き反撃を開始し、その結果フィリップは1199年にヴェルノンで敗北することとなる。リチャードの死後ジョンが即位すると、フィリップはすぐに反撃を開始するも、妻との離婚問題によって教皇との関係が陰悪になり、止むなく1200年に休戦条約を結ぶ。しかし、その後シャトー・ガイヤールを陥落させ、1204年にノルマンディの領有に成功すると、1214年にはブーヴィーヌの戦いで、イングランド王、オランダ地方とロレーヌ地方の諸侯、神聖ローマ皇帝の連合軍に遂に勝利し、国際政治での彼の威信を決定づけた³⁸。

フィリップ2世は対外的な戦争だけではなく、その内政面での功績も評価に値するものであった。彼は即位の翌年、教会による利子の禁止を理由にユダヤ人（高利貸したち）を追放し、没収した財産を国庫に充てた³⁹。それまでのプレヴォ職を廃止し、バイイ=セネシャル制⁴⁰を導入したのも彼である。パリの街もフィリップの下大きく変わることとなり、市壁の建設、道路の舗装、街区の整備が行われ、右岸にはルーヴル要塞が建設された⁴¹。彼はまさに「中世フランス王権の定礎たらしむるに十分な内実を持った」⁴²王だったのである。

一方で、ルイ9世の孫にあたるフィリップ4世（在位：1285-1314年）については、彼の人となり伝える詳しい史料が残されていない⁴³。彼もまた、外国との戦争を行い、そして法学を学んだレジスト（法学者）達に支えられながら、フランスの国家機構を整備した人物である。フィリップ4世は婚姻を通じてナヴァル王国とシャンパーニュ伯領を獲得した。さらに一度は1302年のクールトレの戦いでフランドル諸都市に敗北するものの、1312年のポントワーズ条約によってリール、ドゥーエ、ベテューヌを獲得し、この結果王国の統一がほぼ完成された⁴⁴。彼の治世における争いは外国勢力に向けられたもので、その一つが教皇ボニファティウス8世との争いであった。二人の対立は、フィリップの軍事費のための課税に対する教皇の反対から始まった。1297年に一度収まるものの、1301年のパミエ

³⁵ 柴田三千雄、樺山紘一、福井憲彦、前掲書、208頁

³⁶ 後述のようにルイ9世は周囲の人々の反対を押切り第7回十字軍に参加した。

³⁷ 当時スペインにイスラム教徒が進軍し、キリスト教徒が危機にさらされているという知らせが届いたため、教皇は二国の争いを一度和解した。柴田三千雄、樺山紘一、福井憲彦、前掲書、208-209頁参照

³⁸ 佐藤彰一、中野隆生編、前掲書、82頁

³⁹ 佐藤彰一、中野隆生編、前掲書、82頁

⁴⁰ バイイ、セネシャルはいずれも国王によって任命された地方役人である。バイイ制度は元来ノルマンディ大公領土で12世紀のはじめから取り入れられていたアングロ・ノルマンの地方行政の仕組みで、国王の内廷の騎士の中から選ばれた数人が一組になって巡回して統治を行った。1230年代になると明確な管轄領域を有するようになる。対してセネシャルは、領邦君主の廷臣を起源としており、12世紀後半にプランタジネット朝のヘンリー2世によって地方役人として起用されるようになった。その後、1204年にカペー家がプランタジネット朝の大陸領土を没収した際に、フランス王がこれらの地域にセネシャルの職を認め、残されることとなった。佐藤彰一、中野隆生編、前掲書、92-93頁参照。

⁴¹ イヴァン・コンボー著、小林茂訳『パリの歴史』、白水社、2002年、29-34頁

⁴² 佐藤彰一、中野隆生編、前掲書、83頁

⁴³ 柴田三千雄、樺山紘一、福井憲彦、前掲書、213頁

⁴⁴ 柴田三千雄、樺山紘一、福井憲彦、前掲書、214-215頁

司教ベルナル・セセの逮捕を機に再燃し、1302年には大勅書「ウナム・サンクタム」の中で世俗の王に対する教皇権の優位が強調され、争いは激化した⁴⁵。これに対してフィリップは、フランス教会とローマ教皇の利益どちらを優先させるべきか問うため1303年6月からパリで全国三部会を、また各地で三部会を開き、これらの決議を背景にローマ法に従い教皇の身柄を拘束した⁴⁶。以降の教皇権の弱体化していったのに対し、三部会を通して王国の全勢力を集結させたフィリップ4世は「名実ともに国王の完全な最高君主となった」⁴⁷のである。

さらにフィリップ4世は領地、聖俗だけでなく、国家機構の統一も目指し、その一環として1307年10月にフランス全土でテンプル騎士団⁴⁸を一斉逮捕し、王権によって会計検査院が完全掌握されることとなった⁴⁹。この逮捕は、ボニファティウス8世の拘束と同様に、ローマ法に則て行われた。このようにフィリップ4世は「法」という手段をレジスト達と共に巧みに利用した王でもあった。しかし彼以降の国王はいずれも短命であり、且つ男子相続人を残せなかったためカペー家は途絶えることとなった。

フィリップ2世およびフィリップ4世と比較した時、ルイの治世で最も異なる点は、外国勢力との争いの有無であろう。確かにルイ自身も十字軍を率いているが、13世紀当時の平和とはあくまでキリスト教世界の中に限定されたものであり、異教徒と戦うことは教皇や同じキリスト教国と争うこととは区別されていた⁵⁰。ルイ9世の前後二人の国王にとって、「戦いと勝利」が王権を存続させる手段であったとすれば、ルイにとっては特定の対立相手及び同盟相手を作らないことこそが、カペー王朝を、そしてフランスを守り維持していく最大の方策であったと言えるだろう。

さて、このように平和を追求し、またはそれを手段とした王が、「個人的」⁵¹な活動の一つとして行ったのが、聖遺物の購入とコレクションである。ルイは1239年、1241年に複数の聖遺物を集めるため購入し、披露し、さらにこの聖遺物ためのサント＝シャペルを建設した。この一連の出来事については、彼の敬虔さの良き例、もしくは聖遺物への若干の偏愛、という評価がなされてきた。例えばル＝ゴフは「ルイはまた、ほとんどフェティシズム的な聖遺物愛好者であった」⁵²と述べている。しかし、それはあくまで「収集」「購入」という面に焦点が当てられてきた結果と言える。これらの購入されたコレクションは様々な方法で公開されてきたにもかかわらず、その面についての検討は充分には行われてこなかった⁵³。しかしながら、彼の個人的なコレクションであるにもかかわらず、これらの

⁴⁵ 柴田三千雄、樺山紘一、福井憲彦、前掲書、2116-217頁

⁴⁶ 柴田三千雄、樺山紘一、福井憲彦、前掲書、217頁

⁴⁷ 柴田三千雄、樺山紘一、福井憲彦、前掲書、217頁

⁴⁸ 1118年に十字軍騎士ユークが第一回十字軍参加者に呼びかけ、聖地への巡礼者保護のために作った組織。やがてヨーロッパ本土での金融や運送を担うようになり、フィリップ2世の時代より王室金庫の最高管理者となる。

⁴⁹ 佐藤彰一、中野隆生編、前掲書、93頁

⁵⁰ 佐藤彰一、中野隆生編、前掲書、83頁

⁵¹ ここでは、他国への協力要請や課税による資金調達が行われた十字軍や法制度の改変といった王としての職務と区別するものとして「個人的」という言葉を用いている。

⁵² ル＝ゴフ、前掲書、983頁

⁵³ これについて Edina Bozoky はこの聖遺物到着時の披露という行為に着目し、そこには旧約聖書、ビザンツ、カロリング朝の後継者としてのルイの意識が表れていると指摘している。（これについての詳細は第3章、第1節で述べる。）ただし彼女の研究は聖遺物到着当日についてのみ検証しており、サント＝シャペルでの公開を含めた総合的な公開性については論じていない。

Bozoky, E., "Saint louis , ordonnateur et acteur des rituels autour des reliques de la passion", dans *La*

聖遺物が王にのみ独占されず、彼以外の、さらに限定するなら王族でも聖職者でもない一般の民衆に公開されていたということについて、その目的や方法を考察することで、新たなルイ 9 世像を示すことができるのではないだろうか。本稿ではこの観点から、聖遺物のパリ到着時の様子、そして安置場所であったサント＝シャペルでの公開に着目し、これらの一連の行為が示す新しい歴史的意義について以下で検討する。

Sainte-Chapelle de Paris : Royaume de France ou Jérusalem céleste? : Actes du Colloque, Hediger, C. (éd), Belgium, 2007, pp.19-34

第1章 聖遺物とルイ9世

第1章では、第2章以降で検証する聖遺物とルイ9世についての基本的な情報を述べる。第1節では聖遺物が信仰される背景、第2節ではルイ9世の生涯、第3節では聖遺物の購入の時期に絞って検討している。

第1節 聖遺物の信仰

聖遺物崇敬の前提には生前の保持者である聖人崇敬があり、そしてその聖人を聖人たらしめるには「死」、特に殉教という要素が重要である⁵⁴。しかし、392年のキリストが国教化することによって殉教が停止、減少すると、聖人の概念は本来の枠を超えて広がっていくこととなった。その広がり「神＝信仰」、「聖人＝崇敬」として教会が差別化を訴えなければならぬほどであったが、実際の一般信徒にどれくらいこの意識が浸透していたかは不明である⁵⁵。

このような殉教が軸となった聖人から派生した聖遺物が崇敬される原理については2つの意見がある。青山は、迫害などに耐え凌いだ精神は死をもって神との繋がりを持つ、つまり聖性が宿るのは死後と考えているのに対して⁵⁶、秋山氏は「ウィルトゥス」という力が生前神によって与えられ、これによって奇跡が起きる、という見解を述べている⁵⁷。双方の見解の検討は本稿の目的とは異なるため避けるが、いずれにせよ聖人が持つ聖性が神によって与えられているという点では共通しており、聖人は1つの媒体に過ぎないということが言える。加えて、分割された遺体及びそれらが触れた物にも聖性が伝播していくという特殊性についても双方で一致している⁵⁸。

聖遺物崇敬の最古の記録は2世紀半ばの『ポリュカルポスの殉教録』である⁵⁹。ここでは聖人の処刑後信奉者たちが遺灰を集め埋葬し、その後命日に集会を開き故人を祈念したことが記されている。聖遺物と権力の繋がり、初期の例としては、365年コンスタンティヌス2世による、使徒聖ティモテ、聖アンドレそして聖ルカの遺体の新都コンスタンティノープルへの奉還が挙げられる⁶⁰。これは新都コンスタンティノープルの聖性を補強するための聖遺物の利用であり、国教化以前からこのような権力と聖遺物の結びつきがあったことが分かる。

聖遺物は中世において数え切れないほど存在し、そして日々増え続けていた。秋山氏は、聖遺物の分類を以下のように行っている⁶¹。すなわち①「聖なる人の遺体、遺骨、遺灰など」、②「聖なる人が生前に身にまったり、触れた事物」、③「①ないし②の聖遺物に触れた事物」という分類で、それぞれの聖性は数字の順に低くなっていく（①>②>③）。キリストやマリアは原則として遺体が地上に残っていないため、彼らの最高位の聖遺物は「触れたもの（②）」ないし「聖遺物に触れた事物（③）」となり、それは他の聖人の聖遺物に勝る聖性を持っていた。その中でも特にキリストの受難の聖遺物は大変重要なものとして崇

⁵⁴ 青山吉信『聖遺物の世界：中世ヨーロッパの心象風景』、山川出版、1999年、7頁

⁵⁵ 青山、前掲書、11頁

⁵⁶ 青山、前掲書、6-9頁

⁵⁷ 秋山聰『聖遺物崇敬の心性史：西洋中世の聖性と造形』、講談社、2009年、16-17頁

⁵⁸ 青山、前掲書、14-15頁及び秋山、前掲書、18-19頁

⁵⁹ 秋山、前掲書、30-31頁

⁶⁰ 秋山、前掲書、33頁

⁶¹ 秋山氏による聖遺物の分類は全て、秋山、前掲書、16頁を参照。

敬された⁶²。この受難の聖遺物のうちの1つが、キリスト教を公認したコンスタンティヌス大帝の母であるヘレナ（250 頃-330 年頃）によって発見された聖十字架である。当初その半分をイェルサレムに、半分をコンスタンティノープルに保存するはずであったが、すぐに拡散したことが、4 世紀半ばイェルサレム司教キュロスの証言から分かる⁶³。その他の受難の聖遺物としては、聖槍、茨の冠（荊冠）、四肢を打ち付けた釘、スポンジ（海綿）、腰に巻かれた布、などが挙げられる。

キリストの聖遺物についてのまとまった研究は見られないが、さまざまな地域に散在し、現代まで保管されている場所もある。例えば、ソワソンにはキリストの歯が、サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ聖堂にはへその緒と包皮が、また別の包皮がボワティエとアントワープに保管されていることが有名である⁶⁴。このように教義とは矛盾するにもかかわらず、地上に残された体の一部も聖遺物として発見されるようになり、他にも受難のみならず生涯を通してキリストが触れたものは聖遺物と考えられた⁶⁵。そのためその数は膨大になり、聖性とそれに伴う価値がとても高い一方で、聖遺物としての根拠、つまりキリストとの現実的な繋がりが極めて薄い、という矛盾がキリストの聖遺物にはある。

第2節 ルイ9世の生涯

本節ではルイ9世の生涯を大きく3つに分けて見ていく。ルイの生涯の中で重要な意味を持つ十字軍を区分の基準とし、「十字軍出発前」（1214年から1248年）、「十字軍の最中」（1248年から1254年）、「十字軍からの帰還後」（1254年から1270年）と分けた⁶⁶。

（1）十字軍出発前—幼い王の即位と成長

ルイ9世は1214年、ルイ8世（在位：1223年から1226年）とブランシュ・ド・カステイユ（1188年から1252年、カステイリャ王アルフォンス8世の娘）の次男として誕生した⁶⁷。ルイが生まれた年は、偉大なる祖父フィリップ2世が未だ王位に就いており、まさにブーヴィーヌの戦いで勝利を収めた年であった。ルイは存命中の祖父王と面識があり、様々な教えを受けると周囲の人々にその話をしていたと伝えられている⁶⁸。1223年にフィリップ2世が亡くなると、父ルイ8世が王位を継ぎ、1225年6月にルイ9世が王位継承者となった。しかしわずか1年後の1226年にこの国王は亡くなり、ルイは12歳で王位に就くこととなった。この時彼は騎士の叙任もまだ済んでおらず、そのためソワソンに寄り叙任を済ませた後、早急にランスで聖別された⁶⁹。ル＝ゴフが述べるところによると、年代記作者たちはこの叙任式について以下の3つの点に留意している。第一にこのルイの叙任式が済ませられていなかったこと、第二に早急に聖別式が執り行われたこと、第三にこの聖

⁶² 秋山、前掲書、19-22 頁

⁶³ 秋山、前掲書、20 頁

⁶⁴ 岡田温司『キリストの身体：血と肉と愛の傷』、中央公論新書、2009 年、144 頁

⁶⁵ このような矛盾は11世紀の神学者ギベール・ド・ノジャンによって批判されたが、聖遺物崇敬は急速に広まった。このことについてシュミットは、受肉という思想がキリスト教特有の表象と実践に影響を与えていると指摘している。ジャン＝クロード・シュミット著、小池寿子訳『中世の聖なるイメージと身体：キリスト教における信仰と実践』、刀水書房、2015、269 頁

⁶⁶ この区分に応じた年表を図4「ルイ9世の生涯」に示す。

⁶⁷ 彼には王位継承権を持つ兄フィリップがいたが、1218年になんらかの理由でこの兄が亡くなり、ルイが嫡男となった。尚ルイを中心とした家系図を図3「ルイ9世とその一族」に示す。

⁶⁸ アラン・サン＝ドニ、『聖王ルイの世紀』、2004 年、72 頁

⁶⁹ Richard, R., “L’adoubement de Saint Louis”, in *Journal des savants*, 1988, pp.208-217

別式に有力諸侯たちが欠席したことである⁷⁰。とりわけ第三の欠席の問題については、政治的な動機を与えているが、これは聖別式後にルイを襲った諸侯たちの反乱という困難から彼らが判断した誇張であるとル＝ゴフは指摘している⁷¹。

このように早急に王位に就いた王は幼く、外国から嫁いできた母が摂政であるという、未だ磐石とは言い難い状態の中で、ルイ 9 世、そして母ブランシュは治世を開始した⁷²。彼の即位から十字軍までの間には、大別して 3 つの大きな問題が起きた。第一にシャンパーニュ伯ティボー 4 世をめぐる戦い、第二にプランタジネット朝との対立、第三にトゥールーズ伯レーモン 7 世とのラングドックをめぐる問題である⁷³。これらについては第 3 節で述べることにするが、結果的には、王は全ての危機に打ち克つことに成功している。このように、12 歳から 20 代中頃という成長期に、ルイは優秀な顧問官たちに補佐されながら、的確に混乱を解消していった。そこには単なる力による圧力ではなく、反乱者に対する寛容さも表れており、その後の彼の治世を予感させるものである。

このような同時進行的な混乱の中賢明な王に成長していく途中で、ルイは 1234 年 5 月 27 日にプロヴァンス伯レモン・ベランジェの娘マルグリット(1221-1295 年)と結婚した⁷⁴。彼女の姉妹たちはそれぞれルイの弟シャルル・ダンジュー⁷⁵、イングランド王ヘンリー 3 世に嫁いでいる⁷⁶。二人は後に子を 11 人もうけるが、3 人が他界した。

結婚から 5 年後の 1239 年にルイ 9 世はラテン皇帝ボードアン 2 世⁷⁷より茨の冠（以下荊冠）を、続いて 1241 年にはその他の受難の聖遺物を購入し、同年から 7 年で国王の礼拝堂であるサント＝シャペルを建設した。

（2）十字軍への出発—信心と挫折

1248 年から 1254 年の 7 年間、ルイ 9 世は第 7 回十字軍を率いた。彼がこの十字軍への出発を思いついたのは、1242 年に彼が患った大病（おそらく赤痢）であったと言われてい⁷⁸。そこには二重の彼の希望があったと考えられる。すなわち、彼の個人的な悔悛と、キリスト教徒として聖地を救いたいという願望である。しかし彼のこの願いにはいくつかの

⁷⁰ ル＝ゴフ、前掲書、116-118 頁

⁷¹ ル＝ゴフは、この聖別式がとりわけ急いで行われたため、式典に間に合う準備する時間的余裕がなかったこと、成人社会で生きる大人にとって子供の聖別式は特別惹きつけられるものではなかったことを根拠として挙げている。ジャック・ル＝ゴフ、前掲書、120-122 頁

⁷² ただし、「摂政」（レジャンス）という用語は 14 世紀以降に登場するもので、それ以前においては法的な定義を持った職務ではなく、単に「保護と後見」に限られたものであった。本稿において「摂政」と使う場合は、以上の 13 世紀当時の状況を考慮した上で役職名として用いている。摂政の定義についてはル＝ゴフ、前掲書、101-102 頁を参照。

⁷³ Richard, J., Translated by Birrell, J., *Saint Louis : Crusader King of France*, New York, 1992, p.41

⁷⁴ 結婚式の儀の詳細な日程について、ル＝ゴフは前掲書の中で 1984 年にサンスで行われた展覧会のカタログ *Le Mariage de Saint Louis à Sens en 1234*, Musées de Sens, Sens, 1984 を挙げている。

⁷⁵ シャルル・ダンジュー 1226-1285 年 ルイ 8 世の末息子、ルイ 9 世の弟。1246 年にアンジューとメーヌをアパナージュとして授かり、その後プロヴァンス伯の末娘ベアトリスと結婚しプロヴァンス伯を継承する。イタリアへの勢力拡大を目指し、ローマ教皇の支持を得てホーエンシュタウフェン家を滅ぼし、1266 年にカルロ 1 世としてシチリア王に戴冠された。しかし 1282 年シチリアの晩鐘と呼ばれる大規模な反乱が起き王位を追われ、次にシチリア王となったアラゴン王ペドロ 3 世と争うも、充分な成果があらがないまま 1285 年に没した。 *Medieval France : an Encyclopedia*, p.588

⁷⁶ *Medieval France : an Encyclopedia*, p.199 参照。

⁷⁷ ボードアン 2 世 在位：1228-61 年 ラテン帝国第 3 代皇帝ピエール・ド・クレトネの子で、11 歳でイェルサレム王ジャン・ド・ブリエンヌ（義父）を摂政として最後の皇帝として即位した。1261 年にニカイア帝国軍に占領されたため、ボードアン 2 世は逃走、ラテン帝国は消滅した。『キリスト教大事典』、995 頁参照。

⁷⁸ ジャン・ド・ジョワンヴィル著、伊藤敏樹訳『聖王ルイ：西欧十字軍とモンゴル帝国』、筑摩書房、2006 年、63-64 頁

障害があった。その第一は、周囲の人々の強い反対である。特に母ブランシュは、彼女もまた敬虔なキリスト教徒ではあったが、息子の十字軍行きには強く反対し、諦めさせる努力をした⁷⁹。第二の障害は、共に十字軍に向かう有力者を見つけられなかったことである。彼の必死な外交努力は神聖ローマ皇帝、そして教皇を十字軍へと奮い立たせることはついにできなかった⁸⁰。第三に金銭的な課題が残っていた。ルイは遠征費用に加えて、国王軍およそ 25000 人のための諸費用を準備しなくてはならず、この費用調達のため教会には十字軍上納金の増大が、都市には無償譲渡と借款が強制された⁸¹。さらにイタリアの銀行に前借りも取り付け、とにかく資金調達のために奔走することとなるが、この調達のシステムは全体として比較的うまく機能していたとル＝ゴフは指摘している⁸²。

同時に、この十字軍の準備期間にルイの行政的な能力を見せる場面もあった。1247 年、ルイは托鉢教団に王の役人達のあらゆる不正行為の調査を命じ、これを明らかにした。この目的の一つは損害を被った臣下達の不満を解消し、不在中の王国を安泰に保つことであったが、これだけにとどまらず、1247 年から 1248 年には職務怠慢などで数多くの行政官達が厳しく処分され、十字軍帰還後もそれが続けられた⁸³。

船の出航は、南フランスでの反乱をおさめた際手に入れたエーグ＝モルト⁸⁴から行われた。この港に向かう前にまず、1284 年 6 月 12 日にサン＝ドニで王旗、王授、王杖を受け取ることから十字軍の出発は始まった⁸⁵。パリに戻ったのちに宗教行列とともにサン＝タントワヌ＝デ＝シャンの王家の修道院に行き、祈祷による加護を受け、その後コルベユの王宮に向かった。エーグ＝モルトには 8 月半ばに到着し、船に 8 月 25 日に乗りこんだ。この十字軍には彼の家族のほとんどが同行しており、フランスに残った者は、母ブランシュ、幼い子供たち、妊娠中の義妹アルトワ伯夫人だけであった⁸⁶。

ルイが率いたこの十字軍は、偶発的な不運と軍事作戦の不備が合わさり完全な敗北で終わる⁸⁷。まずキプロス島での逗留は彼の借金をさらに増やし、ダミエッタを 1249 年 6 月 6 日に陥落させるも、次のカイロに進軍させるまで 5 ヶ月を有した。さらにイスラム側の抵抗は強く、翌年 2 月のマンスーラの戦いでは壊滅的な打撃を受け、その上壊血病と赤痢の蔓延、ダミエッタとの連絡の断絶による物資の不足が重なり国王軍は撤退するより他なかった。弱りきった国王軍の前衛部隊は完全に粉砕され、後衛部隊はルイを含めて捕虜となった。しかし王妃マルグリットの努力により、わずか一ヶ月で 20 万リーヴルが集められ、これを夫の保釈金とした⁸⁸。ただし 20 万リーヴルという額は当時の王の年収より少なく、さらに前述した費用調達の高い効率性を考慮すると、決して工面が不可能な額ではなかった⁸⁹。

⁷⁹ ジャン・ド・ジョワンヴィル、前掲書、382 頁、註 1

⁸⁰ アラン・サン＝ドニ、前掲書、92 頁

⁸¹ Jordan, W.C., "Supplying Aigues-Mortes for the Crusade of 1248 : the Problem of Restricting Trade" in *Order and innovation in the Middle Ages : Essays in honor of Joseph R. Strayer*, edited by Jordan, W.C., and, McNab, B., and, Ruiz, T.F., Princeton, 1976, pp.165-172.

⁸² ル＝ゴフ、前掲書、215 頁

⁸³ 1247 年のこの調査については、ル＝ゴフ、前掲書、217 頁を参照。

⁸⁴ エーグ・モルトは、第 3 節で述べるように 1229 年のモース条約で手に入れられた新しい地域であった。そのため出発が決定した時点では港が建設されておらず、このように新しく、そして国外の港の方が政治的な不安定さを回避できると判断されたため選ばれた。尚、エーグ・モルト及びその他本稿で扱う地名については図 2 「ルイ 9 世のフランス」に示す。

⁸⁵ 十字軍出発の過程についてはル＝ゴフ、前掲書、226-230 頁を参照

⁸⁶ ル＝ゴフはこのような親族の同伴に、この十字軍をあくまで家族の遠征という形にしようとしたルイの意図を指摘している。ル＝ゴフ、前掲書、228 頁

⁸⁷ ルイは特にイスラムについての知識を十分に持ち合わせていなかった。ル＝ゴフ、前掲書、218 頁

⁸⁸ 正確には 20 万リーヴルに相当する 40 万ブザンを用意した。ブザンはビザンツ帝国の金貨。ル＝ゴフ、前掲書、236 頁

⁸⁹ 例えば、リチャード獅子王（1157-1199 年）は当時の王の年収の約四年半分である 50 万リーヴルを第 3 回十字軍に充てている。W.C.Jordan, *Louis IX and the Challenge of the Crusade : A Study in*

王のマンスーラの戦いでの敗北はヨーロッパ中に知れ渡り動揺を生んだが、有力者からの支援が向けられることはほとんど無かった。そればかりか「羊飼十字軍」⁹⁰のようなさらなる混乱をフランス国内にもたらしていた。しかし同時に、王という地位に拘らず十字軍の一員として戦った姿は、ルイの勇猛な精神についての評判を上昇させ、最後の捕虜が釈放されるまで聖地に留まった徳義心も賞賛された⁹¹。ここには彼の、「聖地に身をもって存在することが、(中略) どうしても必要である」⁹²という考えもあったのだろう。しかし賞賛された王の正義とは、十字軍の理想が残る中世においてあくまで多くの犠牲によって輝かしく作り上げられたイメージであることは忘れてはならないだろう。

1254 年、王は聖地を後にするが、この時すでに王不在の間フランスを守っていた母ブランシュが亡くなってから 2 年が経過していた。王の嫡男ルイの代わりに国を仕切っていた顧問団への不満の声が湧き上がり、フランドル戦争が勃発し、ヘンリー 3 世とアラゴンとの間に同盟が結ばれるという危機的状況の中王は帰還した。

(3) 十字軍帰還後—政務と有能な側近達

十字軍で苦痛と挫折を味わい、さらに摂政であった母を失ったルイは、国を正義へと導かんとする強い想いと共に帰還し、その後様々な改革を同時期に進めていった。

王はまず、自身を変えることから始めた。服装は極度に質素になり、自分の行動や発言について神から与えられた王としての責務を意識するようになった⁹³。王は自分の政務を「聖務」と捉え、慈悲の心を強く意識すると共に、自らの権限の優越性をより主張するようになった⁹⁴。それ故に、王の権限は個人的な性格が強められ、正しい振る舞いのために聖職者に助言を求めるようになった。特にルイは托鉢修道士たちに宗教的助言を請うことが多く、フランシスコ会士ウード・リゴー、後に教皇マルティヌス 4 世となるフランシスコ会士モンプリ・ド・ブリー、ドミニコ会士ジョフロワ・ド・ボーリュエなどが彼の側近となった。その他にも、シャンパーニュのセネシャルであるジャン・ド・ジョワンヴィル、パリ司教座教会参事会員のロベール・ド・ソルボン、シャンパーニュ伯ティボー 5 世、聖職者では後に教皇クレメンス 4 世となるギー・フコワなどが彼に仕え、能力を発揮していた⁹⁵。

このような有能な側近達の補佐のもと、1254 年には大王令⁹⁶が發布され、1247 年の調査によって明らかになった王国全域の代官達の悪業を是正するために、その担い手を変更することとなった。さらに、これらの悪業や汚職を防ぐため、代官への贈り物の禁止など細かい規定がなされ、土地の人間との癒着を防ぐための定期的な配置換えも加えられた⁹⁷。ルイの優秀な側近達は正義と平和への王の追求を助け、この他にも以下の諸改革を推し進めていった。

司法については、裁判における国王の特権が認められ、王と彼の個人的な顧問官によって訴訟が扱われる宮中裁判が増加した。さらにルイは、諸侯の管轄する訴訟にも介入する

Rulership, 1979

⁹⁰ フランドル、北フランス地方を中心とした民衆運動。「シトー会士のヤーコブ」と呼ばれる「ハンガリーの師」を指導者として、エジプトで捕虜となったルイの救出を目的に掲げていたが実際には土地所有者や聖職者、ユダヤ人を攻撃しながら、北フランス地方を荒らす集団であった。これについては、歴史学研究会編『ヨーロッパ世界の成立と膨張：17 世紀まで』、岩波書店、2007 年、238-239 頁参照。

⁹¹ アラン・サン＝ドニ、前掲書、95 頁

⁹² ル＝ゴフ、前掲書、224 頁

⁹³ ただし外観の変化は十字軍出発の折から見られるものであった。ル＝ゴフ、前掲書、226-227 頁

⁹⁴ アラン・サン＝ドニ、前掲書、100-101 頁

⁹⁵ 側近達については全て ル＝ゴフ、前掲書、270-271 頁を参照 尚、ジャン・ド・ジョワンヴィル及びジョフロワ・ド・ボーリュエについては第 2 章で詳しく述べる。

⁹⁶ 「聖ルイの法令」 *statuta sancti Ludovici* と呼ばれる。ル＝ゴフ、前掲書、265 頁。

⁹⁷ この大王令による一連の改革についてはル＝ゴフ、前掲書、265-269 頁を参照。

ようになり、そのため世俗の領主の法廷離れが進むこととなった。他にも、決闘裁判ではなく証拠や証人の重視、高等法院による判例の作成、法官の役割の強化、といった今日の司法の形に近い体制が作り上げられた⁹⁸。

さらにルイは財政管理を遅らせる原因であった多様な通貨の問題にも着手した。これに関する改革は、1262年から1270年にかけて複数回行われた。まず、王の貨幣の流通を独占するため王の貨幣の模造が禁止され（1262年）、次にイングランド貨幣の使用を禁止し（1262年から1265年の間に発布）、さらにこの貨幣の流通の最終日を1266年8月中旬に決めた（1265年）。そして、新しい条件によるパリ・ドニエ貨の鑄造を再開し、トゥールのグロ貨を新しく作ることを公布し（1266年7月）、最期に金貨のエキュ貨を造ることを命じた（1266年、1270年）⁹⁹。

国内の改革だけでなく、外交関係では長らく行われていた紛争に平和的解決をもたらしている。例えば、フィリップ2世の時代から続くイングランドとの敵対関係は、ヘンリー3世との長時間の会見の後に1258年5月28日のパリ条約によって解決された。加えて彼は正義の王として仲介役を担うこともあり、例えば、フランドル伯マルグリットの2つの嫁ぎ先、アヴェヌヌ家とダンピエール家による継承問題に介入し、公平な解決を与えた¹⁰⁰。

このような国内外の様々な改革や活躍の後、1267年にルイは二度目の十字軍を決め、翌年の総会で1270年5月に出発することを明らかにした¹⁰¹。彼が再び十字軍を決意した背景には4つの要因が考えられている。すなわち①弟シャルル・ダンジュールがシチリア権力を確立させたため安定した基地にできるようになったため、②対イスラムのためのモンゴルとの同盟を諦めたため、③ギリシア人が1261年にコンスタンティノープルを奪回したことで東地中海の北側の沿岸地帯と陸路が彼の手に握られたため、④イスラム勢力の脅威が悪化したため、である。一行は1270年7月1日に船に乗り込み、7月17日に目的地チュニス近くのア・グーレットに上陸する。しかしイスラム教徒の改宗は再び失敗に終わり、さらに蔓延した赤痢（もしくはチフス）によって、息子ジャン・トリスタンに続きルイは8月25日に没した。聖なる王は、彼の死について書き残したジョフロワ・ド・ボーリユーに見守られながら生涯の幕を閉じた¹⁰²。

第3節 ルイ9世による受難の聖遺物購入の時代

ルイ9世が聖遺物を購入した1239年、1241年という時期は、彼の治世においてどのような時代だったのだろうか。この時期の王について考える際、排除することができないのは母ブランシュ・ド・カスティーユの影響である。彼女のように王を亡くした王妃が摂政として活躍する例はブランシュが最初ではなく、むしろ彼女の義父にあたるフィリップが妃を政治的に介入させなかった最初の例である¹⁰³。しかし、ブランシュが担った役割はその先人達よりも重要なものであったのは確かである。ただし、ブランシュの影響力への過剰な注目は、しばしば若きルイの王としての能力を隠してきたという問題もある¹⁰⁴。本稿

⁹⁸ 司法についてはル＝ゴフ、前掲書、290-298頁を参照。

⁹⁹ 一連の通貨の改革についてはル＝ゴフ、前掲書、299-300頁を参照。尚、ル＝ゴフはこれらの措置が首尾一貫した体系的な貨幣計画でなかったと指摘している。（305頁注1参照）

¹⁰⁰ ル＝ゴフ、前掲書、307-309頁

¹⁰¹ ジャン・ド・ジョワンヴィル、前掲書、302-304頁

¹⁰² 以下にジョフロワ・ド・ボーリユーが記したルイの臨終についての和訳が載せられている。ル＝ゴフ、前掲書、357-358頁。尚、原文は *Recueil des historiens des Gaules et de la France*, t.XX, p.23 に収録されている。

¹⁰³ Fawtier, R., *The Capetian Kings of France*, pp.27-28

¹⁰⁴ Richard, J., Translated by Birrell, J., *Saint Louis : Crusader King of France*, New York, 1992, p.1

の中心となる十字軍出発前の時期において、彼女がルイに一定以上の影響を及ぼしていたことは確かである。しかし、我々が現存する史料からルイの行動を再現する際、それが彼自身の意志であるか、または摂政である母のものなのかを区別することは、特定の場合を除いて不可能である。そのため、本稿では第2章以降に論ずる聖遺物に関する一連の行動について、ルイとブランシュを厳密に区別した検証はしないこととする。

十字軍に向かう以前の、特に1226年から1244年にかけて、カペー家にとって避けがたい問題が起きるとともに、これらが解決されていったのもまさにこの時期であった¹⁰⁵。そして、王は度重なる反乱以前に、できる限り不安要素を取り除く対策をとっていた。例えば、フィリップ2世の庶子であったブーローニュ伯フィリップ・ユルペル（ルイの伯父にあたる）には、フィリップ2世及びルイ8世から与えられた土地を、フィリップ・ユルペルの死後王に返却するという条件の下、ルイ8世が所有していた城を渡し、終身年金を約束した¹⁰⁶。続いてブーヴィーヌの戦いの裏切り者であったフランドル伯フェルランドを、貴族たちからの要請通り、1227年1月6日に釈放した¹⁰⁷。さらにフィリップ2世によって奪われた所有地の奪還を狙うイングランド王ヘンリー3世に対しては、イングランド王弟コーンウォール伯リチャードを介して1227年に休戦を取り付けた¹⁰⁸。

自身への忠誠のために親族関係を利用することもあった。例えばブルターニュ伯、ラ・マルシェ伯はイングランドとの同盟による反乱の後、忠誠を強固にするため両者の娘をルイの弟と結婚させるを約束した¹⁰⁹。しかしながら、彼が行った懐柔政策は全ての不安要素を取り除くには至らなかった。以下ではこの時代の混乱の原因となった、第2節で挙げた3つの事件のあらましを述べたい。

第一のティボー4世を巡る争いは、彼のシャンパーニュ伯相続についての批判と、その領土拡大政策に対しての隣接地諸侯達の不満が合わさり引き起こされた。ティボー4世は父ティボー3世からシャンパーニュを継いでいたが、この相続はティボー3世以前にシャンパーニュ伯であったアンリ2世伯（ティボー3世の兄）の2人の娘たちの権利を無視したものととして、特に次女フィリピーヌの夫エラル・ド・ブリエンヌが強くこの相続に反対した¹¹⁰。1230年にフィリップ・ユルペル、クーシー族、ドリュ家、サン＝ポール伯の同盟軍はアンリ伯の長女キプロス女王アリスの権益を守るという口実のもとティボー4世を攻め、ルイはこれを仲裁し、アリスのシャンパーニュにおける権利を放棄させると同時に、ティボーにも40000リーヴルの支払いを命じた¹¹¹。

第二は、王がより直接的に巻き込まれたトゥールーズ伯レーモン7世との問題である。ルイは1229年にレーモン7世との間にモータールフ条約を結び、父ルイ8世が介入したアルビジョワ十字軍を終結させた¹¹²。しかし、再び国王の大封臣の中で頭角を現し始めたトゥールーズ伯は、やがてプロヴァンスへの勢力拡大を狙い始める。レーモン・ベランジェに対する反乱に加担し、さらには神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世に近づきプロヴァンス侯領を割愛されている¹¹³。その他にもアラゴン王とイングランド王ヘンリー3世間の同盟に近づくなどして、国王への忠誠に反するようになり、結局1243年には国王軍に降伏しロリス条約が批准された¹¹⁴。しかし度重なるトゥールーズ伯の裏切りにもかかわらず、ルイは決して彼

¹⁰⁵ Richard, J., *ibid*, p.41

¹⁰⁶ ル＝ゴフ、前掲書、122頁

¹⁰⁷ ル＝ゴフ、前掲書、122頁

¹⁰⁸ ル＝ゴフ、前掲書、123-124頁

¹⁰⁹ ブルターニュ伯の娘ヨランドはジャンと結婚した。しかしラ・マルシェ伯イザベルとアルフォンスは婚約のみであった。アラン・サン＝ドニ、前掲書、80頁

¹¹⁰ Richard, J., *Ibid*, pp.42-43

¹¹¹ Richard, J., *Ibid*, pp.45-46

¹¹² ル＝ゴフ、前掲書、129頁

¹¹³ アラン・サン＝ドニ、前掲書、84頁

¹¹⁴ アラン・サン＝ドニ、前掲書、85頁

に対して「復讐をもって報いる」¹¹⁵ことはしなかった。

第三の問題は、イングランド王ヘンリー 3 世との間に生じていた。1227 年の休戦条約にもかかわらず、ヘンリー 3 世はルイの祖父フィリップ 2 世に奪われた領土を取り戻す機会を伺い続けていた。ヘンリー 3 世が目をつけたのが、ラ・マルシェ伯ユーグ・ド・リュジニャンが作り始めていた反フランス王の同盟であった。ラ・マルシェ伯はアルフォンス・ド・ポワティエに臣従礼を捧げなくてはならないことに不満を抱いており、1241 年に公に臣従礼を放棄してトゥールーズ伯レーモン 7 世やラングドックの大部分の諸侯たちと共にこの同盟を作っていた¹¹⁶。当初様子を伺っていたヘンリー 3 世もやがてこれに加わり、1242 年にフランスの上陸するものの、タイユブールでルイの国王軍に敗れることとなる¹¹⁷。頼みの綱であったユーグ・ド・リュジニャンは領地を没収されたため、降伏する他なく、次いでトゥールーズ伯も 1243 年に国王に降伏していたため、ヘンリー 3 世は同盟相手を失い、休戦を余儀なくされた¹¹⁸。

以上のようにルイはいずれの問題も巧みに処理を行い、解決している。聖遺物が購入された 1239 年、1241 年を含めたこの十字軍前までの時期に、ルイはまさに王としての頭角を確実に見せ始めたと言えるだろう。そして、諸侯やイングランドとの争いに勝利する「戦う王」としての素質だけでなく、「聖なる王」としてその敬虔さが具体的に表されるようになるのも、まさにこの時期であった。

例えば、1229 年には父ルイ 8 世の意志を継ぎ修道院を建設することを決定した。この事業の意義とは、単に王の指導の下王権の、つまりロワイモーヨン式の建物が建てられたことではなく、彼自身が建設の労働に参加し、それが「謙譲と贖罪の機会」¹¹⁹となった点である。ルイの信心深さを伝える第二の例は、1232 年に起きたサン＝ドニでの聖なる釘の紛失事件である。この事件のあらましは、サン＝ドニに置かれていた聖なる釘（キリストが磔にされた際に刺されたもの）が紛失し、それを知った王が深く悲しみ、パリ中でこの釘を探すよう命じ、フランス中が落胆するなか、大いなる奇跡のもと釘が発見される、といったものである¹²⁰。ここに、既にルイの聖遺物への熱意をみてとることができる。

このように、ルイが聖遺物を購入した時期は、彼の幼年さ故の困難を乗り越え、王の権利と権威を確立し始めるとともに、後世に「聖なる王」と称されるような敬虔な信仰心が、具体的な行動となって現れ始めた時期であったと捉えることができる。

¹¹⁵ アラン・サン＝ドニ、前掲書、86 頁

¹¹⁶ ル＝ゴフ、前掲書、183-185 頁

¹¹⁷ アラン・サン＝ドニ、前掲書、87 頁

¹¹⁸ ル＝ゴフ、前掲書、147 頁、186 頁

¹¹⁹ ル＝ゴフ、前掲書、147 頁

¹²⁰ ル＝ゴフ、前掲書、150-151 頁

第2章 受難の聖遺物の披露

第2章では、1239年、1241年に聖遺物がパリに到着した際の様子を再構成し、いかにしてこれらの聖遺物の披露が行われたのかを検証する。第1節ではサント＝シャペルに納められた聖遺物について述べ、第2節以降で同時代人が記述した聖遺物到着当日の様子を検討する。

第1節 受難の聖遺物とはなにか

サント＝シャペルには1239年、1241年そして1242年にパリへと到着した、荊冠、聖十字架を含めた以下22点の(表2-1)聖遺物が納められていた。

表2-1 「サント＝シャペルに納められた聖遺物」¹²¹

No.1 キリストの荊冠 (Couronne d'épines)
No.2 聖十字架断片 (Vraie Croix)
No.3 キリストの血 (Sang du Christ)
No.4 産着 (Langes)
No.5 十字架断片 (Fragment de la Croix)
No.6 キリストのイコンからわきでた血 (Sang sorti d'une icône du Christ)
No.7 鞭打ちの首枷 (Carcan de la flagellation)
No.8 マンディリオン (<i>Mandylion</i>)
No.9 聖墳墓でキリストの頭部を支えた石 (Pierre du Sépulcre)
No.10 聖母の乳 (Lait de la Vierge)
No.11 洗礼者ヨハネの後頭部 (Occiput du Baptiste)
No.12 聖ブラシオスの頭部 (Chef de saint Blaise)
No.13 聖クレメンスの頭 (Chef de saint Clément)
No.14 聖シメオンの頭部 (Chef de saint Siméon)
No.15 槍 (Lance)
No.16 勝利の十字架 (Croix trimphale)
No.17 紫のクラミス (マント) (Manteau de pourpre)
No.18 葦 (Roseau)
No.19 海綿 (Eponge)
No.20 衣 (Linceul)
No.21 洗足のときに足を拭った布 (Linge du Lavement des pieds)
No.22 モーセの杖 (Verge de Moïse)

以上の22点は1247年にボードアン2世からルイ9世に宛てられた手紙の中で挙げられたもので、最初の目録とされている¹²²。この中で荊冠 (No.1) のみ1239年に到着し、聖十字架断片 (No.2) から聖シメオンの頭部 (No.14) が1241年9月30日に、槍 (No.15) から

¹²¹ Duarand, J., et, Laffitte, M., *Le trésor de la Sainte-Chapelle*, Paris, 2001, pp.32-33

及び木俣元一「イェルサレム・コンスタンティノポリス・パリ」『西洋美術研究』14、2008年、50頁、註2の和訳を参照。尚、パリ到着の時期毎に並べるため、一部リストの順を変更した。

¹²² ただし、実際には「聖母のベール」も残されているにも関わらず、この手紙の中では挙げられていない。またこの手紙については現物が失われており、複写物のみ残されている。

モーセの杖（No.22）までが 1242 年にパリに運ばれた。本節ではこの 22 点の聖遺物の中で、次節において具体的に取り上げる荊冠（No.1）と聖十字架断片（No.2）の来歴を述べる。

1231 年にパリに運ばれた荊冠（No.1）は、キリストが処刑の際に頭に載せられた、茨でできた冠を指す。10 世紀以前はイェルサレムに置かれており、それ以降にコンスタンティノープルに移されたとされている¹²³。1238 年にボードアン 2 世からルイへの売却が打診され、王は快くこれを引受けコンスタンティノープルに使者を送った。しかしすでにラテン帝国の諸侯達がこの荊冠をヴェネツィアの銀行への担保にしており、使者達が到着した時には既に質流れの形で売却されてしまっていた¹²⁴。同年の 12 月に前述の使者達がヴェネツィアに到着し交渉した結果、ルイがこの売却より先に購入を決定していたという名目のもと、1239 年 2 月にパリへと移されることに決定した¹²⁵。このような経緯でパリにもたらされた荊冠はサント＝シャペルに安置されることとなるが、18 世紀になるとその聖遺物容器が溶かされ、荊冠自体も 3 つに分解される¹²⁶。1870 年に Rehault de Fleury が出版した版画集¹²⁷からはこの聖遺物の詳細が分かり、それによれば直径は 21cm ほどで、いぐさで作られていたようである¹²⁸。現在は復元された聖遺物容器と共にノートル＝ダム大聖堂の宝物庫に置かれている（図 5）。

1241 年以降に運ばれた聖遺物のなかで最も重要なのが聖十字架（No.2）である。前述の通り、これは 4 世紀にコンスタンティヌス 1 世の母ヘレナが発見したと伝えられており、当初コンスタンティノープルと、イェルサレムの 2 カ所に置かれる予定だったが、すぐに拡散したと言われている¹²⁹。その後ペルシアのホスロー 1 世に奪われるが、629 年にヘラクレイオス帝¹³⁰によって奪回され、イェルサレムに戻されたとされている¹³¹。

その他第 2 節の史料で具体的に挙げられている槍（No.15）の聖遺物は、処刑の際キリストを刺したもので、同様のものがヴィエンヌ、クラコフ、ローマ、アルメニアにも見られる¹³²。海綿（No.19）はキリストが水を求めた際に酸味の強い葡萄酒を染み込ませて差し出されたものである。

それぞれの聖遺物の出所については現代も、おそらく購入された当時も不明瞭だったはずである。しかし聖遺物の価値は論理的な裏づけがなくとも十分に存在し得るものであった。

第 2 節 聖遺物のパリ到着当日（1239 年 8 月 18 日及び 1241 年 3 月 29 日）の様子—同時代の人々の記述より

本節では、1239 年及び 1241 年における聖遺物のパリ到着とルイによる披露について取り上げている 5 人の同時代人の記述を検証する。

¹²³ Duarand, J., et, Laffitte, M., Ibid, p.55

¹²⁴ Duarand, J., et, Laffitte, M., Ibid, p.55 及びル＝ゴフ、前掲書、172－174 頁

¹²⁵ ル＝ゴフ、前掲書、174 頁

¹²⁶ Duarand, J., et, Laffitte, M., Ibid, p.55

¹²⁷ Gravure publiée par Ch.Rohault de Fleury dans les *Mémoires sur les instruments de la Passion de N.S.J.C.*, Paris, 1870 引用は Duarand, J., et, Laffitte, M., Ibid, p.57

¹²⁸ Duarand, J., et, Laffitte, M., Ibid, pp. 57-58

¹²⁹ 秋山、前掲書、20 頁

¹³⁰ ヘラクレイオス（ヘラクリウス）1 世：東ローマ皇帝、ヘラクレイオス朝（611-717 年）を築く。在位：610-41 年。『キリスト教大事典』、967 頁参照。

¹³¹ Freeman, C., Holy Bones, Holy Dust : How Relics Shaped the History of Medieval Europe, New Haven, 2012, p.132

¹³² Duarand, J., et, Laffitte, M., Ibid, p.82

尚、分析の際に取り上げる箇所には、以下の凡例に従いながらそれぞれの史料、和訳に印をつけている。

凡例			
太字・・・日付	~~~~~・・・場所	_____・・・人物	
_____・・・動作	□□□□・・・物	■・・・その他	

(1) ギョーム・ド・ナンジ

ギョーム・ド・ナンジはサン＝ドニのベネディクト会修道士であり、ルイ 9 世とその息子フィリップ 3 世の『伝記』、そして『世界年代記』を記した。彼は 1250 年ごろに生まれ、1300 年頃に没したと伝えられている。サン＝ドニでは文書保管係の職に就いていたが、この修道会に入った詳細な時期については不明である¹³³。ルイ 9 世の『伝記』は 1285 年以降、1297 年の列聖のまでに書きあげられ、同時期にフィリップ 3 世の伝記とシジュベール・ジャンブルーから引き継いだ『世界年代記』を作成していた¹³⁴。彼自身は王と面識がなく、おそらくサン＝ドニへの王の骨の到着と埋葬に立ちあったのみと考えられている¹³⁵。ギョーム・ド・ナンジはルイの『伝記』を作成するにあたり、ジョフロワ・ド・ボーリュの伝記とジロン・ド・ランスの伝記を参考にした¹³⁶。ル＝ゴフは『世界年代記』と『伝記』それぞれの作者としてのギョーム・ド・ナンジを区別しなくてはならないと述べている¹³⁷。伝記では「聖なる王」としてのルイを描き出しているのに対し、年代記の記述は客観性を持ち、ルイを世界の歴史の中に組み込まれた王として演出している¹³⁸。

ギョーム・ド・ナンジの年代記中の聖遺物披露に関する記述として、以下の史料 2－1¹³⁹を、聖ルイ伝中の記述として史料 2－2¹⁴⁰を挙げる。

史料 2－1 *Chronicon* 『世界年代記』

MCCXXXIX. Sanctus Ludovicus rex Franciæ fecit sibi coronam spineam sacratissimam, quâ Christus filius Dei voluit in passione sua pro nostris enormatibus coronari, de Constantinopolitanis patribus Parisius asportari, et à nemore Vicenarum, milliario ab urbe distante, **quintâ feriâ post Assumptionem beatæ Virginis**

¹³³ ル＝ゴフ、前掲書、425 頁

¹³⁴ ル＝ゴフ、前掲書、425 頁

¹³⁵ ル＝ゴフ、前掲書、436 頁

¹³⁶ ル＝ゴフ、前掲書、436 頁、後者については現存せず。

¹³⁷ ル＝ゴフ、前掲書、425 頁

¹³⁸ ル＝ゴフ、前掲書、434-440 頁

¹³⁹ Guillaume de Nangis, “Chronicon”, *Recueil des historiens des Gaules et de la France*, Paris, 1967-1968, t.XX, p.548

¹⁴⁰ Guillaume de Nangis, “Gesta Ludovici IX”, *Recueil des historiens des Gaules et de la France*, Paris, 1967-1968, t.XX., pp.326-328

matris Domini ipsam rex et **fratres sui** cum **maximo cleri plebisque** tripudio **nudis pedibus** incedentes, primò usque ad majorem beatæ Mariæ ecclesiam, et inde ad capellam domûs suæ quam ipse mirabili et sumptusuo opera construi de novo fecerat, cum **hymnis et canticis** dulcissimis deportaverunt. Eodem tempore dohannes Constantinopolitanus imperator multùm à suis depressus adversariis, deficientne sibi pecuniâ, quamdam summam pecuniæ à Venetis mutuò sumpsit, et loco pignoris **vexilla** posuit Dominicæ Passionis, scilicet maximam partem sanctæ erucis, et ferrum **lanceæ** quâ fuit latus Dominicum perforatum, et **spongiam** cum quâ aceto potatus est; quod audiens devotissimus rex Franciæ Ludovicus [...] tantas reliquias suis redemptas opibus procuravit Parisius deportari, et in caepella domûs suæ fecit honorificè collocari.

1239 年、フランス王ルイは荊冠をコンスタンティノーブルからパリへと運ばせた、(この荊冠というのは) 神の子キリストが受難の際に我々の罪の為にかぶることを望んだ物であった。都市(パリ)から 1 マイル離れたヴァンセンヌの森で、**聖母マリア被昇天の日の後の木曜日**(8 月 18 日)¹⁴¹に、王と**兄弟たちは**、これを祝う為に集まった**聖職者と世俗の人々の一団**と共に**裸足**で歩き、最初はノートル＝ダム大聖堂まで、続いて彼の宮廷にある**礼拝堂**まで、心地よい**賛美歌**と共に荊冠を運んだ。この礼拝堂というのは、王が新しく建てたもので、驚くほど贅沢な建物であった。

同じ年に、コンスタンティノーブル(ラテン帝国)の皇帝は、彼の敵対勢力によって挟まれ、資金が不足していたため、ヴェネツィアから多くの借金をしていた。そして、主の受難の十字架、すなわち、**聖なる十字架の大部分**、そして主に穴を開けた**鉄の槍**、酢がしみこんだ**海綿**をその担保としていた。そのことを聞いた敬虔なフランス王は、(中略)、多くの聖遺物を彼の財力によって買い戻し、敬意を表しながら彼の宮廷の礼拝堂に置いたのだった。

史料 2-2 *Gesta Ludovici* 『聖ルイ伝』

Quomodo sancta corona Domini spine ac magna pars sancte cruci t ferrum lanceae quod. lateri Domini infixum fuit, aldata sunt Parisius

「いかにして、主の荊冠、聖なる十字架の大部分、そして主のわき腹に刻まれた鉄の槍がパリに運ばれてきたか。」

[...] Et à nemore Vicenarum, **quintâ feriâ post Assumptionem beatissimæ Mariæ Virginis**, ipsam rex et **fratres sui** cum **maximo cleri plebisque** tripudio, **nudis pedibus** usque ad ecclesiam sacratissimæ Mariæ Virginis matris Domini Parisius attulerunt. Ibi

¹⁴¹ 聖母マリア被昇天の日＝8 月 15 日 1239 年においてその後の木曜日は 8 月 18 日を指す。以下同様。

enim ex præcepto regio Odonem Clementis abbatem ecclesiæ Sancti Dionysii cum suis monachis oportuit interesse. Qui monachi, illucescente aurorâ, in nemore Vicenarum quintâ feriâ prælibatâ se albis et capis induentes, grossos in manibus tenentes cereos, [...] cum rege et clero Parisius deverteunt. [...] Cantor verò ecclesiæ Sancti Dionysii à nemore Vicenarum usque ad ecclesiam sacratissimæ Virginis, [...] cantus incipiebat. [...] Inde usque ad capellam, quam dominus rex in sua domo Parisius, mirabili et sumptuoso opere, sibi construi fecerat, monarichi Sancti Dionysii sacrosanctam coronam cum hymnis et canticis dulcisonis deduxerunt, ubi ad honorem sanctissimæ coronæ cereos, quos gestabant in minibus, in conspectu omnium qui ibi aderant devotè et humiliter obtulerunt. Non multùm post audiens et intelligens devotissimus rex Ludovicus, quòd Constantinopolitanus imperator quandam summam pecuniæ mutuò sumapserat, et posuerat in loco pignoris [...] maximam partem sanctissimæ crucis, in qua Christus pro nobis pependit, et spongiam [...], et ferrum lanceæ sanctissimum [...] sibi fecit Parisius apportari. Et sicut sanctam coronam, ut superiùs dictum est, sic et istas pretiosas reliquias, archiepiscoporum, pontificum et abbatum catervâ vallatus mirabili, usque ad capellam et domûs suæ cum processione cleri et populi devotissimè et humiliter deportavit, et capsam pretiosam et admirabilem ex auro et argento, lapidibus pretiosis intextam, ad prædictas sacras reliquias honorificè recondendas fecit subtili et admirabili operum varientate fabricari. [...]

(中略) 8月18日に、ルイはヴァンセンヌの森から、彼の兄弟、(荊冠の到着)を祝う為に集まった聖職者と世俗の人々の一団と共に、裸足でパリのノートル＝ダムまでそれ(荊冠)を運んだ。そこには、王に(出席を)勧められたサン＝ドニの大修道院長 Odonem Clementis が修道士たちとともにいたはずである。この修道士たちは、8月18日の夜明けにヴァンセンヌの森で、白い祭服とマントを着て、大きなろうそくを持ち、(中略)王と聖職者たちと共にパリへと向かった。(中略)そしてサン＝ドニの先唱者はヴァンセンヌの森からノートル＝ダムまで(中略)素晴らしい歌を歌っていた。(中略)そしてそこ(ノートル＝ダム大聖堂)から礼拝堂まで聖なる荊冠を甘美な賛美歌と共に運んだ。この礼拝堂というのは、王がパリにある宮廷に驚くほど贅沢に建てたものであった。(荊冠を礼拝堂まで運ぶ途中で)サン＝ドニの修道士たちは、荊冠のために、そこにいる人々の目前に持ってきていたろうそくを敬虔に、そして謙虚に差し出した。

最も敬虔なる王は、コンスタンティノーブル(ラテン帝国の)皇帝が多額の借金を背負い、さらに(中略)聖十字架の大部分、(中略)海綿、そして(中略)鉄の槍を担保としていることを聞くとすぐに、(中略)

それらをパリに運んだ。

そして前述の荊冠とこれらの聖遺物を大司教、司教、大修道院長の一群で囲みながら、礼拝堂と王の宮廷まで、聖職者と（世俗の）人々とのプロセッションと共に、敬虔にそして謙虚に運んだ。そして前述の聖遺物をしまうため高価で立派な聖遺物箱を、金や銀、そして貴重な石を精巧に、見事に組み込ませて作らせた。

史料 2-1、2-2 には共通した情報がいくつか記述されている。いずれの史料も大部分が 1239 年に運ばれた荊冠を扱っている。この荊冠を 8 月 18 日にヴァンセンヌの森で、王が彼の兄弟、聖職者、そして世俗の人々（おそらく聖職者でも王室でもない人間を指していると予想される）と共に受け取ったという記述も共通している。ただし、史料 2-2 には史料 2-1 には登場しないサン＝ドニの大修道院長と修道士たちの行動が記述されている。それによれば、彼らは白い祭服とマントを着て、ろうそくを持ち、賛美歌を歌っている。この記述から史料 2-1 にも記されている賛美歌もこの修道士たちのものであったと推測できる。

経路については史料 2-1、2-2 共にヴァンセンヌの森からノートル＝ダム、そして最後の地点は礼拝堂となっている。この礼拝堂は「王がパリにある宮廷に驚くほど贅沢に建てたものであった」と説明されているため、この当時建っていたとされるサン＝ニコラ礼拝堂ではなく、サント＝シャペルを指していると考えられ、実際の完成（1248 年）との矛盾が見られる。おそらくこれはサント＝シャペルにこれらの聖遺物が安置されている事実から、ギョーム・ド・ナンジが判断して書いた記述であると推定される。このことから、彼の執筆当時にはすでにこれらの聖遺物とサント＝シャペルの結びつきが人々、少なくともサン＝ドニの修道士たちに浸透していたことが読み取れる。

次に史料 2-2 のみに見られる記述を確認する。特筆すべきは、ノートル＝ダムから礼拝堂はサン＝ドニの修道士たちが聖遺物を運び、前述のろうそくで照らしながら人々にこれらを見せたことが書かれている点である。この記述によれば、荊冠を人々に披露した主体が王ではなく、修道士たちであったということになる。しかし、ギョーム・ド・ナンジ自身がこの大修道院長と修道士の出席を断定ではなく推定で述べている（*oportuit interesse*）ことから分かるように、彼らの参加自体が明確な根拠を持っているとは言い難く、おそらく彼がサン＝ドニ修道士として付け足した見解であると考えられる。

いずれの史料にも 1241 年に到着した聖遺物についてのあらましが記されており、具体的に名が挙がっているのは「聖なる十字架」「槍」「海綿」である。史料 2-2 からはさらに、これらの聖遺物が到着した際に、荊冠と共にプロセッションで運ばれたことが分かる。

（2） ゴーティエ・コルヌ

サンス大司教ゴーティエ・コルヌはルイ 8 世の時代からカペー家に仕え、彼の病床の際にはブランシュを息子ルイ 9 世の摂政とする旨を、他の高位聖職者とともに聞いていた¹⁴²。前々王、前王の時代から仕えた主要人物たちが亡くなる中¹⁴³、1241 年までルイに仕え続け、王妃マルグリットとの婚礼の際はプロヴァンスまで王の婚約者を迎えにいく役を務めた¹⁴⁴。しかし 1241 年にルイとブランシュのタルムード没収に反対し、その直後に突然死したことで、その死は神罰として反ユダヤ的キリスト教徒によって語られることとなった¹⁴⁵。

¹⁴² ル＝ゴフ、前掲書、102-103 頁

¹⁴³ フィリップ・オーギュストの補佐役会のメンバーであった、サンリス司教ゲラン修道士、王の侍従バルテルミー・ド・ロワ、ジャン・ド・ネールは 1227 年頃から実質的な職務から離れていった。ル＝ゴフ、前掲書、100 頁及び 133-134 頁参照。

¹⁴⁴ ル＝ゴフ、前掲書、160 頁

¹⁴⁵ ル＝ゴフ、前掲書、1015-1016 頁 1239 年グレゴリウス 9 世によりユダヤ人のタルムード没収が求め

ゴーティエ・コルヌによる聖遺物の披露に関する記述として、以下の史料 2 – 3¹⁴⁶を挙げる。

史料 2 – 3 *Historia susceptionis coronae spineae Iesu Christi*
「主の荊冠の受領の歴史」

Exhilaratus Rex plurimum cum matre sua & fratribus, assumptis secum Galthero Senonensi Archiepiscopo, Bernardo Aniciensi Episcopo, & aliis Baronibus & militibus quos habere subito potuit festius occurrit: in villa, quæ per quinque leucas distat à Senonis, & Villanoua Archiepiscopi dicitur, thesaurum quem desiderauerat cum nunciis inuenit; vas consignatum ligneum referatur, apparent circa vas argenteum sigilla Baronum. Attulerunt autem præfati nuncij sigilla Procerum, cum litteris patentibus ad Regem & Balduinum.

Facta igitur collatione ipsorum cum sigillis, quibus erat sacræ Coronæ vas signatum, inueniunt veraesse. Fractis itaque signaculis huiusmodi, necnon sigillo Ducis Venetiæ, quod maiorem certitudinem appositum fuerat, argenteum vas recludunt. Inueniunt de auro purissimo loculum pulcherrimum, in quo sancta Corona iacebat sublato huius operculo[...]. Quanta itaque deuotione, quantis fletibus & suspiriis inspecta fuerint à Rege & Regina, & aliis vix posset perpendi. Commorantur in aspectu præ amoris desiderio, tam deuotum sentientes feruorem mentium, quasi viderent coram se Dominum: spinis præsentibus coronatum post paululum ipsam includunt in vasculis, consignantur sigillo Regio, quod in die festo beati Lurentij martyris est completum.

ANNO igitur millesimo ducentesimo tricefimo nono in crastino Laurentij martyris huius præciosæ gemmæ thesaurus Senonis deportatur, occurrentibus in via populis vniuersis: exultat omnis cætus hominum sine differentia, sexuum & ætatum. In primo ciuitatis ingressu Rex nudis pedibus, sola indutus tunicâ, cum fratre suo ROBERTO Comite humiliato similiter, sacrum onus humeris suis suscipit deportandum. Prosequuntur & præcedunt milites reiectis calceis. [...] Defertur in Ecclesiam prothomartyris Stephani, populis detegitur, & tantæ causa iocunditatis aperitur. In die crastina Rex versus Parisius vrbem Regiam dirigit iter suum, insigne vasculum deferens. [...] **Octaua die** extra muros iuxta Ecclesiam B. Anthonij in

られ、ラビであるイエヒエル・ド・パリが審問の中でキリスト教徒への攻撃を否定したにも関わらず、「焼却」の判決がルイ達によって下された。

¹⁴⁶ Gautier Cornut, “Historia susceptionis coronae spineae Iesu Christi”, *Historiae Francorum Scriptore*, Paris, 1649, t.V, pp.407-411

campi planitie construitur eminens pulpitum, astantibus pluribus Prælati, Ecclesiarum conuentibus indutis scricis, exhibitis sanctorum pignoribus, in tanta populorum frequentia quantam Parisius exierit. Monstratur locus ex pulpito, diei felicitas & causa gaudij prædicatur. Post hæc intra muros ciuitatis infertur à Rege & fratre suo discalciatis vt priùs, & præter tunicas vestimentis depositis. Omnes etiam Prælati cum clericis & viris religiosi, necnon & militibus, nudis pedibus antecedunt. [...] In pontificalem Ecclesiam beatæ Virginis inducitur, vbi persolutis Deo & beatissimæ matri eius deuotis laudibus, cum thesauro nobili solemniter ad Regis Palatium reuertuntur. Collocatur in Capella Regia beati Nicolai cum multo gaudio Domini Corona. His itaque solemniter peractis Parisius, exiit fama celebris, diuulgatur insigne spetaaculum primum per loca vicina, deinde per remotas ciuitates & villas : concurrunt festinanter ad gaudium, videre desiderant causam felicitatis præsentium temporum, & totius regionis.

喜んだ王は、多くの人々と共に、すなわち彼の母、兄弟、サンス大司教ゴーティエ、オセール大司教ベルナルド、その他の貴族達、そしてすぐに用意することができた騎士達と、サンスから 5lieu (約 16.24km)¹⁴⁷離れたヴィルヌーヴ・アルシュベークと呼ばれている村に向かい、彼が待ち望んでいた宝物と使者を迎えた。(荊冠は) 木製の容器に入れられ、そのまわりには銀色の貴族の印がつけられていた。そして前述の使者達は、皇帝 (ボードアン) の印章と、王とボードアン王に向けられた手紙を持ってきた。

そして王たちは荊冠の容器に刻印された印章を、手紙と比べて王達はそれが本物であると知った。このような価値ある印章と、ヴェネツィアのドージェの印が確かなものであったため、彼らは銀の (印章がついた) 容器を開けた。純金の美しい箱が露わになり、その中にはその格式高い蓋と共に荊冠があった (中略)。どれほどの敬虔な想いが、そしてどれほどの涙とため息が王と皇妃から溢れただろうか。そして、彼は他のことを考えることがほとんどできなかっただろう。王達は (神への) 愛の焦がれのため、心に敬虔な熱を感じるほどに、あたかも神自身をと面しているように (荊冠を) 注視し続けた。そして荊冠を箱に入れるとすぐに、王の印章で封じ、聖ローレンティウスの祝日 (8 月 10 日) にそれが出来上がった。

1239 年の聖ローレンティウスの祝日の翌日 (8 月 11 日) に、その宝がサンスへ運ばれてくると、様々な人々が (王が通る) 道にやって来た。そして性別や年齢関係なく多くの人々が湧き上がった。都市に最初に入る際に、王は裸足になり、服はチュニカだけになり、同様に卑しい (姿の) 弟ロベルトと共に、聖なる荷を運ぶため肩に担いだ。騎士たちも靴を脱いで伴い、(王たちの) 先を歩いた。(中略) 荊冠は聖ステファノ教会まで運ばれ、喜びの大いなる源 (荊冠) が人々に見せられた。(中略)

¹⁴⁷ 1lieu=3.248km とし、5lieu=16.24km と計算した。

(出発から) 8 日目に、(パリの) 市壁の外にある聖アントワーン教会のすぐ近くの平原に、高い説教台が建てられ、聖職者達が絹の服を纏いながら囲む中で、多くの人々にこの聖なる印(荊冠)が披露された。その人々の数は、パリという都市が消滅するのではないかというほど多かった。説教台から聖遺物箱が見せられ、その日の幸せと喜びの理由が説明された。その後王と兄弟達の手によって、荊冠は(パリの) 都市の中へと入った。彼らはそれまで通り裸足で、さらにはチュニカを脱いで歩いた。高位聖職者、聖職者、修道士達、そして騎士達皆、裸足で(王たちの) 先を歩いた。(中略)そして荊冠はノートル＝ダムへと入り、そこでは主への敬意をしめし、その母マリアを敬虔に讃えた後、王達は高貴な宝と共に王の宮廷へと戻った。荊冠は王のサン＝ニコラ礼拝堂に、多くの喜びと共に置かれた。王がパリでこのように成し遂げたことは、栄光あるこのプロセッションに近い所から、遠い都市や村まで噂となつてすぐに広まった。彼らはこの幸福の地へと赴き、目下の、そしてフランス中の幸せの源を見たいと願ったのだった。

史料 2-3 では荊冠のパリ到着過程について非常に詳しく述べられている。史料 2-3 から、王自身の他に、母ブランシュ、兄弟達、サンス大司教(コルヌ自身)、オセール大司教、貴族達、騎士達が荊冠を迎えに行つたことが分かる。そしてその経路は、ヴィルヌーヴ・アルシュベークと呼ばれる村から出発し、サンスから聖アントワーン教会、ノートル＝ダム、宮廷(サン＝ニコラ礼拝堂)へと向かっている。日付けについても具体的に記述されており、まず前述の村に 8 月 10 日に到着し、翌日にサンスへと向かい、8 日目つまり 8 月 18 日に聖アントワーン教会とパリへに着いたことが分かる。

最初の村では使者から聖遺物を受けとり印章と手紙を用いてこれらが本物であることを確認している。荊冠は純金の美しい箱に入れられ、この聖遺物箱はさらに木製の入れ物に入り、そこに銀色の印章が押されていたとされており、到着時の聖遺物の様子を詳細に知ることができる。

次のサンスの場面では、王が如何にして聖遺物を運んだかが記述されている。すなわち彼は裸足でチュニカだけまとい、弟ロベルトと共に肩に担いで荊冠を運んだ。そしてステファノ教会までこの聖遺物を運び、人々に披露したことが分かる。

人々への披露は同様には聖アントワーン教会でも行われており、ここでは説教台から聖遺物箱が見せられ、この聖遺物の経緯が語られた。その主体については、明記はされていないものの、おそらく王の手で行われたと考えられるだろう。その後王たち一行はパリの都市に入り、ここでも裸足の記述があり、さらにチュニカも脱いでおり、限りなく質素な姿でプロセッションを行っていたことが分かる。

最後にプロセッション中の人の並びに注目したい。サンス、パリいずれにおいても、騎士や聖職者達が王の前を歩いていたことが記されており、王達はプロセッションの並びの中で後方に位置していたことが分かる。

(3) マシュー・パリス

マシュー・パリス(1200?年-259 年)は、イングランドのセント・オールバンズ修道院に所属し、多数のラテン語年代記を執筆したベネディクト会修道士である。本項で使用している *Chronica Majora*『大年代記』の他に、*Flores historiarum*『歴史の華』、*Gesta abbatum*『大修道院長事績』、*Historia anglorum*『イングランドの歴史』を執筆した。彼は 1217 年にこの修道院に入り、1247 年にウエントミンスターに、1248 年にノルウェーを訪れた以外

は人生のほとんどをこの修道院で過ごした¹⁴⁸。そのためパリ、フランス自体には一度も訪れておらず、ルイとの直接の面識もなかったようである。唯一の接点は前述したノルウェーまで、ルイからのホーコン王への十字軍参加要請の伝言を運んだことであるが、彼にこの役割が与えられた経緯は定かではない¹⁴⁹。

Chronica Majora『大年代記』には創世記から彼が亡くなる 1259 年の出来事について、イングランドを中心としながらも、他の地域の歴史について書かれており、1234 年までの部分は同修道院に属していたロジャー・ウェンドーヴァーの *Flores historiarum*『歴史の華』に依拠している¹⁵⁰。彼の年代記は歴史的な出来事だけでなく、自然史、芸術、建築などについても書かれており、これらの補完として自作のイラストや図も挿入している。年代記全体を通しては、王権、カトリック教会の中央集権化についての抵抗が主張されている。同時代のフランス王ルイについては、特に母后ブランシュについて批判的見解を示しているが、本稿で取り上げている聖遺物の購入を機に肯定的な評価へと変化している¹⁵¹。マシュー・パリスの年代記中の聖遺物購入に関する記述として以下の史料 2－4¹⁵²を挙げる。

史料 2－4 *Chronica Majora* 『大年代記』

De tribus beneficiis regno Francorum cælitus his duobus annis collatis, videlicet corona et cruce Domini et corpore sancti Ædmundi Cantuariensis archiepiscopi.

「フランス王が 2 年をかけて集められた、天からの 3 つの賜物、すなわち荊冠、主の十字架、カンタベリーのエドモンドの聖体について。」

Die siquidem Veneris quæ proxima diem Paschæ præcedit, [...] apportabatur eadem crux Parisius, scilicet ab ecclesia Sancti Antonii, juxta quam composita fuit cujusdam stationis machina, in quam rex ipse ascendens cum utraque regina, scilicet matre sua B[lan]chia et uxore sua M[argareta], cum fratribus ejusdem regis, præsentibus archiepiscopis, episcopis abbatibus, et aliis viris religiosis, necnon et nobilibus Francorum magnatibus, cum innumerabili populo circumstante, cum cordis jubilo tam gloriosum spectaculum exspectante, crucem ipsam in altum elevavit lacrimis abortis, incipientibus qui præsentibus erant prælatibus voce altissima, “Ecce crucem Domini.” Et cum omnes veneranter ac devote ipsam adorassent, rex nudus pedes, in laneis, discinctus, capite discooperto, triduo jejunio anticipato, edoctus exemplo nobilissimi triumphatoris Eraclii Augusti, versus Parisiacam urbem et usque ad ecclesiam beatæ Virginis cathedralem bajulavit. Et cum consimili devotione, confessionibus, jejuniis, et orationibus expiati, fratres dicti regis cum reginis supradictis pedetentim sequebantur.

¹⁴⁸ Dunphy, G., edited, *The Encyclopedia of the Medieval Chronicle*, Vol.1-2, Boston, 2010p.1093

¹⁴⁹ ル=ゴフ、前掲書、533-534 頁

¹⁵⁰ *Chronica Majora* については *The Encyclopedia of the Medieval Chronicle*, pp.1094-1095 を参照

¹⁵¹ ル=ゴフ、前掲書、538 頁

¹⁵² Mathew Paris, “Chronica Majora”, *Rerum Britannicarum Medii Aevi Scriptores*, edited by Henry Richards Luard, Londn, t.57, Vol.4, pp.90-92

Portabant etiam ipsi coronam spineam, quam simili schemate in propatulo elevantes, populi conspectibus præsentarunt[...].Supportabant autem nobiles quidam brachia regis et fratrum ejus, tam pium onus bajulantium, ne forte fatigati, cum assidue in cælum brachia elevata sullevarunt, cum ipso impretiabili thesauro deficerent. Et hoc circumspecte ipsis prælatis sic volentibus factum est, ut [ab] ipsi[sl], quorum prudentia tanta gloria fuerat adquisita, esset etiam circumstante populo ad instar Eraclii, de quo fecimus mentionem, illo modo veneranter attrectata. Cum igitur perventum esset ad ecclesiam cathedralem, pulsatis omnibus in civitate signis, orationibus quoque specialibus sollempniter perlectis, reversus est rex ad majus palatium suum, quod est in media urbe, deferens crucem suam gloriose, fratribus ejus coronam, consequente prælatorum ordinata processione, qua nunquam visa fuit in regno Francorum sollempnior aut jocundior. Universi igitur et singuli Deum, qui regnum Francorum præ omnibus aliis speciali complectitur dilectione, consolatur, et tuetur, junctis manibus glorificarunt.

復活祭前の金曜日に、(中略)(主が磔にされたのと)同じ十字架がパリ、すなわち聖アントワース教会に運ばれてきた。この教会の近くの広場には台が建てられ、王自身が二人の王妃、すなわち母ブランシュと妻マルグリットと共にこの台に登り、彼の兄弟、前述の大司教、司教、大修道院長たち、そしてそのほかの修道士たち、フランスの有力諸侯たち、そして数え切れない人々が(王たちの)周りを囲み、魂の叫びと共に、このような栄光ある光景を待ち望んでいた。(王が)涙を流しながらその十字架を空へと上げると、前述の高位聖職者たちは「神の十字架を見よ!」と叫んだ。そして皆でその十字架を恭しく敬虔に崇め、王はヘラクレイオス皇帝の凱旋の逸話に倣って裸足で羊毛(の服)をまとい、帯のない状態で、王冠を取り、3日間の断食の後、パリの街の方へ、そしてノートル＝ダム大聖堂まで(十字架を)運んだ。そして、同じような罪の清め、つまり告解、断食そして祈りを行った前述の王の兄弟と王妃たちは一歩一歩ついて行った。

王達は(かつて)主の荊冠を同じような服装で運んでおり、(その際も)公の場でこれを掲げて人々に披露していた(中略)。何人かの貴族たちは大変貴重な宝を落としたりしないために、疲れないよう王と兄弟の腕を支えたのだった。

自ら望んだ聖職者たちは、このような栄光(聖遺物)はまさに彼らの知恵によって手に入れられたわけであるが、周りに人々がいる中で、前述と同じ方法(荊冠を掲げた時と同じ方法)で、(王を)ヘラクレイオス皇帝に見立てながら、慎重に、そして敬虔に(十字架を)扱った。そして、王が大聖堂に到着した時、都市中で(その到着が)合図によって知らされ、特別大きな声で祈りが上げられた。王は、都市の中央にある、素晴らしい宮廷へと戻りながらこの十字架を見事に運び、彼の兄弟たちは荊冠を運んだ。その後ろには聖職者たちによるプロセッションが続い

ており、これは今までにないほど崇高で嬉々としたものであった。他のどこよりもフランスの地を特別な愛によって包み、慰め、守る全能にして唯一の神を、彼らは賛美した。

史料 2-4 では 1241 年の聖十字架（以下十字架）の購入について記されている¹⁵³。日付については、復活祭前の金曜日（聖金曜日）と書かれており、1241 年の祝日は 3 月 29 日に当たる。この日に十字架が聖アントワヌ教会に到着し、そこからノートル＝ダム、そして宮廷という経路で運ばれてきたことが分かる。前述の教会に随行しているのは、彼の母ブランシュ、妻マルグリット、兄弟、大司教、司教、大修道院長、その他の聖職者、貴族たちである。特にブランシュとマルグリットは王と友に前述の教会近くに建てられた説教台に登っている。その周りにおり、王が十字架を掲げるのを見ていたとされる「数え切れない人々」は、その前に具体的に上がっていない集団を表していると考えられるため、世俗の一般の人々を指している推定できる。

王は聖アントワヌ教会を出ると、裸足で羊毛の服をまとい、帯のない状態で、さらに王冠を取ってノートル＝ダムまでこの十字架を運んでいる。この部分の記述については、「3 日間の断食の後」と記されているが、これが聖アントワヌ教会で十字架を受け取る前に行ったのか、ノートル＝ダムに向かうまでの間に 3 日間が設けられていたのかは不明である。ここで注目すべきは、このノートル＝ダムに向かう過程でヘラクレイオス 1 世との対比をマシュー・パリスが書き添えている点である。この記述から、同時代人の目からもルイのこの皇帝への意識が明らかであったことが読み取れる。ヘラクレイオス皇帝が十字架を運んだ際の逸話は以下の通りである。

この皇帝が聖十字架を持ってイェルサレムの街に入ろうとした際、街の門が急に岩で閉ざされてしまった。そこに天使が現れ、「主は謙虚にもロバに乗って町に入られた。」と告げた。そこで皇帝が靴とシャツを脱いで、歩いてこの十字架を運ぶと、門が開いた¹⁵⁴。

このように、ルイが靴を脱ぎ、チュニカ姿で行ったプロセッションが、ヘラクレイオス 1 世を模倣したものかどうかは、ほぼ間違いないと言える。

史料 2-5 中では荊冠についても一部触れられており、これによれば十字架到着の際と同様の服装で荊冠も運ばれ、披露されていることが分かる。十字架到着時についての記述に再び戻ると、ノートル＝ダムから宮廷の間を王が十字架、彼の兄弟たちが荊冠を運び、その後ろに聖職者たちのプロセッションが続いたと記されている。この記述から、プロセッション内で王が前方におり、その後ろに兄弟、聖職者がいたと推測される。これは聖アントワヌ教会からノートル＝ダム間でも同様に、「前述の王の兄弟と王妃たちは一歩一歩ついて行った」と記されている。このプロセッションにおいては王が前に位置していたことが分かる。

（４） ジョフロワ・ド・ボーリュ

ジョフロワ・ド・ボーリュと次項のギョーム・ド・シャルトルは同時期に王に仕え、王本人と面識があった人物たちである。ジョフロワ・ド・ボーリュについては、王と行

¹⁵³ マシュー・パリスは 1239 年の購入についてはボードアン 2 世が抵当に入れられていた聖遺物をルイに売ったことのみ記されている。"Qui etiam, ut thesaurum accumulare et adaugeret, reliquias carissimas et certissimas vendidit regi Francorum, necnon et quaedam sibi carissima impignoravit. Erat namque a Francorum nobilibus ducens, ut prae dictum est, originem."

Mathew Paris Paris, "Chronica Majora", *Rerum Britannicarum Medii Aevi Scriptores*, edited by Henry Richards Luard, London, 1946, t.57, Vol.3 pp.517-518

¹⁵⁴ Freeman, C., Ibid, p.132

動を共にする以前（1248年以前）の時代についての詳細は不明であるが、おそらく彼は北フランスの出身であるとされている¹⁵⁵。彼の文章からは幼少の折にドミニコ会士として芸術、論理学、哲学の教育を受けていることが分かる。王の下で働き始めた正確な年は不明であるが、おそらく十字軍の準備過程で王にとって親密な存在となり、この遠征に同行したと考えられている¹⁵⁶。彼は十字軍の最中の出来事についても記しており、例えば1252年の暮れに、王が母の死をヤッファで知った際の様子を詳しく描写している。彼はまた、この時期から聴罪司祭として王に仕え始めている¹⁵⁷。十字軍から帰還後も、王の側に仕え、特に王の慈善活動の補佐を行っていた¹⁵⁸。1250年代になるとより政治的な任務も果たすようになり、1264年にはウルバヌス4世によって、シトー派の大修道院長と修道士達との仲裁役として任命された¹⁵⁹。彼は二度目の十字軍にも付き添い、王と共にチュニスに上陸した¹⁶⁰。彼は到着後すぐに病床に伏したルイに、息子ジャン・トリスタンの死を告げ、そして王の臨終にも立ち会った。最後に王と共に賛美歌を唱え、王からサン＝ドニと聖ヨハネへの祈りを聞いたことが、彼の記述から分かる。

ジョフロワ・ド・ボーリユーが残したルイについての報告書¹⁶¹は、正式には *Vita et sancta conversatio piae memoriae Ludovici quondam regis Francorum* 『かつてのフランス王、敬虔なる思い出を持つルイの伝記と清らかな生き方』¹⁶²という表題の52章からなるもので、おそらく1272年の暮れから1273年のはじめの間に教皇グレゴリウス10世に送り届けられた。彼の執筆は教皇に加えてドミニコ修道会の上司による指示でもあった¹⁶³。その報告書は、王をヨシヤと比較し無秩序に賞賛が展開されていくが、おおよそ時間の流れに沿って以下のように章が分類されている。すなわち、第1章から第4章はヨシヤ、特にとの母との関係とルイとブランシュの関係の比較について。第5章から第24章はルイの徳と信仰心について。第25章から第28章までは一度目十字軍遠征について。第31章から第36章は王のフランス帰還について。第37章から第41章までは二度目の十字軍のための準備について。第42章から第50章までは二度目の十字軍と、王の死、そして死後について¹⁶⁴。本稿で取り上げる聖遺物購入は第24章にあたる。ジョフロワ・ド・ボーリユーの報告書の特異な点は、この文書がまさにルイの列聖手続きの口火を切り、王が聖人というモデルに当てはまるよう描かれている点である¹⁶⁵。

彼の没年についての詳細ははっきりしていない。しかし1282年の王の列聖の手続きに名がないことから1272年からこの1282年までに死亡したと考えられている¹⁶⁶。

ジョフロワ・ド・ボーリユーの報告書中の聖遺物購入に関する記述として、以下史料2-5を¹⁶⁷挙げる。

史料 2-5 *Vita et sancta conversatio piae memoriae Ludovici quondam regis*

¹⁵⁵ ジョフロワ・ド・ボーリユーの幼少期については Gaposchkin, M. C., Field, S.L., *The Sanctity of Louis IX: Early Lives of Saint Louis by Geoffrey of Beaulieu and William of Chartre*, p.19 を参照

¹⁵⁶ Gaposchkin, *ibid.*, p.20

¹⁵⁷ Gaposchkin, *ibid.*, p.20

¹⁵⁸ Gaposchkin, *ibid.*, p.21

¹⁵⁹ Gaposchkin, *ibid.*, p.22

¹⁶⁰ 二度目の十字軍については Gaposchkin, *ibid.*, p.24 を参照

¹⁶¹ この単語についてはル＝ゴフの『報告書』（リベリス）をそのまま使用した。ル＝ゴフ、前掲書、404頁

¹⁶² ル＝ゴフ、前掲書、404頁

¹⁶³ ル＝ゴフ、前掲書、404頁

¹⁶⁴ 章ごとの内容についてはいずれもル＝ゴフ、前掲書、404頁を参照。

¹⁶⁵ ル＝ゴフ、前掲書 404-405頁

¹⁶⁶ ル＝ゴフ、前掲書、407頁

¹⁶⁷ Geoffrey de Beaulieu, “Vita et sancta conversatio piae memoriae Ludovici quondam regis Francorum”, *Recueil des historiens des Gaules et de la France*, Paris, 1967-1968, t.XX, pp.15-16
尚、和訳については Gaposchkin, *ibid.*, pp.100-101 を参考にした。

Francorum

『かつてのフランス王、経験なる思い出を持つルイの伝記と清らかな生き方』

XXIV. *Quantam devotionem habuit in his quæ spectant ad fidem, et primò de sacra Corona, et de aliis sanctis reliquiis.*

第24章 「王の信仰に関する物への敬虔さの素晴らしさ、そして最初の聖なる荊冠とその他の聖遺物について」

[...]necnon cum quàm solemni ac devotissima processione totius cleri et populi pretiosæ reliquiæ Parisiis sint receptæ, ipso rege hunc sacrum thesaurum ex una parte propriis humeris ac nudis pedibus deportante; testis est is libellus qui diligenter super iis est confectus, de quo ad Matutinas legitur in solemnitatibus dictæ Coronae cæterarumque reliquiarum.

Quas solemnitates pius Rex celebriter fieri instituit bis in anno, videlicet die anniversariâ, quâ Parisius receptæ fuerunt.

[...]Haec omnia zelum fidei christianæ ipso commendant.

(中略) 王自身が裸足で、自身の肩に担いでこの聖なる宝を運んだ時、どれほどの厳粛さで敬虔な気持ちで、聖職者と(世俗の)人々がパリで行ったプロセッションによって、これらの高貴な聖遺物は受け取られたのだろうか。これらの出来事について正確に記している記録が、その証拠である。それによれば、朝課の頃に前述の荊冠とそれ以外の聖遺物のための儀式が行われたことが分かる。敬虔な王は年に二回儀式を制定した、これはパリが(荊冠とそれ以外の聖遺物を)受け入れた日の祝日である。(中略) これらのすべては王のキリスト教信仰の熱心さを示している。

史料2-5の主題は、これらの聖遺物のために王が年に二回の儀式を制定したことである。この史料には、王は聖遺物を「裸足で、自身の肩に担いでこの聖なる宝を運んだ」と書かれているが、これが荊冠とそれ以外の聖遺物いずれを指しているのかは不明である。ただし、史料全体がこれら両方を扱っていることから、この王の動作も厳密にどちらか一方を指しているのではなく、二つの儀式で共通していたものと推定できる。またこれらの一連の出来事について記されている記録が存在していたこともこの史料から分かり、これはおそらく史料2-3に当たるコルヌの記述を指していると考えられる¹⁶⁸。コルヌの記述が当時から一次史料として使われていたことと同時に、後世に紛失したのではなく、実際に聖遺物の到着に立ち会った人物の記述が当時から多数なかったことが分かる。

(5) ギョーム・ド・シャルトル

ギョーム・ド・シャルトルについてはジョフロワ・ド・ボーリュール同様王の臣下になる以前の情報が不足している。その出自はシャルトルと考えられており、1231年頃ロンバルディアで教育を受け、おそらく1248年までに王に在俗聖職者として仕え始めた¹⁶⁹。彼もまたルイの十字軍遠征に同行しており、1250年には王とともにイスラムの兵に捕らわれ、捕

¹⁶⁸ Gaposchkin, *ibid*, p101, no.177

¹⁶⁹ Gaposchkin, *ibid*, p19

虜生活を共にしている¹⁷⁰。さらに 1254 年までにサン=カンタンの参事会員長になり、翌年までの間に王の代理として左岸の建物を購入した¹⁷¹。このように、ジョフロワ・ド・ボーリュール同様彼は王の代理としての任務も果たしていた。1259 年までには、教会の宝物係として、報酬が与えられる役職に任命され、さらにこの年にはクリュニーの大修道院長の前任者と後任者の間の論争の仲裁役として王の代理を務めた。1264 年にはドミニコ修道会に入会するためにそれまでの職を辞しているが、その後も王の宮廷とは関係継続させていた。例えば、1269 年にはルイの二度目の十字軍遠征に先立ち、クレルモン司教に祈りを依頼する手続きを補佐している。この十字軍には彼もまた同行しており、ギョーム・ド・シャルトルの報告書ではジョフロワ・ド・ボーリュールによる王の臨終の記述にさらに詳細な説明を付け加えられていることから、彼もその場に立ち会っていたことが分かる¹⁷²。

ギョーム・ド・シャルトルの報告書 (*De Vita et Actibus Inclytae Recordationis Regis Francorum Ludovici et de Miraculis quae ad ejus Sanctitatis Declartionem Contingerunt*『素晴らしき想起の中の、フランス王ルイの人生とその行い、そして彼の聖性を宣言する奇蹟について』) はジョフロワ・ド・ボーリュールが省いた記述を埋めようと試みており、おそらく補遺の役割を果たそうとしたためか短めの構成となっており、前半は伝記、後半は奇蹟について充てられ、この聖人の徳に捧げられている¹⁷³。しかしジョフロワ・ド・ボーリュールと大きく異なる独自の点は 1271 年から 1272 年にかけて起きた、ルイ 9 世に関する 17 個の奇蹟を記している点である。この奇蹟談はルイの聖性を示す唯一の根拠である。彼の報告書の正確な執筆時期は不明であるが、一連の奇蹟についての記録からも 1272 年以降に書かれたことは明らかである。ジョフロワ同様 1282 年の列聖には関与していないため、この 10 年間の間に執筆、死亡したと推定できる。

ギョーム・ド・シャルトルによる報告書中の聖遺物購入に関する記述を以下史料 2 - 6¹⁷⁴ に示す。

史料 2 - 6 *De Vita et Actibus Inclytae Recordationis Regis Francorum Ludovici et de Miraculis quae ad ejus Sanctitatis Declartionem Contingerunt*

「素晴らしき想起の中の、フランス王ルイの人生とその行い、そして彼の聖性を宣言する奇蹟について」

Porro cum quanta honorificentia et reverentia Salvatoris, cum quanta frequentia ac devotione plebis, solemnitates illas, quas instituerat in Capella sua regia, unam sacrosanctae Coronae Domini **in crastino S. Laurentii**, quae in tota Senonum Provincia celebrator, aliam sanctarum aliarum Reliquiarum **in crastino S. Michaëlis Archangeli** celebrari fecit annuatim ; quàm solemniter ac reverenter pretiosum illud lignum Crucis Dominicæ sacrosanctam ejus Coronam spineam, ac venerandum ferrum lanceæ, quod latus Dominicum perforavit, auro et gemmis preciosissimis adornata

¹⁷⁰ Gaposchkin , ibid, p20

¹⁷¹ 以下に述べるギョーム・ド・シャルトルの王の代理としての役割、及びドミニコ会入会後の宮廷との関係は Gaposchkin , ibid, p21 を参照

¹⁷² Gaposchkin , ibid, p21

¹⁷³ ル=ゴフ、前掲書、407 頁

¹⁷⁴ Guillaume de Chartres, “De Vita et Actibus Inclytae Recprdationis Regis Francorum Ludovici et de Miraculis quae ad ejus Sanctitatis Declartionem Contingerunt”, *Recueil des historiens des Gaules et de la France*, Paris, 1967-1968, t.XX, p.29 尚、和訳については Gaposchkin , ibid, p.133 を参考にした。

processionaliter ac publice deportari fecerit in singulis solemnitatibus antedictis ; Prælati, et Religiosis, cum Clero, cappis indutis sericis, laudes divinas altissime decantantibus ; ipso pio Rege cum suis Magnatibus humiliter subsequente, ac universo populo devote sacras ipsas reliquias adorante

王は、我らの神にどれほどまでの敬意と崇める心を持ち、どれほどまでにたくさんの敬虔な人々と共に、その儀式（を行ったのだろうか）。この儀式とは、彼が礼拝堂のために毎年行ったもので、1つをもっとも聖なる荊冠ために、聖ローレンティウスの祝日の次の日（8月11日）に制定した。これはサンスの司教管区全体で祝われているものである。そしてもう1つはほかのすべての聖遺物のために、聖ミシェルの祝日の次の日（9月30日）に制定した。また、彼はどれほど敬虔に、そして神聖にこのもっとも貴重な主の十字架の木片、荊冠、そして主のわき腹に刺さっていた聖なる槍を（迎えたのだろうか）。そしてこれらは公のプロセッションで運ばれ、金やとても貴重な宝石で高貴に飾られた。すでに述べたこれらの聖なるプロセッションの中で、高位聖職者、修道会の修道士たち、聖職者は絹のマントを着て、最も聖なる神への賛美を歌っていた、一方敬虔なる王は有力諸侯と共に謙虚に後に続いており、そして様々な信仰深き人々がこの聖なるものを崇めた。

史料2-6には史料2-5と同様に1239年もしくは1241年以降に行われたプロセッションについて記されている。史料2-5と比べると具体的な記述が見られ、8月11日に荊冠のため、9月30日にほかの聖遺物のためにプロセッションが行われており、特に8月11日はサンスの司教管区と繋がりが分かる。具体的な他の聖遺物は同史料中の記述からおそらく主の十字架の木片、槍であったと考えられる。

またこれらのプロセッションには高位聖職者、修道士、聖職者が参加しており、彼らによって賛美歌が歌われ、王自身は聖職者の後ろについて歩いていたことが分かる。そしてこのプロセッションが様々な信仰深き人々によって崇められていたことも記されており、聖遺物の披露が単発的なものではなかったことが明らかである。

（6） 複数の記述から再構成する当日の状況

以下では、史料2-1から2-6を用いて荊冠及び聖十字架の到着当日の様子を再現する。それぞれの史料が取り扱っている聖遺物は史料2-1、史料2-2、史料2-3が1239年の荊冠、史料2-4が1241年の十字架の断片である。史料2-5、史料2-6は後のプロセッションがその中心となっている（表2-2参照）。

表2-2 「史料2-1から2-6で扱われている聖遺物」

	対象となっている聖遺物
史料2-1	荊冠
史料2-2	荊冠
史料2-3	荊冠
史料2-4	聖十字架
史料2-5	両方 （祝日のプロセッションについて）
史料2-6	両方 （祝日のプロセッションについて）

まず、荊冠のプロセッションの出発地は、日数とパリからの距離を考慮すると、史料2-3のヴィルヌーヴ・アルシュベークである考えられる。これは同じ史料2-3中で、この地点で初めて王たちが使者から荊冠を受け取っていることから裏付けられる。この地点には母后、兄弟たち、サンス大司教、オセール大司教、貴族、騎士達が伴っている。史料2-3によればその後8月11日にサンスに入り、ここで最初の披露が行なわれた。史料2-6において、サンス全体で8月11日が荊冠の祝日として祝われているのはこのためであると考えられる。史料2-3ではサンスの次に聖アントワヌ教会へと移動しているが、史料2-1、2-2を考慮すると、この間にヴァンセンヌの森に寄り、その日付が8月18日と考えられる。サンスでの滞在日数は不明であるが、披露の翌日12日に出発したと仮定すると、6日間かけておよそ104kmを移動したことになり、非常に緩やかにプロセッションが行われたことが分かる。

史料2-1、2-2によれば、ヴァンセンヌの森には兄弟と聖職者と世俗の人々が同行しており、母后についての記述がされていない。しかし彼女が途中からプロセッションを離脱する、もしくはそもそも聖遺物の受け取りに同行しなかったとは考え難い。加えて実際にこのプロセッションに参加していたコルヌの史料2-3の信憑性が高いことから、ヴァンセンヌの森以降も母后が同行していたと推測できる。

史料2-1、2-2においては記述が無いが、史料2-3によればサンスからパリの間に聖アントワヌ教会に寄っていることが分かる。これについては城壁のすぐ外という記述から、サン＝タントワヌ大修道院（サン＝タントワヌ＝デ＝シャン）もしくはそれに付属する教会であったと考えられる¹⁷⁵。ただし、これについては断定的な証拠を挙げることはできない。いずれにせよ、ヴァンセンヌの森から聖アントワヌ教会、そしてパリの順で進行したことは確かである。

この聖アントワヌ教会においては二度目の披露と、この聖遺物についての説明がされたと記されていた。史料2-3によればその後パリに入ると王は裸足でそのうえチュニカも脱いでプロセッションを行っている。この裸足という要素は史料2-6以外全てにみられるので、確実な事実として考えられる。

パリに入った後、一同はノートル＝ダムに向かっており、史料2-2によればここから宮廷まではサン＝ドニの修道士たちが荊冠を運んだことになっている。前述の通りサン＝ドニの大修道院長と修道士の出席はやや確実性に欠けるところがあるが、王以外の人物、おそらく聖職者によって、通りにいた人々にこの荊冠が披露されながら宮廷へと運ばれたと推定できる。よって史料2-1から2-3を合わせて考えると、荊冠の到着の際には少なくとも3回の披露が行われたことが分かる。

史料2-4では、十字架の到着の日付が3月29日となっているがこれは現在伝えられている祝日（9月30日）とは異なっている。確かにマシュー・パリスが取り上げているのが、1242年の聖遺物の到着という可能性も考えられるが、十字架が披露の中心となっていることから、やはり1241年についての記述と判断するのが妥当である。史料2-6においてもこれらの聖遺物についての祝日が9月30日とされていることから、この日付についてはマシュー・パリスの誤りであると考えられる。もしくは実際に到着した日と祝日が異なる可能性もあるが、これについても荊冠の到着日と祝日が一致していることから妥当性に欠けると言える。

経路は荊冠の際とほぼ同様であるが、聖アントワヌ教会以前がどのような道中であったかについては史料2-4からは不明である。同伴者については荊冠の際には見られなかった王妃マルグリットがこれに加わったことが分かる。聖アントワヌ教会ではこの王妃と母后と共に王が台に上り、聖遺物を披露している。おそらく荊冠の際も同じ要領で行わ

¹⁷⁵ ジャン＝ロベール・ピット著、木村尚三郎訳『パリ歴史地図』、東京書籍、2000年、木村尚三郎訳『パリ歴史地図』、東京書籍、2000年、60頁 尚、ルイ9世治世当時のパリの城壁については図6「フィリップ2世が築いた城壁」をに示す。

れたと考えられ、史料 2-3 で漠然としていた、聖アントワヌ教会での披露の主体は王であったと推定できる。パリ入市した際の王の服装についても、表現こそ異なるが質素な姿で進んだ点で共通している。質素な姿でのプロセッションはいくつかの場面で見られ、これは前述のようにヘラクレイオス皇帝を模倣したものであると同時に、ルイが後に傾倒する托鉢修道会への意識、または十字軍帰還後に見せる衣服の極端な簡素化の兆しと捉えることが可能である。

史料 2-4 には王が 3 日間の断食を行ったと書かれており、この点は荊冠と大きく異なっている。ただし、荊冠の際はパリ到着までに 8 日間のプロセッションを行っていたので、その間に断食を行うことは現実的に難しいと考えられる。つまりこの断食が可能であったということは 1241 年のプロセッションでは荊冠の際のような長期間の移動は行われなかった、と推測することができる。また史料 2-4 にはヘラクレイオス 1 世とルイが重ねられた記述があるのに対し、他の史料ではこの表現が見られないため、聖遺物の中でも特に十字架のみにこの比較がされていたと考えられる。

さらに史料 2-4 によれば、ノートル＝ダムから宮廷の間は王が十字架、兄弟たちが荊冠を運んでおり、これは史料 2-2 と共通している。つまり 1241 年には、ノートル＝ダムまで十字架のみが運ばれ、荊冠と合流後、共に宮廷へと運ばれたということが分かり、おそらくその道中で 1239 年と同様に人々に披露されたはずである。よって史料 2-4 からは十字架のパリ到着の際に、少なくとも 2 回の披露がされたことが分かる。

プロセッション内の王の配置は、史料 2-3 は王が後方、史料 2-4 は前方、史料 2-6 は後方となっている。1239 年と 1241 年で実際に配置が変わっていた可能性も考えられるが、いずれの史料においてもこの配置について特別な理由付けがされていないため、厳密に決められたものではなかったと考えられる。

第 3 節 ルイ 9 世による受難の聖遺物披露の意義

第 2 節ではいかにしてルイによって聖遺物が披露されたについて、複数の記述を用いて再構成した。それぞれの記述者が王と関わりを持った時期から考えると、この一連の聖遺物の披露を実際に見ていたのはサンス大司教ゴーティエ・コルヌだけである¹⁷⁶。それ以外の記述は彼の記述を基にしたもので、そのために歴史的史料として重要視がされてこなかったと考えられる¹⁷⁷。ルイ 9 世及びサント＝シャペルに関する歴史学的研究において、この聖遺物到着当日に焦点が当てられてこなかった理由の第一は、おそらくこの直接的な記述史料の不足である。例外としてマシュ・パリスの記述はルイの聖遺物の挿絵が添えられているため、史料として利用されてきた¹⁷⁸。

しかしながら、少なくとも後世の年代記、伝記にこの聖遺物購入についての記述がされているということは、この聖遺物のプロセッションと披露が行われたことは確かであり、その中でこれらの聖遺物が複数回人々に披露されたことも述べた通りである。

さらに、後世のそれぞれの記述の差異を比較することで、この聖遺物披露についての新しい視点を与える可能性がある。例えば、ギョーム・ド・ナンジの記述においては、他のものとは異なりサン＝ドニの大修道院長と修道士が登場している。彼らがルイの聖遺物披露に参加し、さらにはこの修道士達自身の手によって聖遺物が見せられたことをわざわざナンジが追加しているということは、サン＝ドニの人間にとってこの参加がある種の権威

¹⁷⁶ 前述の通り、ナンジ、パリスは王と面識がなく、ボーリュ、シャルトルは十字軍の頃からルイと関わり始めた。

¹⁷⁷ 例えば ル＝ゴフはコルヌ以外の史料を別の箇所では引用しているにも関わらず、この聖遺物披露についてはコルヌのみを使用している。

¹⁷⁸ Legner, A., *Reliquien in Kunst und Kult : zwischen Antike und Aufklärung*, Darmstadt, 1995, p.88

を生む行為であったためだと考えられる。さらに、マシュー・パリスのような外国人年代記者にとってもこの一連の披露が取り上げるべき事項であったことから、当時から十分にこの行為が重要視されていたということが分かる。このように、ルイの聖遺物購入と披露は同時代において注目すべき重要なこととして捉えられていたと言えるだろう。

ここで、王と同時代を生き、良き友であったジャン・ド・ジョワンヴィルがこの一連の出来事について記述していないという事実に着目したい。ジョワンヴィルはシャンパーニュのセネシャルで、1248年の十字軍に参加し、王と懇意になる¹⁷⁹。十字軍の最中には王と共に捕虜となり、帰還後も度々行動を共にしていた¹⁸⁰。彼は王との思い出を基に伝記を記し、第1部を1272年から書きはじめ、ジャンヌ・ド・ナヴァルの要望で1298年から1309年にかけて第2部を書いている¹⁸¹。彼の伝記の特殊性は、王との昵懇の関係であり、そして世俗の人間としてこれを記している点である¹⁸²。ル＝ゴフによれば、ジョワンヴィルの伝記は「文化によって伝えられた理想のモデルとしての聖ルイではない、『真の』聖ルイなる人物に出会わせてくれる」¹⁸³ものである。このようなジョワンヴィルの記述において、一連の聖遺物の購入については全く記載がされていない。確かに、この出来事は彼が王と知り合う以前のものであるが、彼は王の幼少期についてはしっかりと記述をしているのである。彼が最も詳しくこれらの聖遺物と礼拝堂について記しているのは、第3章で挙げるグランド・シャッスから聖遺物を出すシーンのみである。

彼の伝記に一連の聖遺物関する記述がないこと理由は断定し難い。例えば、ジョワンヴィル自身の関心がこれら（聖遺物や礼拝堂）に向けられていなかった、王がこれらに関わる場面をジョワンヴィルが目撃していなかった、または王自身がこれらに頻繁に関わっていなかった、といった理由が考えられるが、いずれも彼の残された記述から判断することは困難である。本稿においては、第2節で挙げてきた、ルイを聖人たらしめる「聖人伝」や、フランスの地に栄光を与えようとする「年代記」の対極としてジョワンヴィルの伝記を捉えるに留めたい。つまり王との記憶を基にした彼の伝記の中で記述が無いということは、これらの聖遺物に関する行為は、王「個人」に属するものとしては捉えられていなかったと仮定することができる。本稿においてはこのことについては1つの可能性として示すに留めるが、もしそうであるならば、元来王の個人的な敬虔さ故にこれらの聖遺物が購入されたという理由づけは、否定され得ることになる。

以上のように、ルイの聖遺物購入についての記述からは、これらの一連の披露が確実に実施されたこと、そしてそのことからこれらの聖遺物は王個人のためだけに購入されたのではなく、披露という他者を巻き込んだ行為が王にとっても重要だったことが分かる。さらにその重要性は同時代の人々にも十分に理解されていたということも述べた通りである。加えて、これらの一連の披露に関する記述が、王の「個人」ではなく「フランス王」「聖なる王」を描く史料に残されていることから、元来挙げられてきた王の個人的な敬虔さ以外にも購入の理由が存在していた可能性が指摘できる。

¹⁷⁹ *Medieval France : an Encyclopedia*, p.501

¹⁸⁰ *Medieval France : an Encyclopedia*, p.501

¹⁸¹ *Medieval France : an Encyclopedia*, p.501

¹⁸² ル＝ゴフ、前掲書、585-586 頁

¹⁸³ ル＝ゴフ、前掲書、594 頁

第3章 公開された場としてのサント＝シャペル

第3章では、第2章で論じた聖遺物が安置されていたサント＝シャペルについて、13世紀当時の人々との関わりに焦点を当てて検証する。第1節ではこの礼拝堂についての基本的な情報を述べ、第2節から第4節で文書史料及び内部装飾の美術史的研究から、いかにしてこの礼拝堂に人が集められていたかを検証し、第5節でこの礼拝堂の特性を述べる。

第1節 サント＝シャペルの特徴と歴史

(1) 建設時期と建設後の歴史

サント＝シャペル（図7、図8）の建設は、1241年から始まり、1248年に献堂式が行われた。献堂式の時点で内部の装飾等が全て完成していたかについては議論があるが、公式にはこの1248年が完成の年とされている¹⁸⁴。約7年での完成は当時の建設において異例の速さであり、このスピードにはおそらく、十字軍出発までに完成を間に合わせようとするルイの意図があったと考えられる。この礼拝堂の建設は前身のサン＝ニコラ礼拝堂を取り壊して行われた。この礼拝堂は、1120年ごろにルイ6世によって創設され、1154年ごろルイ7世によって Saint-Nicolas の名がつけられ、さらに1160年ごろに改装されたとされている¹⁸⁵。サント＝シャペルの設計、建設には当時の建築家ピエール・ド・モントルイユが関与していたとされているが、これを証明する確固たる史料は見つかっていない

現在残っているサント＝シャペルのデザインは13世紀当初のものであるが、これは19世紀以降に再建されたもので、それ以前にはいくつかの変更がこの礼拝堂になされていた。例えば、15世紀にはルイ12世の希望で礼拝堂の中庭と上階を直接つなぐ外側の階段が付け足された。この階段はその後、1630年の火災で一部が消失し、1811年に修復されたが、19世紀の復元工事の際にはオリジナルに戻すため取り除かれた¹⁸⁶。フランス革命時には王室と宗教の象徴であったこの礼拝堂は穀物倉庫として使われ、1793年に門扉、王の紋装飾、尖塔が破壊された¹⁸⁷。1803年から1837年の間、上階の礼拝堂はパリ裁判所の文献庫として使用され、棚を設置するにあたり内部のステンドグラスが2mに渡って取り外され、散り散りになった¹⁸⁸。このような状況の中で1835年ごろから徐々に中世の外観を復興させようとする意見が出始め、1840年から1870年にかけてユージュヌ・ヴィオレ＝ル・デュックの元で装飾の復元が行われ、ステンドグラスについても1846年から1855年にかけて、13世紀当時の技術を用いて建設当初の姿に再現された¹⁸⁹。

(2) サント＝シャペルのモデル

¹⁸⁴ かつて1248年にこの礼拝堂が完成されていなかった根拠として、内部の人物彫刻が異なる場所や日付を示していることが挙げられてきた。現在では献堂式の際に用いられた13世紀の十字架の紋章がすべての人物彫刻に入っていることから、この献堂式の日に装飾も含めて大聖堂が完成していたとされている。Branner, R., "The Grande Châsse of the Sainte-Chapelle," *Gazette des beaux-arts*, 6e période 57, Nendeln, p.8 参照。

¹⁸⁵ Morand, S., *Histoire de la Ste-Chapelle Royale du Palais*, Clousier, 1790, p.26 ただし原文ではルイ6世による創設が1020年と記載されており、これは明らかな間違いのため1120年とした。

¹⁸⁶ ロランス・ド・フィナンス著、Chikako De Lucia 訳『サント・シャペル』, 2014, 11頁

¹⁸⁷ フィナンス、前掲書、13頁

¹⁸⁸ フィナンス、前掲書、13-14頁

¹⁸⁹ フィナンス、前掲書、14-17頁

この礼拝堂は上下二層構造となっており、上階は王のための空間、下階は宮殿の居住者と一般信徒のための、聖母マリアに捧げられた空間となっていた¹⁹⁰。ただし、後述する通り、実際の上下の礼拝堂の使用方法是この原則に必ずしも則るわけではない¹⁹¹。フランスでは元来上下二層構造は司教の礼拝堂に用いられるものであったが、ルイはシャルルマーニュがアーヘンに建てた礼拝堂に用いられていたこの構造を自身のものに取り入れた¹⁹²。このアーヘンの礼拝堂は、イエスとマリアそれぞれの祭壇が別々に置かれていた点においてもサント＝シャペルと共通している¹⁹³。加えてシャルルマーニュの礼拝堂には旧約聖書の王たちの系譜に自身を連ねようとする意図も見られ、このような狙いについてもルイとの類似性が指摘できる¹⁹⁴。さらに、シャルルマーニュ自体も聖遺物の収集に熱心であったため、ルイの聖遺物のコレクションという行為自体にも彼への意識が表れている可能性がある¹⁹⁵。

(3) 研究史

サント＝シャペルについての研究は美術史の中で取り扱われることが主流である。その中でも特に①建築史的研究、②旧約聖書との比較に関する研究が中心となっている。1960、70年代には Robert Branner が複数残る礼拝式用福音集につけられていたカバーを用いて、聖遺物が納められていたグランド・シャッスの図像を再現した¹⁹⁶。

彼はさらにこの礼拝堂の内部の装飾について「外部が内部へと反転した聖遺物容器」と評し、礼拝堂自体を聖遺物容器として考察し得ることを示した¹⁹⁷。

1990年代には Daniel H. Weiss が前述した、サント＝シャペルとシャルルマーニュの宮廷礼拝堂との関係性を論じた¹⁹⁸。また独立して位置していたこのグランド・シャッスがステンドグラスなどの他の図像と対応しており、礼拝堂全体が一つのプログラムとして機能していることも指摘している¹⁹⁹。

2000年代には Alyce. A. Jordan が、この礼拝堂のステンドグラスの物語叙述について、カペー王朝が神によって選ばれたことを示すために意図的に選択された内容が描かれていることを指摘し、これらの物語叙述が、当時の韻文重視の文学理論と結びついていたと結論づけている²⁰⁰。

そして木俣元一は2008年の論文で受難の聖遺物をテーマとしたステンドグラスの分析を行い、教会という建設物が様々な備品を通して「記憶」を刻印し、想起する場となったことを示している²⁰¹。

¹⁹⁰ 佐藤達生、木俣元一『図説大聖堂物語：ゴシックの建築と美術』、102頁

¹⁹¹ これについては第5節で検討する。

¹⁹² Weiss, D.H., *Art and Crusade in the Age of Saint Louis*, pp.23-24

¹⁹³ 五十嵐節子「アーヘン宮廷礼拝堂における空間構成：カール大帝の玉座をめぐる」『美術』26(1)、1975年、45-46頁

¹⁹⁴ 木俣「イェルサレム・コンスタンティノポリス・パリ」、35頁 尚、ルイ9世と旧約聖書の関係については第4節で検討する。

¹⁹⁵ 小崎閏一「歴史の創作--サン＝ドニ修道院の受難聖遺物を巡って」『史学研究』251、2006年、50頁

¹⁹⁶ Branner, R., "The Grande Chasse of the Sainte-Chapelle," *Gazette des beaux-arts*. 6e période 57, Nendeln, p.6-18

¹⁹⁷ 木俣元一「イェルサレム・コンスタンティノポリス・パリ」『西洋美術研究』14、38頁

¹⁹⁸ Weiss, Ibid, pp.23-24

¹⁹⁹ Weiss, Ibid, pp.53-74

²⁰⁰ Jordan, A.A., *Visualizing Kingship in the Windows of the Sainte-Chapelle, Belgium*, 2002, pp.72-78 及び Jordan, A.A., "Stained Glass and the Liturgie: Performing Sacral Kingship in Capetian France," in Hourihane, Colum, *Objects, images, and the word: art in the service of the liturgy*, Princeton, 2003, pp.274-297

²⁰¹ 木俣「イェルサレム・コンスタンティノポリス・パリ」、50頁 尚、分析についての詳しい内容は第4節で述べる。

最後に、サント＝シャペルの研究について最も新しい見解として、Meredith Cohen の研究を挙げたい²⁰²。彼女は、パリの建設事業におけるサント＝シャペルの位置づけを検証し、元来の旧約聖書と関連付けた研究は、この礼拝堂が持つ建築要素の新しさを隠してきたという問題点を挙げている²⁰³。同時にゴシック、特にロワイモーヨン様式の発達が大聖堂といった「上」から行われたものではなく、多様な規模、場所、パトロンの中で交わりながら形成されていたことを主張しており、ロワイモーヨン式の最高峰と言われるサント＝シャペルの建設もこの流れの一つとしている²⁰⁴。

第2節 贖宥状の発行—サント＝シャペルに招かれた人々(1244年から1265年)

(1) サント＝シャペルの贖宥に関する史料

サント＝シャペルに限らず、大聖堂や教会に人を集める方法の一つに贖宥状の発行がある²⁰⁵。本節ではサント＝シャペルに人を集めるために行われた具体的な方法の一つとして、この勅書を検討する。一連の勅書は1244年から始まり1265年までに7回発行されている。この勅書の史料を、以下史料3－1から史料3－7に挙げる。尚、それぞれの史料の訳文はCohen の英訳を参考に執筆者が和訳したものである²⁰⁶。

史料3－1 Papal Bull 1244年6月3日 AN L619.5²⁰⁷

Innocentius episcopus[・・・] omnibus vere penitentibus et confessis, qui capellam ipsam venerabiliter visiterint in die susceptionis predictarum sanctarum reliquiarum singulis annis annum unum, et octo diebus sequentibus centum dies, necnon et quolibet anno in die sancto passionis domini annum unum, et in festo etiam translationis sancte corone spinee dominis annum unum, per singulas quoque ebdomadas omnibus sexta feria, quadraginta dies de iniuncta sibi penitentia misericorditer relaxamus. Datum laterani iii nonas junii pontificatus nostri anno primo.

教皇インノケンティウス²⁰⁸(が發布。)(中略)敬虔な気持ちでこの礼拝堂を毎年「聖なる遺物を賜りし日」(9月30日)に訪れる、真に懺悔し、告解する者達全てに、慈悲を持って、彼らに課された罪を1年分免除する。そしてこの日からの8日間を訪れた者には100日間分、毎年聖金曜日にも1年分、「主の荊冠の奉還の日」(8月11日)に1年分、そしてそれぞれの(祝日)

²⁰² Cohen, M., *The Sainte-Chapelle and the Construction of Sacral Monarchy: Royal Architecture in Thirteenth-Century Paris*, New York, 2014

²⁰³ Cohen, Ibid, p.197

²⁰⁴ Cohen, Ibid, pp.33-65,及び p.198

²⁰⁵ 大聖堂建設のための贖宥状の利用は Vroom, W., Translated by Manton, E., *Financing Cathedral Building in the Middle Ages: the Generosity of the Faithful*, pp.165-168

²⁰⁶ Cohen, ibid, pp.211-227 尚、Cohen はそれぞれの史料を、Bernard Barbiche., *Les actes pontificaux originaux des Archives nationales de Paris* 及び Teulet, Alexandre, *Layettes du trésor des Chartres* に載せられた Archives nationales de France (以下 AN) から引用している。

²⁰⁷ Cohen, Ibid, pp.211-212

²⁰⁸ インノケンティウス4世 在位:1243-54年。教皇至上権の理論に従い、フリードリヒ2世以下の歴代皇帝と対立するなどして露骨な権力政治を行う。1252年に大勅書“Ad Ertirpanda”を発行した。『キリスト教大事典』、95頁参照。

の週の金曜日に 40 日分の免除を行う。この文書は在位の 1 年目（1244 年）6 月 3 日に、ラテラノで公布された。

史料 3-1 より、「聖なる遺物を賜りし日」（9 月 30 日）の参列で 1 年分、続く 8 日間のうちの参列で 100 日分、聖金曜日の参列で 1 年分、「主の荊冠の奉還の日」（8 月 11 日）の参列で 1 年分、それぞれの祝日の金曜日の参列で 40 日分の罪が教皇によって免除されたことが分かる²⁰⁹。

史料 3-2 Papal Bull 1246 年 11 月 6 日 AN L619.8²¹⁰

Innocentus episcopus [...] frequentetur omnibus vere penitentibus et confessis qui capellam ipsam in die qua ipsam dedicari contigerit et postmodum in eius anniversario venerabiliter visiterint annuatim [...] annum unum. Illis vero qui ad eam per octabas sue dedicationis accesserint singulis diebus centum dies de injuncta sibi penitentia misericorditer relaxamus. Datum laterani lugdum viii idus novembrorum pontificatus nostri anno quarto.

教皇インノケンティウス²¹¹（が發布。）（中略）（我々は、）そして「礼拝堂の献堂日」（4 月 26 日）に、またはその日に続く記念の日に、毎年この礼拝堂を訪れる、真に懺悔し、告解する者達全てに対して、（中略）毎年参列に付き慈悲深く彼らに課せられた罪を 1 年分（免除する）。（そして）奉納の日からの 8 日間に訪れた者には 1 日の参列につき 100 日分を免除する。この文書は在位の 4 年目（1246 年）11 月 6 日に、ラテラノで公布された。

史料 3-2 より、「礼拝堂の献堂日」の参列で 1 年分の、続く 8 日間のうち 1 日の参列につき 100 日分の罪が教皇によって免除されたことが分かる。

史料 3-3 Papal Bull 1246 年 11 月 6 日 AN L619.9 9 (AP, I, no.594) ²¹²

Innocentus episcopus [...] frequentetur omnibus vere penitentibus et confessis qui capellam ipsam²¹³ in die exaltationis sancte crucis in qua fuerunt ibi relique predictae de ligno sancte crucis reposite venerabiliter visiterint annuatim [...] unum annum de iniuncta sibi penitentia misericorditer relaxamus. Datum lugdunum viii ides novembrorum pontificatus nostri anno quarto.

教皇インノケンティウス²¹⁴（が發布。）（中略）（我々は、）そして、聖十字架の木からなる聖遺物が納められた、「聖十字架の昇天の日」（9 月

²⁰⁹ それぞれの史料に記された贖宥の日数などは表 3-1 「各史料の発行者・発行年・対象の日・免除の日数」にまとめている。

²¹⁰ Cohen, Ibid, pp.219-220

²¹¹ インノケンティウス 4 世を指す。

²¹² Cohen, Ibid, p.220

²¹³ Cohen の引用ではこの間に「I」が挟まれていたが、その目的が明確ではないため本稿においては削除した。

²¹⁴ インノケンティウス 4 世を指す。

14 日) にこの礼拝堂にやってくる、真に懺悔し、告解する者達すべてに、毎年の参列に付き慈悲深く彼らに課せられた罪を 1 年分免除する。この文書は在位の 4 年目 (1246 年) 11 月 6 日月曜日に公布された。

史料 3-3 より、「聖十字架の昇天の日」の参列で 1 年分の罪が教皇によって免除されたことが分かる。

史料 3-4 Archiepiscopal Bull 1248 年 4 月 AN L619.11²¹⁵

Biturcensi, Seno Rochomagensi Turnoensi et Tholetanensi archiepiscopis, Lauduinensi Suessionensi Silvanectensi, Lingo Carnotensi Aurelianensi Meldensi, Baiocensi, Ebroicensi, et Aprenensi episcopis[...] omnibus qui dictam capellam in festivitate dedicationis eiusdem sive infra octabas et in ipsius octabis, cum devotione et reverentia annuatim visitaverint, annum unum de injunctis sibi penitentiis misericorditer relaxamus, [...] Datum anno Dominice incarnationes millesimo duecentesimo quadragesimo octavo, mense aprili.

ブルージュ、サンス、ルーアン、トゥールーズ、トレドの大司教、ラン、ソワッソン、サンリス、ラングル、シャルトル、オルレアン、モー、バイユー、エヴルー、アプロスの司教 (が発布。) (中略) 慈悲深く敬虔さと信仰心を持ちながら、「礼拝堂の献堂日」もしくはその 8 日以内もしくは 8 日目に礼拝堂を訪れる、信仰心に篤く敬虔な全ての者達には、毎年参列につき彼らに課せられた罪を 1 年分免除する。(中略) (この文書は)、1248 年 4 月 (に公布された。)

史料 3-4 より、新たに「礼拝堂の献堂日」とその後の 8 日間のうちの参列で 1 年分の罪が複数の司教、大司教によって免除されるようになったことが分かる。

史料 3-5 Bull from the papal legate 1248 年 5 月 27 日 AN L619.10²¹⁶

Odo miseratione divini Tusculanensis episcopus, apostolice sedis legatus, [...] nos volentes ut eadem capella, quam in honore sancte corone de victoriosissime crucis prefate consecravimus in octavis Resurrectionis Dominice, assistantibus nobis, Biturcensi, Senonensi, Rochomagensi, Turnoensi et Tholetanensi archiepiscopis, Laudunensi, Suessionensi, Silvanectensi, Lingonensisse, Carnotensi, Aurelianensi, Meldensi, Baiocensi, Ebroicensi, et Aprenensi episcopis, et pluribus aliis prelati, [...] omnibus dictam capellam in festivitate dedicationis eiusdem et usque ad octavum diem cum devotione ac reverentia visitantibus annum unum et quadraginta dies de injuncta sibi penitencia misericorditer relaxamus. Datum Parisius, vi kalendas junii anno Domini millesimo ducento quadragesimo octavo.

²¹⁵ Cohen, Ibid, pp.220-221

²¹⁶ Cohen, Ibid, p.222

神の慈悲によってトスカーナ司教、教皇の特使であるオド（が發布。）
（中略）我々は、前述の偉大な勝利の十字架から（為る）荊冠が奉納されたこの礼拝堂が、（中略）ブールジュ、サンス、ルーアン、トゥールーズ、トレドの大司教、ラン、ソワッソン、サンリス、ラングル、シャルトル、オルレアン、モー、バイユー、エヴルー、アプロスの司教や他の聖職者たちの下、（中略）毎年「礼拝堂の献堂日」もしくはそれから8日目までに参列した信仰心に篤く敬虔な全ての者達には、慈悲深く、彼らに課せられた罪を1年と40日分免除する、ことを望む。（この文書は）パリで1248年5月27日に發布された。

史料3-5より、新たに「礼拝堂の献堂日」とその後の8日間のうちの参列で1年と40日分の罪が複数の司教、大司教の下免除されるようになったことが分かる。ただし、この贖宥の発行者は教皇特使である。

史料3-6 Papal Bull 1265年8月25日 AN L619.12²¹⁷

Clemens episcopus servus servorum dei [...] omnibus vere penitentibus et confessis qui ad eadem capellam in anniversario dedicationis ipsius die et usque ad octo dies sequentes causa devotiois accesserint annuatim centa dierum indulgentias concesserunt. [...] Dat perusii viii kl novembre pontificatus nostri anno primo.

教皇クレメンス²¹⁸（が發布。）（中略）自らの敬虔さのために、「礼拝堂の献堂日」とその後に続く8日間にこの礼拝堂を訪れる、真に懺悔し、告解する者達すべてのために、毎年参列につき100日分の贖宥状を与える。（中略）（この文書は）ペルージャで在位の1年目（1265年）8月25日（に公布された。）

史料3-6より、新たに「礼拝堂の献堂日」とその後の8日間に100日分の贖宥が教皇から与えられるようになったことが分かる。

史料3-7 Papal Bull 1265年8月25日 AN L619.13²¹⁹

Clemens episcopus [...] frequentetur omnibus vere penitentibus et confessis qui ad eadem capellam in anniversario die dedicationis ipsius et usque ad octo dies sequentes causa devotiois accesserint annuatim [...] unum annum et quadraginta dies de injunctis sibi penitentiis miseri corditer relaxamus. Datum perusii viii kl novembre pontificatus nostri anno primo.

教皇クレメンス²²⁰（が發布。）（中略）「礼拝堂の献堂日」とその後に

²¹⁷ Cohen, Ibid, p.227

²¹⁸ クレメンス4世 在位：1265-68年。ルイ9世との関係については第1章第2節で述べた通りである。

²¹⁹ Cohen, Ibid, p.227

²²⁰ クレメンス4世を指す。

続く 8 日目までに、この礼拝堂に自らの敬虔さのために訪れる、真に懺悔し、告解する者達すべてのために、参列につき彼らに課せられている罪 1 年と 40 日分を免除する。(この文書は) ペルージアで在位の 1 年目 (1265 年) 8 月 25 日 (に公布された。)

史料 3-7 より、新たに「礼拝堂の献堂日」とその後の 8 日間に 1 年と 40 日分の罪が教皇によって免除されるようになったことが分かる。

これ以降もルイの列聖の記念として 1298 年に、サン＝ドニからサント＝シャペルへのルイの頭部奉還の記念として 1300 年にボニファティウス 8 世が、1306 年にはクレメンス 5 世とフランスの司教たちが、ルイの聖遺物のサント＝シャペルへの奉還に参加した人々に追加で贖宥を与えている²²¹。

(2) サント＝シャペルの贖宥の意義

サント＝シャペルの贖宥状については以上の勅令が出されている(それぞれの要点については表 3-1 参照)。史料 3-1 から「聖なる遺物を賜りし日」(9 月 30 日)と「主の荊冠の奉還の日」(8 月 11 日)が、史料 3-2 から「礼拝堂の献堂日」(4 月 26 日)が祝日になっていたことが分かる。

表 3-1 「各史料の発行者・発行年・対象の日・免除の日数」

	発行者	発行年	対象の日	免除の日数
史料 3-1	教皇インノケンティウス 4 世	1244 年 6 月 3 日	9 月 30 日	1 年分
			9 月 30 日から 8 日間	100 日分
			聖金曜日	1 年分
			8 月 11 日	1 年分
			それぞれの祝日の週の金曜日	40 日分
史料 3-2	教皇インノケンティウス 4 世	1246 年 11 月 6 日	4 月 26 日	1 年分
			4 月 26 日から 8 日間(1 日につき)	100 日分
史料 3-3	教皇インノケンティウス 4 世	1246 年 11 月 6 日	9 月 14 日	1 年分
史料 3-4	大司教・司教	1248 年 4 月	4 月 26 日とその後の 8 日間	1 年分
史料 3-5	教皇特使	1248 年 5 月	4 月 26 日とその後の 8 日間	1 年と 40 日分
史料 3-6	教皇クレメンス 4 世	1265 年 8 月 25 日	4 月 26 日とその後の 8 日間	100 日分
史料 3-7	教皇クレメンス 4 世	1265 年 8 月 25 日	4 月 26 日とその後の 8 日間	1 年と 40 日分

贖宥状の発行には限度が定められており、原則教皇と教皇特使は 1 年と 40 日(祝日とその後の 8 日間合わせて)、司教は 40 日(一つの祝日に付き)と決められていた²²²。史料 3-1、3-2、3-4 は原則の年数を超えて贖宥状が発布されていること

²²¹ Cohen, Ibid, p.152

²²² Cohen, Ibid, p.153 及び Shaffern, R.W., “The Medieval Theology of Indulgences”, in Swanson, R.N. (ed) , *Promissory notes on the treasury of merits : indulgences in late medieval Europe*, Leiden, 2006, pp.11-36

が分かる。また史料 3-6 と 3-7 の贖宥は、同じ「礼拝堂の献堂日」を対象に同日付で発行されているが、このように 2 回出されている理由については不明である。ただし、この 2 つを同じ贖宥として考えると合計は 1 年と 140 日になり、基準の日数を超えることになる。

このように規定の日数を超える贖宥が多数あることから、発行者にとってこの超過に何らかの目的があったと考えられる。その目的について Cohen は以下の 3 つを挙げている。第一にサント=シャペル建設の資金のため、第二に十字軍の費用のため、そして第三に王の新しい聖遺物を王国の信者たちに知らしめるため、そしてその信者たちをサント=シャペルの祝日を祝うために招くため、である²²³。特に注目すべきは 3 つ目の理由である²²⁴。この理由は明確に「宣伝」「広報」としての役割を贖宥状の発行に与えており、本来の贖宥状の目的とは異なる用途として活用されている²²⁵。ただし、このような贖宥状がルイ自身の希望によって出されたのかについては定かではない。

さらに、贖宥状を利用して人を集めるという行為自体に、ルイの聖地への意識を指摘することもできる。本来ならばそれらが残っているはずのないフランスにおいて、聖遺物の中でも最も高貴なキリストの聖遺物を持つという事は、多大な権威と結びつくことである。13 世紀において、これらの聖遺物がたとえ、コンスタンティノーブルから移送されてきたものであっても、その聖性が失われることはなかった。ギアリが示している通り、盗難された聖遺物についても、「盗まれる」という行為が聖遺物自身の意志であるという理論が作られたように、必ずしも聖遺物と発見場所、本来置かれていた場所は一致しなくても聖性の面においては問題がなかった²²⁶。当時においてもボードアン 2 世から手に入れた聖遺物達がパリに納められた事実が、フランスが神によって選ばれた地であると証明している、という解釈がされていた²²⁷。例えばサンス大司教ゴーティエ・コルヌは「われらが主イエス・キリストがその贖罪の玄義を示すために約束の地を選ばれたように、同じくおのれの受難の勝利をさらに敬虔に崇めるために、われらがフランスを特別に選ばれたと思われるし、また人々はそう信じている。それは、われらが主でありまた贖い主によって、オリエントのうちのもっとも近いといわれているギリシアの地から、西欧の辺境に位置するフランスまで、いとも聖なる受難の遺物が奉遷されたことにより、主の名がオリエントから西欧至るまで褒めたたえられんがためである」²²⁸と考えていた。

このようにパリは一つの聖地となり、聖地であるからこそ贖宥与えることができたのである。そして贖宥状の発行自体が、この新しい聖地としての宣伝をしているとも考えられる。サント=シャペルの贖宥状は単なる資金目的の為のものではなく、第一に聖遺物がパリにあること、第二にその聖遺物のための祝日を祝うこと、第三に新しい聖地としてパリが選ばれたこと、これらの 3 つを知らしめる為に贖宥状の発行が利用され、人を集めようとしたと言うことができる。

²²³ Cohen, *ibid*, pp.153-154

²²⁴ Cohen, *ibid*, p.154

²²⁵ Shaffern, R.W., "Indulgences and Saintly Devotionalisms in the Middle Ages", *The Catholic Historical Review* Vol. 84, No. 4, 1998, pp. 643-661

²²⁶ Geary, P.J., *Furta Sacra: Thefts of Relics in the Central Middle Ages*, Princeton, 1978

²²⁷ ル=ゴフ、前掲書、173 頁

²²⁸ "Sicut igitur Dominus Iesus Christus ad suae redemptionis exhibenda mysteria terram promissionis elegit, sic ad passionis suae triumphum devotius venerandum nostram Galliam videtur & creditur specialiter elegisse, vt ab ortu Solis ad occasum laudetur nomen Domini, dum à climate Graeciae, quae vicinior dicitur Orienti, in Galliam patribus Occidentis contiguam, aut confinem, ipse Dominus ac Redemptor noster suae sacratissimae passionis sancta transmitteret instrumenta.", Gautier Cornut, "Historia susceptionis coronae spineae Iesu Christi", pp.407-408 尚、和訳はル=ゴフ、前掲書、173 頁のものを使用した。

第3節 礼拝規定書 (Ordinal) に登場する人々 (14、15 世紀)

(1) サント=シャペルの礼拝規定書に関する史料

次にサント=シャペルの礼拝規定書から、実際にこの礼拝に参加していた人々について検証する。現存している礼拝規定書は 14 世紀以降の物る為、必ずしもルイが生きた 13 世紀の内容が分かるわけではない。しかし本稿では細かい儀礼ではなく、そこにいる人々がどのようにこの儀礼に関わっているかを知ることが目的であるため使用している。Cohen が挙げているもっとも古く、詳細が分かる礼拝規定書は、14 世紀中ごろの Bibliothèque nationale de France MS lat.1435 (以下 BnF Lat.1435) と 1470 年の Bibliothèque de l'Arsenal MS114 (以下 Arsenal 114) である。

BnF Lat.1435 は、蠟燭の数や礼服の色といった礼拝の儀式に必要な備品について記述はされているものの、その情報量はあまり多くない²²⁹。しかしこの儀式の聴衆について明らかにしている²³⁰。BnF Lat.1435 の礼拝規定書についての史料は以下の史料 3-8 に挙げる。

史料 3-8 BnF Lat.1435²³¹ Good Friday (受難日) ²³²

Ad tertiam [...]ille qui facit officium deponit crucem coram altare [...]et primum adoratur et osculatur eam flexis genibus, post eum rex statim adoratur eandem [...]ille qui facit officium[...] ostendit crucem populo assistenti

3 番目の時祈の際、(中略) 儀式を執り行っている者は、祭壇の前に十字架を置いた、(中略) そして最初にそれ (十字架) を崇め、膝を曲げながら口付けをした。彼の後すぐに、王がそれを崇めた。儀式を執り行う彼は、(中略) 居合わせた人々に十字架を見せた。

もう一つの礼拝規定書 Arsenal 114 にも王家でも聖職者でもない人間の存在が示されている。礼拝規定書 Arsenal 114 についての史料は、以下の史料 3-9 から史料 3-17 に挙げる。尚、史料中に出てくる「コレージュ」(collegius) とは 1246 年に設立されたサント=シャペルの祝日の為に働く聖職者たちのことを指す²³³。

史料 3-9 Arsenal 114 (献堂の祝日) ²³⁴

²²⁹ Palazzo, É., “La liturgie de la Sainte-Chapelle: un modèle pour les chapelles royales françaises?”, dans *La Sainte-Chapelle de Paris : Royaume de France ou Jérusalem céleste? : Actes du Colloque*, Hediger, C. (éd), 2007, pp.101-112,

²³⁰ Cohen, *ibid*, p.154

²³¹ BnF Lat.1435, fols.13v and 14r.なお、以下の日本語訳は特記がない限り Cohen, *ibid*, pp.154-156 及び Haggh, B., “An Ordinal of Ockeghem's Time from the Sainte-Chapelle of Paris: Paris, Bibliothèque de l'Arsenal, MS 114”, *Tijdschrift van de Koninklijke Vereniging voor Nederlandse Muziekgeschiedenis* Deel 47, No. 1/2, 1997, pp. 33-47 を参照。

²³² 祝日の名称については原則日本基督教団のものを使用している。

²³³ 当初コレージュは 5 人の礼拝堂付司祭及び副礼拝堂付司祭、書記 (clerk)、管理係 (administrator) の 17 人で構成されていた。Cohen, *ibid*, p.154 参照。

²³⁴ Arsenal 114, fol. 133v; Cohen, *ibid*, p.255, Notes 57

[...] dum fuerit processio ante magnum altare inferioris capelle
[...] prelatus thurificat altare, et regem, si ibidem praesens fuerit, et
praedictos chorales, et deinde puer thurificat collegium et populum
[...] et incepta antiphona [...] a choralibus [...] processio revertatur
in capellam superiorem"

(中略) 下の階の礼拝堂の祭壇で礼拝が行われる際、(中略) 聖職者は祭壇で、出席しているのであれば王、そして前述の聖歌隊の少年たちに香を焚き、続いて聖職者たちがコレージュと人々に香を焚いた、(中略) 聖歌隊による(中略) 交唱と(中略) プロセッションが上の階の礼拝堂に移動する前に。

史料 3-10 Arsenal 114 Palm Sunday (棕櫚の主日) ²³⁵

prelatus vel thesaurarius si non fuerit aliquis prelatus [...] debet
facere benedictionem palmarum sive ramorum, et palmis distributis,
collegio et populo hic assistenti

聖職者もしくは宝物を管理する役職の者²³⁶、もしなければ別の聖職者は、(中略) の棕櫚を聖別し、これらをコレージュやそこに居合わせた人々に分け与えることが勤めである。

史料 3-11 Arsenal 114 Palm Sunday (棕櫚の主日) ²³⁷

"debet adorari crux primo ab illo qui facit officium, et deinde a collegio, et [illegible] populo [...] Et cruce ab omnibus adorata
dyaconus debet legere evangelium ante crucem

礼拝を行う者が最初に十字架を崇め、その次にコレージュ、(判別不能) 人々が行うのが勤めである。(中略) そして皆で十字架を崇め、助祭が福音書を十字架の前で読むのが勤めである。

史料 3-12 Arsenal 114 Good Friday (受難日) ²³⁸

Prelatus, thesaurarius aut ille qui facit officium [...] cantat
antiphonam Ecce lignum ostendendo populo crucem praedictam [...] et
capellanus primus adoretet osculetur, deinde Rex, domini et Barones,
collegium et populus assistens

高位聖職者、宝物管理係、礼拝を行う者は(中略) 人々に前述の十字架を見せながら「十字架を見よ」の交唱を歌い(中略) 礼拝堂付き聖職者は最初に

²³⁵ Arsenal 114, fol. 67r-v; Cohen, ibid, p.255, Notes 58

²³⁶ 以下、「宝物管理係」と記す。

²³⁷ Arsenal 114, fol. 67v; Cohen, ibid, p.255, Notes 63 尚、訳中の(判別不能)は本文の[illegible]を反映させたものである。

²³⁸ Arsenal 114, fol. 221v; Cohen, ibid, p.255, Notes 60

この十字架を崇め、接吻し、その次に王、君主、貴族、コレージュ、居合わせた人々が行う。

史料 3－1 3 Arsenal 114—4 (Purification) ²³⁹ (マリアの清めの祝日)

in die purificationis cantata tertia conveniunt clerici et populus in capella; [...].accenduntur cerei et dividuntur, clero et populo

マリアの清めの祝日、3 番目の時祷の詠唱の後、聖職者と人々は礼拝堂を訪れ、(中略) 蠟燭が灯され聖職者と人々によって分け与えられる。

史料 3－1 4 Arsenal 114—5 Ash Wednesday (灰の水曜日) ²⁴⁰

thesaurarius [...] facit absolutionem super populum et deinde facit benedictionem cinerum, et facta benedictione apponit super capita singulorum in modum crucis"

宝物管理係は(中略) 人々に免罪を行い、灰の祝福を与え、そして祝福与えるため、十字架の形を模しながら灰を一人ひとりの頭上に置く。

manu extenta super populum dicat orationem absolutionis²⁴¹

彼(宝物管理係)の手を人々の方へと伸ばし、免罪の祈りを捧げる。

史料 3－1 5 Arsenal 114—6 Maundy Thursday (洗足木曜日) ²⁴²

post prandium congregato collegio et populo ad pulsationem fit processio ad lavanda singula altaria. superioris et inferioris capelle"

食事の後、人々とコレージュと共に鳴っている鐘の周りに集まり、上階と下の階のそれぞれの祭壇を洗うためプロセッションを作る。

史料 3－1 6 Arsenal 114—7 Holy Saturday (聖土曜日) ²⁴³

Sabbato in vigilia pasche hora quasi viii, populo, cum collegio in sacra capella congregato, quidam capellanus aut dyaconus faciat benedictionem cerei paschalis

聖土曜日の 8 時ごろに、人々とコレージュが礼拝堂に集まり、特定の礼拝堂付き聖職者もしくは助祭は復活祭のろうそくに祝福を与える。

²³⁹ Arsenal 114, fol. 240v; Cohen, ibid, p.255, Notes 62 以下註 239—243 同様。

²⁴⁰ Arsenal 114, fol. 57v

²⁴¹ Arsenal 14, fol. 213r-v

²⁴² Arsenal 14, fols. 70r-71v

²⁴³ Arsenal 114, fol. 222v

ille qui facit officium vadit ad altare aquam benedictam
aspergendam, deinde ad collegium et populum

礼拝を行う者は祝福のための聖水を撒くため祭壇に行き、その後コレージュと人々が（これを）行う。

(2) 礼拝における人々の行動

全ての史料に礼拝へ参加する「人々」(populus)が明記されている。この「人々」について、全ての史料で同じ単語(populus)で表されていることから、同一の集団を指すと考えられる。この集団の中身は、史料中に出てくる他の集団とは異なるものと考えることが妥当である。従って、高位聖職者(史料3-9、3-12)、聖職者(史料3-9²⁴⁵、3-10、3-13)、礼拝を行う人(史料3-8、3-11)、宝物係(史料3-10、3-12、3-14)とは別の集団、つまり世俗の人間として考えられる。また、コレージュとも別の組織なのは明らかである。世俗の人々としては「王族」、「貴族」、「貴族未満の階級の人々」が候補に上がるが、このうち「貴族」については史料3-12で登場しているため、可能性が低いと思われる。また、「王族」についても、王が単身で登場している(史料3-8、3-9、3-12)にもかかわらず、全く別の行動を他の王族の人間が行うとは考え難い。

以上の理由より、本稿ではこの「人々」を、聖職者(広く教会に従事する者として)、王族、貴族いずれでもない平民の一般信徒として捉えている。つまり全ての史料にこの「人々」が登場していることから、サント＝シャペルの礼拝には一般の人々が参加しており、さらに礼拝規定書に記されていることから、偶発的に祝日の礼拝に参加していたのではなく、あらかじめ彼らの存在が前提とされ、かつ儀式の一貫にが含まれていたことが分かる。

次にこの「人々」の行動に注目すると、礼拝の中で受け手として参加する場合と、聖職者たちとともに行動している2つに分けることができる。前者については史料3-8(十字架を見せられる)、史料3-9(焚かれた香を受ける)、史料3-10(棕櫚の枝をもらう)、史料3-14(免罪を受ける)が当てはまる。対して、後者の聖職者たちと同様の行動については、史料3-11(十字架を崇める)、史料3-12(十字架を崇める)、史料3-13(蠟燭を分ける)、史料3-15(プロセッションを作る)、史料3-17(聖水を撒く)が該当する。ただし、史料3-16については「礼拝堂に行く」という表現しか無く、それ以外の行動については記載がないためいずれにも該当しないものとする(表3-2参照)。

表3-2 「史料3-8から3-17に記された『人々』の行動」

受け手として参加する場合	聖職者たちとともに行動する場合
史料3-8(十字架を見せられる)	史料3-11(十字架を崇める)
史料3-9(焚かれた香を受ける)	史料3-12(十字架を崇める)
史料3-10(棕櫚の枝をもらう)	史料3-13(蠟燭を分ける)
史料3-14(免罪を受ける)	史料3-15(プロセッションを作る)
	史料3-17(聖水を撒く)

²⁴⁴ Arsenal 114, fol. 229v

²⁴⁵ 史料3-9の“puer”は「聖職者」と訳した。

これらの違いについては、行動の種類や祝日との関係性などは見られないため、何を基準に変化するかは不明である。しかし、サント＝シャペルでは、礼拝への参加は当然のことながら、状況によっては中心となって動くほどに、一般の人たちが礼拝と強い関わりを持っていたことが明らかである。

第4節 礼拝堂内の装飾—聖遺物を伝える内装

前節までで、実際にサント＝シャペルに人を招こうとする試みとして贖宥状の発行を、一般の人々の礼拝の参加を裏付ける物として、礼拝規定書を検証した。次に、本節では聖遺物を見る空間であったサント＝シャペルの内部について検討する。

(1) グランド・シャッス

サント＝シャペルの上階には、かつて聖遺物をいれるためのグランド・シャッス（聖遺物箱）が置かれていた。現在失われてしまったため、このグランド・シャッスについての研究は、主に17世紀のスケッチを参考に行われてきた（図9）。サント＝シャペルのものに限らず、グランド・シャッスとははただ単に聖遺物をいれておくだけの容器ではない。これは聖遺物が持つ聖性を視覚的に分かりやすく伝える装置としての機能を持ち合わせていた。一方、中身の聖遺物はその聖性によって聖遺物箱の視覚的な美しさの裏付けとなり、この美しさは聖性の感受をより広い範囲で可能にしたのである²⁴⁶。このように、聖遺物と聖遺物箱は相互に補完し合いながらそれぞれの存在を確立していた。

サント＝シャペルのグランド・シャッスは、この礼拝堂そのものの形を模して銀やメッキで作られており、前の部分についたカーテンが開閉可能で、開いた際に中の聖遺物、つまり荊冠、聖十字架が見える作りとなっていた²⁴⁷。グランド・シャッスと天蓋を含むデザインはソロモン²⁴⁸の宮廷と玉座を象徴していると解釈されている²⁴⁹。また、グランド・シャッス内の前述のカーテンと、臨在の幕屋やソロモンの神殿で内陣の前に置かれた垂れ幕とを関連づける見解もあり、この解釈においては、聖遺物は契約の棺を模したものとして捉えられる²⁵⁰。

また、このグランド・シャッスには背後に台（tribune）が付けられていたことが、ジョワンヴィルの記述から分かる²⁵¹。彼によると、おそらく1267年ごろルイ9世がこの台に立ち、グランド・シャッスから聖十字架を取り出していたという。しかしこの台は建設当初から付けられていたものではなく、十字軍から帰還後の1254年にルイ自身によって付け加えられたものである²⁵²。このような変更は、できるだけ安全に、そして容易にグランド・シャッスに近づき聖遺物を取り出すことを、王自身が目的としたことを意味している。

²⁴⁶ 秋山、前掲書、75-102頁、及び、木俣「イェルサレム・コンスタンティノポリス・パリ」、38頁参照

²⁴⁷ 木俣「イェルサレム・コンスタンティノポリス・パリ」、37頁

²⁴⁸ ソロモン王：イスラエル統一王国第三代王。在位：前961-922年。ダビデの末子として即位し、王国の繁栄を築いた。20年の歳月を経て前952年にイェルサレム神殿を建設した。『キリスト教大事典』、669-670頁参照

²⁴⁹ Weiss, Ibid, pp.53-74

²⁵⁰ 木俣「イェルサレム・コンスタンティノポリス・パリ」、37頁

²⁵¹ 「王の礼拝堂へ赴いてみると、王は聖遺物をのせた高台に上がって、本物の十字架を下に下ろされておられた。」（ジャン・ド・ジョワンヴィル、前掲書、303頁）

²⁵² Branner, Ibid, p.14

以上のようなグランド・シャッスには2つのメッセージが含まれていると考えられる。第一に、サント=シャペルを模した容器に聖遺物をいれることで、まさにこの礼拝堂に聖なる遺物があることを強調している。第二に、この礼拝堂にある聖遺物のイメージを、キリストの受難を超えて旧約聖書の時代にまで遡らせている。この遙か昔まで遡ったイメージを現代（サント=シャペル建設時）に繋げているのが、15面のステンドグラスである。

（２） ステンドグラス

それぞれのステンドグラスの配置、描かれている内容についてはグロデッキの分類をもとに図10に示している。サント=シャペルのステンドグラスを、シャルトルのものと比較した木俣氏は、全体を把握しやすいこじんまりとした作りである反面、個々の窓の独立性が確保されず、また描かれている物語自体が聖書からの抜粋でそれぞれの相関性が低いことを指摘している²⁵³。確かに、縦方向を強く意識したサント=シャペルのステンドグラスは、上から下までの全ての絵を読み解くことが非常に困難である。このステンドグラスは聖書の物語を伝えることではなく、戦闘や戴冠というイメージを強くおし出す役割を果たしており、そのイメージの帰着点がステンドグラスA（図11）にあたる部分である。列王記の隣に示されたこの物語は、荊冠がパリに到着する「同時代」の出来事を描いている。元来、この物語は聖遺物の歴史を描いているとされてきたが、Alyce. A. Jordan はカペー朝の歴史にその重点が置かれていることを指摘している²⁵⁴。

さらに木俣氏は、このステンドグラスAを以下のように4つに分類し、物語の進行方向に注目した。その結果を以下の表3-3にまとめている²⁵⁵。ステンドグラスAを下から見ていくと、①の部分では左から右（A168 から A115）、②では右から左（A103 から 70）、③では左右対称（A69 から A56）、④では左から右（A47 から A33）に物語が進んでいることを木俣氏は指摘している²⁵⁶。

表3-3「木俣氏の分析によるステンドグラスAの物語の進行方向」（執筆者作成）

	区分	通し番号	物語の進行方向	参考図
下 ↓ 上	①	168～115	左→右	無し
	②	103～70	右→左	図13～図21
	③	69～56	左右対称	図22～図23
	④	47～33	左→右	図24

通常、中世のステンドグラスは左から右に向かって読むようになっており、サント=シャペルの他の窓もその原則に法っている²⁵⁷。Aの窓で物語の進行方向が変わる②

²⁵³ 木俣「イェルサレム・コンスタンティノポリス・パリ」、40-41 頁

²⁵⁴ Jordan, A.A., “Stained Glass and the Liturgie: Performing Sacral Kingship in Capetian France,” in *Hourihane, Colum, Objects, images, and the word: art in the service of the liturgy*, Princeton, 2003, pp.274-297

²⁵⁵ 実際のステンドグラスと対応させた①～④区分は図11「Alyce. A. Jordan が再現したステンドグラスA」に示す。また、通し番号は図12「ステンドグラスAの通し番号」に示している。

²⁵⁶ ステンドグラスAについての分析は木俣「イェルサレム・コンスタンティノポリス・パリ」、42-49 頁を参照。

²⁵⁷ 木俣「イェルサレム・コンスタンティノポリス・パリ」、45-46 頁

の部分、窓に描かれた登場人物の動きもほとんどが右から左になっており、読み進める順番と一致している²⁵⁸。この事実について木俣氏はいくつかの解釈を示している。第一にそれ以外の物語の流れをせき止める役割、第二に向かい側にある創世記の進行方向と対応させている可能性、そして第三に、遠方、つまりここではコンスタンティノーブルからパリへと荊冠が近づいてくるイメージを伝えようとした可能性を挙げている²⁵⁹。

この動的なイメージは次に続く③の部分とも対応しており、この部分ではサント=シャペルに納められた荊冠が左右対称に描かれ、「空間的移動を喚起する表現（中略）時間的経過の感覚も取り除かれている」²⁶⁰。

最後に④の部分では再び左→右の進行方向に戻っており、この部分のイメージについて2つの解釈がある。第一は、1248年のサント=シャペルの献堂式以前の内容として考えるのに対し、第二の解釈は献堂の時点から未来にあたる十字軍遠征を意識したものである²⁶¹。第二の解釈をとる木俣氏は、②の部分と対応させて考えるならば、④の部分に描かれる都市は遠方の聖地イェルサレム、つまり十字軍の目的地となる指可能性を摘し、ステンドグラスAの部分にはパリ、コンスタンティノーブル、イェルサレムが物語の地理的枠組みを形成していると述べている²⁶²。確かに、物語の進行方向の変更は偶然とは考え難い。さらに、聖地への強い意識を持ち、それ故に十字軍に出発したルイの偉業を、彼の礼拝堂のステンドグラスに描くことも理にかなっていると言える。よって本稿においてもこの第二の解釈を踏襲することとする。

グランド・シャッスによって遥か彼方ソロモン王の時代まで遡った記憶は、このようにステンドグラスによってカペー朝の現代に、そして未来へと繋がっている。そこに描かれた物語は前述のように単なる事実の羅列ではなく、カペー朝の王達の戦いや政策が神に選ばれし者が行う正当な行為であったことを証明するために選ばれたシーンであった。ステンドグラスは聖遺物伝来の過程と共に、その背景にある王権の正当化をも伝える装置であり、現代の観点から考えるならある種の「解説」とも捉えられる。確かに、このステンドグラスは前述の通り肉眼で一つ一つの物語を読み解くことは困難であるが、しかしあくまでイメージとして聖遺物到着、カペー王朝の栄光を伝えることは可能である。

以上、グランド・シャッスとステンドグラスによる聖遺物のイメージ化について述べた。2つに共通していることは、「今まさにこの礼拝堂に聖遺物がある」ことを強調すると共に、キリスト教史における過去と現代を繋げている点である。そしてさらに、ステンドグラスによってそれは未来へとも繋がっていると言える。

そしてまた、ルイはこの聖遺物のコレクションを通して、過去の3つの権威との繋がりを演出している。第一に、前述のように礼拝堂内部の装飾によってソロモンを含めた旧約聖書の王たちとの繋がりが表現されている。第二に、礼拝堂の構造を真似ることで、シャルルマーニュとの結び付きを生み出した。第三に、第2章で述べた通り、聖十字架という聖遺物との関係についてコンスタンティノーブル皇帝ヘラクレイオス1世への意識が見られる。これらは美術史、建築史、聖遺物研究それぞれの分野でルイ、もしくはサント=シャペルのモデルとして挙げられてきたが、ルイ自身もこの3つの権威を意識していたと考えられる。なぜなら、ルイにとって、旧約聖書、ビザンツ、カロリング朝の後継者として自身と王朝を演出することは、その権威を高めるために必要だったと考えられるためであ

²⁵⁸ 木俣「イェルサレム・コンスタンティノポリス・パリ」、46頁

²⁵⁹ 木俣「イェルサレム・コンスタンティノポリス・パリ」、46頁

²⁶⁰ 木俣「イェルサレム・コンスタンティノポリス・パリ」、46頁

²⁶¹ 木俣「イェルサレム・コンスタンティノポリス・パリ」、48頁

²⁶² 木俣「イェルサレム・コンスタンティノポリス・パリ」、48頁

る²⁶³。サント＝シャペルは前述の「解説」的な内部装飾に加えて、ルイが願っていた3つの権威への繋がりが、目に見える形として表された空間と捉えることができる。

第5節 聖遺物の公開の場としての検討

以上の第2節から第4節では、サント＝シャペルという礼拝堂について、贖宥状による勧誘、礼拝規定書に示された実際の参加、礼拝堂内の解説的な装飾という観点から考察した。ここでは今一度、贖宥状の発行の意味について考えたい。

贖宥状の発行の重要性は、1300年にボニファティウス8世が制定した聖年を境に変化し、それ以降の贖宥は巡礼者を招く効果的なツールとして機能した²⁶⁴。本稿の執筆に当たり、聖年以前、特に同じ13世紀前半のフランスの贖宥状発行の状況についての研究を調べたが、具体的な事例を見つけることが出来なかった。しかし、13世紀という時期が贖宥の理論と大きく結びついていたことは確かである²⁶⁵。11世紀頃から登場し始める贖宥状は、当初十分な理論の確立がされないまま実践されており、11世紀後半から徐々に神学者や法学者の主題として扱われ始めた²⁶⁶。13世紀は、まさにトマス・アクィナスなどによってその理論の確立が成立し始める時代なのである。

しかし、このような理論の確立がどれほどのスピードで、神学者以外の人間の思想に影響したのだろうか。それはスコラ学とゴシック建築が時代と地域そして論理的に共通性を示しつつも、必ずしも直接的な影響を指摘するに至らないことと同様である²⁶⁷。おそらくルイ自身の意志であると考えられるサント＝シャペルからの贖宥状の発行が、前述した理論の実践という意識を持って行われたとは考え難い。つまり、この一連の贖宥状の発行は、当初確立されつつあった贖宥の理論の具現化ではなく、やはり贖宥状によってもたらされる「来客」という実質的なものを大きな目的としていたと考えられる。その意味合いにおいては、これはまさにローマへの巡礼者を増加させようとした1300年の聖年の制定に先立つ例である。

さらに贖宥の対象となる空間にも着目したい。贖宥は教会の祝日以外のサント＝シャペルに関係した祝日にも発行されており、すなわち、「聖なる遺物を賜りし日」、「主の荊冠の奉還の日」、「礼拝堂が奉納された日」がそれに当たる。これらの祝日は、聖遺物という「モノ」を祝う日と、サント＝シャペルという礼拝堂自体つまり「空間」を祝う日に分けられるが、贖宥状の発行は大きな区別がされずどちらにも同様に行われている。このことから、贖宥の対象としてサント＝シャペルとその聖遺物自体はほぼ同一のものと考えられていたことが分かる。これはサント＝シャペル自体を聖遺物の一つの入れ物、グランド・シャッスと捉える美術史的な見解と繋がる事実である。そして、王が持つコレクションの力が聖遺物自体だけでなく、それを取り巻く空間にまで影響し得るものであったことも指摘できる。

そして、サント＝シャペルでの礼拝に参加することで贖宥が与えられるという構造自体も、聖遺物の力、もしくは王の力を知らしめるある種のプロパガンダ的な要素を持つものであ

²⁶³ Bozoky, E., "Saint louis, ordonnateur et acteur des rituels autour des reliques de la passion", p.34

²⁶⁴ 聖年については以下を参照。青谷秀紀「赦しのポリティクス：中世後期ネーデルラント都市の聖年とブルゴ＝ニュ公」『清泉女子大学紀要』59、21-36頁 及び、河原温「中世ローマ巡礼」、歴史学研究会編『巡礼と民衆信仰』、94-125頁

²⁶⁵ Remy, F., *Les grandes indulgences pontificales aux Pays-Bas à la fin du moyen âge (1300-1531) essai sur leur histoire et leur importance financière : dissertation présentée pour l'obtention du grade de docteur en sciences historiques*, p.2

²⁶⁶ Shaffern, R.W., "The Medieval Theology of Indulgences", in Swanson, R.N. (ed), *Promissory notes on the treasury of merits : indulgences in late medieval Europe*, Leiden, 2006, pp.11-36

²⁶⁷ 酒井健『ゴシックとは何か：大聖堂の精神史』、講談社、2000年、92-94頁

る。加えて、元来複数の教会を周って得られる贖宥状が、サント＝シャペル一つだけで得られることから、キリスト教世界の中におけるこの礼拝堂とルイ 9 世の特殊性が窺える²⁶⁸。無論、贖宥状の発行による金銭的な利益についても無視できない。当時はこれによって得られた利益を元に教会や公共の道路を作ること、巡礼の助けと捉えられ立派な信心行為の一つであった²⁶⁹。サント＝シャペルの贖宥状も建設以前の 1244 年から出されており、金銭的な援助となったことは完全に否定できない。しかし、7 年という異例の建設年数からも、金銭の工面に苦勞したとは考え難い。つまり贖宥状による資金の援助はあくまで補足的な要素であったと考えられる。

以上のように捉えた贖宥状の発行から礼拝規定書について再度考えたい。少なくとも本稿で用いた礼拝規定書が作成された 1400 年代には、贖宥状による「宣伝」が十分に効果を成し人々の間にこのサント＝シャペルが浸透していたはずである。なぜなら、その効果によって一般の人々がこの礼拝堂を認識しない限り、本章の第 3 節で指摘したような礼拝への参加はありえないためである。加えて、この礼拝堂はプロセションを利用した「宣伝」も行っていた。サント＝シャペルは、他の教会から始まるプロセションの通過地点にもなっており、これを通して王室の礼拝堂がパリの市民との関わり合いながら発展していった²⁷⁰。

最後に、グランド・シャッスやステンドグラスといったサント＝シャペルの上階のプログラムが、どれほど一般の人々の目に触れたかという問題について考えたい。本来ならば王室のための上階の礼拝堂を、頻繁に一般の人々が訪れていたという証拠があれば、これらのプログラムが彼らの目を意識したものであることから、さらに聖遺物の公開性を強調することが出来る。しかし、残念ながら礼拝が行われた場所が、上下どちらの礼拝堂であるかについてははっきりと記録されておらず、史料 3－9 のように上階への移動などが記されているのみである。これについて、Cohen は、上階の利用をはっきりと否定する要因がないことから上下両方が使われていた可能性を示している²⁷¹。本稿でもこの見解を踏襲し、この前提のもと、上階のプログラムの解説的な要素が多数の目を意識したものであると結論づけたい。

以上のように、サント＝シャペルでは贖宥状を利用してこの礼拝堂の「宣伝」が行われ、そこに来た人々を想定した解説的なプログラムが用意されていた。その贖宥の特殊性については前述した通りである。そしてその「宣伝」の効果によって、礼拝に一般の人々が参加していたことも史料からはっきりと分かる。このことから、サント＝シャペルという空間が、王室や聖職者以外の人間に対して開かれた場所であったことは明らかである。次章の結論では、このように証明された公開性の意義について検討する。

²⁶⁸ 贖宥状と複数の教会の関係については 河原「中世ローマ巡礼」、107-108 頁を参照。

²⁶⁹ Shaffern, R.W., "The Medieval Theology of Indulgences", p.18

²⁷⁰ Cohen, Ibid, pp.164-167

²⁷¹ Cohen, Ibid, pp.157-158

結論

第2章、第3章を通して、ルイ9世が集めた聖遺物について、パリ到着当日の披露とサント＝シャペルでの公開に着目し、それぞれでの一般の人々との関わりを検証した。第2章では、聖遺物到着時の様子を複数の記述から再現することで、2度、ないし3度の披露が行われていたこと、そしてそれぞれの記述の差異からいかにこの一連の披露が重要視されていたかを述べた。第3章では、多数の贖宥が授与され、礼拝規定書によって礼拝への参加が示されていたこと、加えて内部装飾の解説的プログラムから一般の人々がこの礼拝堂に招かれていたと結論づけた。以上により、第2章第3節でも述べたように、王が個人的理由のためだけにこれらの聖遺物を購入したわけではなく、かつ意図的に公開が行われたことは明らかである。

しかしここで今一度考えなくてはならないのが、聖遺物そのものが持つ性質が、サント＝シャペルにおける公開の特殊性を弱める可能性があるということである。すなわち、黙示録にも「(中略) 神の言葉と自分たちがたてた証しのために殺された人々の魂を、わたしは祭壇の下に見た」²⁷² (6章9節) と示されている通り、元来聖遺物とは教会に必要なものとして置かれ、その教会は人々に開かれた空間であった²⁷³。つまり教会という空間には常に聖遺物が置かれ、人々がそれを見ること自体には特殊性はないと言える。しかし、サント＝シャペルとは、王の個人的な礼拝堂であり、教会とは異なる私的な礼拝堂である。それにもかかわらず、わざわざ人を集めたとすれば、その公開性は他の大聖堂で行われるそれとは異なる物であると言える。

このような王室の礼拝堂であるサント＝シャペルと、そこに置かれている聖遺物が本稿で述べたような公開性を有していたことについて2つの理由が考えられる。第一に、これらの聖遺物がこのルイ9世によってパリにもたらされ、サント＝シャペルに収められていることを確実に証明するためである。例えばサン＝ドニ大修道院が持つ受難の聖遺物は、シャルルマーニュによってイェルサレムで発見され、アーヘンにもたらされた後、孫のシャルル禿頭王によって862年サン＝ドニにもたらされた、という逸話が残っている²⁷⁴。しかしながら、実際にはシャルルマーニュはイェルサレムには赴いておらず、862年にはシャルル禿頭王は未だアーヘンを支配していなかった²⁷⁵。そのためこの逸話は、聖遺物の真正性をシャルルマーニュの手を介して高めようとした捏造である²⁷⁶。ルイがこのサン＝ドニの聖遺物問題について詳しく経緯を知り、それを疑っていたかどうかは不明である。しかしステンドグラスAにこの受難の聖遺物伝来を描かせたことから、「ルイ9世が受難の聖遺物をパリにもたらした」ことを確実に示そうとしていたことは明らかである。確かに聖遺物自体は伝来が不明瞭でも問題なく効果を発揮したが、それはあくまで演出のための捏造が前提である。パリ到着の経緯を明確にすることで、これらの聖遺物の聖性や価値がより増すと考えられたとしても、それは中世における聖遺物の理論、果たしてそれが理論として成立していたかは疑わしいが、に反することではない。

第二の理由は、他国に対してはフランスという国を、国内においてはカペー王家が、神に選ばれし「聖性」を持つ存在であったことを証明するためである。「ルイが主の敬虔の下僕であるとともに、神もまたこれらの聖遺物をルイに、フランスの地に与えることを選んだ」という当時の意識は、コルヌの言葉やステンドグラスAの描写、そして贖宥状の発行の特異性によって示した。これはつまり、戦争での勝利や領土拡大以外の方法でその権威

²⁷² 「新共同訳」より。

²⁷³ 黙示録だけでなく、411年の第5回カルタゴ教会会議では聖遺物が置かれていない教会を受け入れてはならない旨が決定されている。 秋山、前掲書、42頁参照。

²⁷⁴ 小崎「歴史の創作」53-54

²⁷⁵ 小崎「歴史の創作」p55

²⁷⁶ 小崎「歴史の創作」p54

を表そうとしたルイにとって、必要な聖性の証明だったと言える。これは、キリスト教世界の他の王たちに勝利することでその権威を獲得しようとしたフィリップ 2 世や、教皇に勝る権威を知らしめたフィリップ 4 世とは異なる、ルイの治世全体の特性に見られる傾向である。ルイ 9 世は、キリスト教会が持つ聖性を聖遺物から借りつつ、それを確実に所持することで、王権の優位性を主張したのである。

同時に彼のこの一連の聖遺物の披露は、ルイが意図した以外の価値も生み出した。つまり彼は、モノを媒体とした、「見せる」「見る」の関係を恣意的に作り出したのである。これについて秋山氏は、カール 4 世による綿密な聖遺物展覧の行事にルイ 9 世のこの披露が影響していたと述べている²⁷⁷。さらに近年、博物館史学において、近代的博物館登場以前のコレクションに新しい視点での考察がされている。例えばルネサンス期に盛んであったコレクション「キャビネット」については、クシシトフ・ポミアン、Paula Findlen らによってエピステーメ（epistémé）概念を用いて研究が行われている²⁷⁸。このように「前近代的なもの」として扱われてきたコレクションを再度検証し直す中で、中世の聖遺物についても「日常的に使用されていない」²⁷⁹という点で現代の博物館に近いという評価もできる²⁸⁰。ルイ 9 世が集め、披露、そして公開した聖遺物をその一例として検証することも可能であるように思われる²⁸¹。

本稿においては、特に第 3 章第 3 節において美術史による見解を考察の一部とした。確かに、サント＝シャペル内部の装飾にルイ自身の意志がどこまで反映しているかを証明することは不可能であり、この点についてはやや漠然とした結論づけとなる。同様に第 2 章の記述史料についても、今回使用しなかった史料を用いることで、また別の傾向が見られる可能性がある。しかしながら、複数の記述史料の比較や美術史と繋げて考えることで、ルイの篤い信仰心を示す行為としてのみ検証されてきた聖遺物コレクションが、ある種のプロパガンダとして意図的に機能していたことを示すことができたと言えるだろう。

²⁷⁷ 秋山、前掲書、149-150 頁

²⁷⁸ 高橋雄造『博物館の歴史』、法政大学出版局、2008、74-75 頁

²⁷⁹ ポミアンは「宝物庫やコレクションから博物館への変化は、そこに置かれた品物が本来所有していた役割を失うことである」と定義している。クシシトフ・ポミアン著、吉田城、吉田典子訳『コレクション：趣味と好奇心の歴史人類学』平凡社、1992 年、373 頁

²⁸⁰ 高橋雄造、前掲書、53 頁

²⁸¹ 古代からの現代までの博物館史については高橋雄造、高橋雄造、前掲書及び棚橋源太郎『博物館・美術館史』大空社、1991 年に詳しい。

参考文献

(1) 史料

- ・ Gautier Cornut, “Historia susceptionis coronae spineae Iesu Christi”, *Historiae Francorum Scriptore*, Paris, 1649, t.V, pp.407-411
- ・ Geoffrey de Beaulieu, “Vita et sancta conversatio piae memoriae Ludovici quondam regis Francorum”, *Recueil des historiens des Gaules et de la France*, Paris, 1967-1968, t.XX, pp. 3-27,
- ・ Guillaume de Chartres, “De Vita et Actibus Inclytae Reprditionis Regis Francorum Ludovici et de Miraculis quae ad ejus Sanctitatis Declartionem Contingerunt ”, *Recueil des historiens des Gaules et de la France*, Paris, 1967-1968, t.XX, pp.27-41
- ・ Guillaume de Nangis, “Chronicon”, *Recueil des historiens des Gaules et de la France*, Paris, 1967-1968, t.XX, pp.544-586, et, t.XXI, pp.103-123
- ・ Guillaume de Nangis, “Gesta Ludovici IX”, *Recueil des historiens des Gaules et de la France*, Paris, 1967-1968, t.XX, pp.312-465
- ・ Mathew Paris, “Chronica Majora”, *Rerum Britannicarum Medii Aevi Scriptores*, edited by Henry Richards Luard, t.57, 7vols, London ,1946

(2) 邦語文献

- ・ 青谷秀紀「赦しのポリティクス：中世後期ネーデルラント都市の聖年とブルゴ・ニュ公」『清泉女子大学紀要』 59、2011 年、21-36 頁
- ・ 青山吉信『聖遺物の世界：中世ヨーロッパの心象風景』、山川出版、1999 年
- ・ 秋山聰『聖遺物崇敬の心性史：西洋中世の聖性と造形』、講談社、2009 年
- ・ 五十嵐節子「アーヘン宮廷礼拝堂における空間構成：カール大帝の玉座をめぐる」『美學』 26 (1)、1975 年、43-55 頁
- ・ 井上幸治『フランス史』（世界各国史学、2）、山川出版社、1968 年
- ・ 岡田温司『キリストの身体：血と肉と愛の傷』、中央公論新書、2009 年
- ・ 小崎 閏一「歴史の創作--サン＝ドニ修道院の受難聖遺物を巡って」『史学研究』 251、2006 年、 48-67 頁
- ・ 河原温「中世ローマ巡礼」、歴史学研究会編『巡礼と民衆信仰』、青木書店、1999 年、94-125 頁
- ・ 木俣元一「イエルサレム・コンスタンティノポリス・パリ」『西洋美術研究』 14、2008 年、33-53 頁
- ・ 木俣元一『ゴシックの視覚宇宙』、名古屋大学出版会、2013 年
- ・ 酒井健『ゴシックとは何か：大聖堂の精神史』、講談社、 2000 年
- ・ 佐藤彰一、中野隆生編『フランス史研究入門』、山川出版社、2011 年
- ・ 佐藤達生、木俣元一「『図説大聖堂物語：ゴシックの建築と美術』、河出書房新社、2000 年
- ・ 柴田三千雄、樺山紘一、福井憲彦『フランス史』 1（世界歴史大系）、山川出版、1995 年
- ・ 杉崎泰一郎「中世ヨーロッパの人々が求めた聖なる宝：コレクションとしての聖遺物、

入れ物としての教会」『東海史学』46、2012年、3-23頁、

- ・ 高橋雄造『博物館の歴史』、法政大学出版局、2008年
- ・ 棚橋源太郎『博物館・美術館史』大空社、1991年
- ・ 福井憲彦編『フランス史』（世界各国史、12）、山川出版社、2001年
- ・ 歴史学研究会編『ヨーロッパ世界の成立と膨張：17世紀まで』、岩波書店、2007年

（3）翻訳文献

- ・ コンボー、イヴァン著、小林茂訳『パリの歴史』、白水社、2002年
- ・ サン＝ドニ、アラン著、福本直之訳『聖王ルイの世紀』、白水社、2004年
- ・ シュミット、ジャン＝クロード著、小池寿子訳『中世の聖なるイメージと身体：キリスト教における信仰と実践』、刀水書房、2015
- ・ ジョワンヴィル、ジャン・ド著、伊藤敏樹訳『聖王ルイ：西欧十字軍とモンゴル帝国』、筑摩書房、2006年
- ・ ピット、ジャン＝ロベール著、木村尚三郎訳『パリ歴史地図』、東京書籍、2000年
- ・ ポミアン、クシシトフ著、吉田城、吉田典子訳『コレクション：趣味と好奇心の歴史人類学』平凡社、1992年
- ・ ル＝ゴフ、ジャック著、岡崎敦、森本英夫、堀田郷弘訳『聖王ルイ』、新評論、2001年

（4）欧文文献

- ・ Berger, É., *Histoire de blanche de castille*, rein de France, Paris, 1895
- ・ Berger, É., *Saint Louis et Innocent IV : étude sur les rapports de la France et du Saint-Siège*, Thorin, Paris, 1893
- ・ Boissière, A., *Atlas de l'histoire de France: 481-2005*, Paris, 2012
- ・ Boutaric, E., *Saint Louis et Alphonse de Poitiers : Étude sur la réunion des provinces du Midi & de l'Ouest à la couronne et sur les origines de la centralisation administrative d'après des documents inédits*, Paris, 1870
- ・ Bozoky, E., "Saint Louis, ordonnateur et acteur des rituels autour des reliques de la passion", dans *La Sainte-Chapelle de Paris : Royaume de France ou Jérusalem céleste? : Actes du Colloque*, Hediger, C. (éd), Belgium, 2007, pp.19-34
- ・ Branner, R., *St Louis and the Court Style in Gothic Architecture*, London, 1965
- ・ Branner, R., "The Grande Châsse of the Sainte-Chapelle," *Gazette des beaux-arts*, 6e période 57, Nendeln, 1971, pp.5-18
- ・ Branner, R., *Manuscript Painting in Paris during the Reign of Saint Louis : a Study of Styles*, Berkeley, 1977
- ・ Carolus-Baré, L., *Septième centenaire de la mort de saint Louis : actes des colloques de Royaumont et de Paris, 21-27 mai 1970*, Paris, 1976
- ・ Carolus-Baré, L., *Le procès de canonisation de Saint Louis (1272-1297) : essai de reconstitution*, Rome, 1995
- ・ Cohen, M., *The Sainte-Chapelle and the Construction of Sacral Monarchy: Royal*

Architecture in Thirteenth-Century Paris, New York, 2014

- Delaruelle, É., L'idée de croisade au moyen âge, Torino 1980
- Dimier, A., *Saint Louis et Cîteaux*, Paris, 1964
- Fawtier, R., Saint Louis et Frédéric II, dans convegno internazionale di studi federiciani, Palerme, 1950
- Fawtier, R., Translated by Butler, B. and Adam, R.J., *The Capetian Kings of France : Monarchy & Nation, 987-1328*, London 1960
- Folz, R., Les saints rois du moyen âge en Occident : (VIe-XIIIe siècles) , Société des Bollandistes, Bruxelles, 1984
- Freeman, C., Holy Bones, Holy Dust : How Relics Shaped the History of Medieval Europe, New Haven, 2012
- Gaposchkin, M. C., Field, S.L. , Translated by Larry F. Field, The Sanctity of Louis IX : Early Lives of Saint Louis by Geoffrey of Beaulieu and William of Chartres, London, 2014
- Gavrilovitch-M., Etude Sur Le Traite de Paris de 1259 Entre Louis IX, Roi de France, Henri III, Roi D'Angleterre, Paris, 1899
- Geary, P.J., Furta Sacra : Thefts of Relics in the Central Middle Ages, Princeton, 1978
- Grodecki, L., et, Aubert, M., et, Lafond, J., et, Verrier, J., *Les Vitraux de Notre-Dame et de la Sainte-Chapelle de Paris*, Paris, 1959
- Haggh, B., "An Ordinal of Ockeghem's Time from the Sainte-Chapelle of Paris: Paris, Bibliothèque de l'Arsenal, MS 114", *Tijdschrift van de Koninklijke Vereniging voor Nederlandse Muziekgeschiedenis*, Deel 47, No. 1/2, pp. 33-71, 1997
- Jordan, A.A., "Stained Glass and the Liturgy : Performing Sacral Kingship in Capetian France," in *Hourihane, Colum, Objects, images, and the word : art in the service of the liturgy*, Princeton, 2003, pp. 274-297
- Jordan, A.A., Visualizing Kingship in the Windows of the Sainte-Chapelle, Belgium , 2002
- Jordan, W.C., "Supplying Aigues-Mortes for the Crusade of 1248 : the Problem of Restricting Trade" in *Order and innovation in the Middle Ages : Essays in honor of Joseph R. Strayer*, edited by Jordan, W.C., and, McNab, B., and, Ruiz, T.F., Princeton, 1976, pp. 165-172
- Jordan, W.C., Louis IX and the Challenge of the Crusade : A Study in Rulership, Princeton, 1979
- Langlois, C.V., Saint Louis, Philippe le Bel, les derniers Capétiens directs (1226-1328) , Paris, 1901
- Legner, A., Reliquien in Kunst und Kult : zwischen Antike und Aufklärung, Darmstadt, 1995, p. 88
- Louis Sébastien Le Nain de Tillemont , publiée par J. de Gaulle , *Vie de Saint Louis : Roi de France* , 6vol., Paris, 1847-1851
- Michel, R., L'administration royale dans la sénéchaussée de Beaucaire au temps de Saint Louis, Paris, 1910
- Morand, S., Histoire de la Ste-Chapelle Royale du Palais, Clousier, 1790
- Palazzo, É., "La liturgie de la Sainte-Chapelle: un modèle pour les chapelles royales

- françaises?”, dans *La Sainte-Chapelle de Paris : Royaume de France ou Jérusalem céleste? : Actes du Colloque*, Hediger, C. (éd) , Belgium , 2007, pp.101-112
- Pernoud, R., *Un chef d'état, Saint Louis de France*, Paris, 1960
 - Remy, F., *Les grandes indulgences pontificales aux Pays-Bas à la fin du moyen âge (1300-1531) essai sur leur histoire et leur importance financière : dissertation présentée pour l'obtention du grade de docteur en sciences historiques*, Louvain, 1928
 - Richard, J., “L'adoubement de Saint Louis”, in *Journal des savants*, 1988, pp.208-217
 - Richard, J., *Saint Louis : roi d'une France féodale, soutien de la Terre sainte*, Paris, 1983
 - Richard, J., Translated by Birrell, J., *Saint Louis : Crusader King of France*, New York , 1992
 - Shaffern, R.W., “The Medieval Theology of Indulgences”, in *Promissory notes on the treasury of merits : indulgences in late medieval Europe*, Swanson, R.N. (ed) , Leiden, 2006, pp.11-36
 - Shaffern, R.W., “Indulgences and Sainly Devotionalisms in the Middle Ages”, *The Catholic Historical Review* Vol. 84, No. 4, 1998, pp. 643-661
 - Sivéry, G., *Saint Louis et son siècle*, Paris, 1983
 - Snoek, G.J.C., *Medieval Piety from Relics to the Eucharist : A Process of Mutual Interaction* , New York , 1995
 - Strayer , J.R., *Dictionary of the Middle Ages*, 13vols, 6, New York, 1982-1989
 - Strayer, J.R., “La conscience du roi. Les enquêtes de 1258-1262 dans la sénéchaussée de Carcassonne-Béziers”, dans *Mélanges Roger Aubenas*, Montpellier, 1974
 - Strayer, J.R., *The Administration of Normandy under Saint Louis*, Paris, 1932
 - Vroom, W., Translated by Manton, E., *Financing Cathedral Building in the Middle Ages : the Generosity of the Faithful*, Amsterdam , 2010
 - Wallon, H., *Saint Louis et son temps*, Paris, 1876, 2vol
 - Weiss, D.H., *Art and Crusade in the Age of Saint Louis*, New York , 1998

(5) カタログ

- フィナンス、ロランス・ド著、Chikako De Lucia 訳『サント・シャペル』、Éditions du patrimoine, Centre des monuments nationaux, 2014 年 (Finance, L., *Sainte Chapelle* , Paris, 2014 の日本語版)
- Duarand , J., et, Laffitte, M., *Le trésor de la Sainte-Chapelle*, Musée du Louvre, 31 mai 2001-27 août 2001, Paris, 2001
-
- *Les Vitraux de la Sainte-Chapelle : 1200 Scènes Legendées*, édité par Patrimoine, Paris, 2015

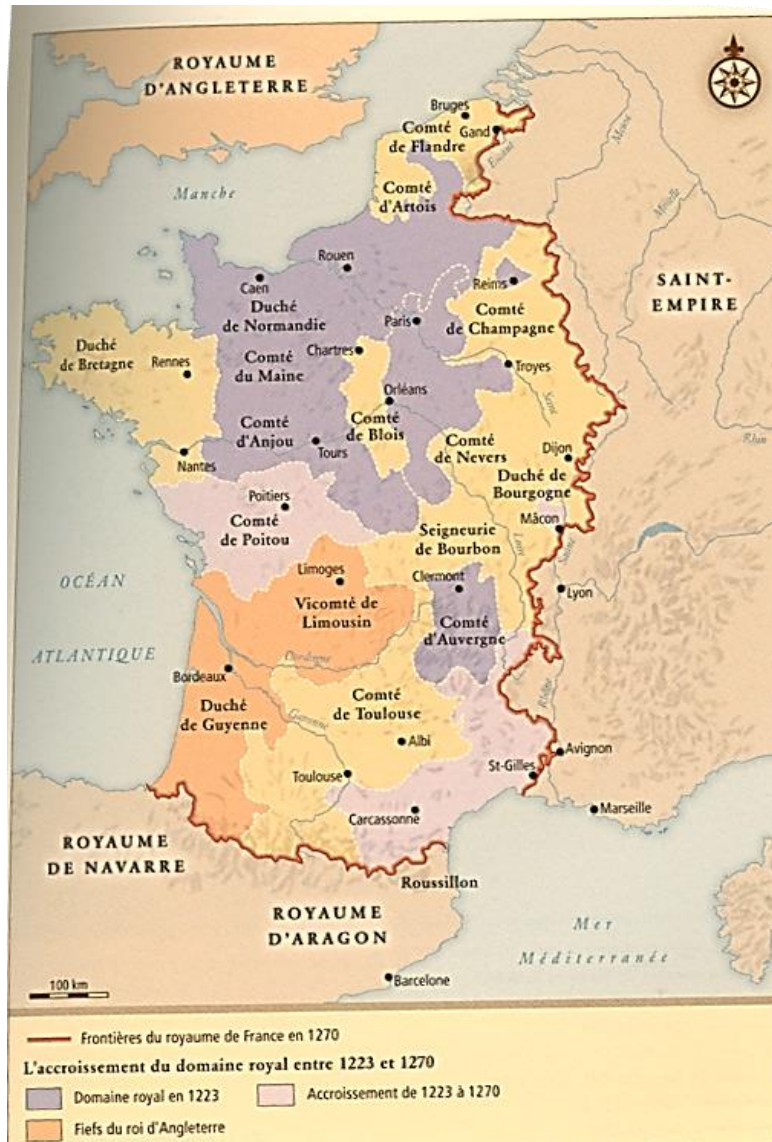
(6) 辞典類

- 日本基督教協議会文書事業部・キリスト教大事典編集委員会企画・編集『キリスト教大事典』、教文館、1977 年
- Dunphy, G., edited, *The Encyclopedia of the Medieval Chronicle*, Vol.1-2, Boston ,2010
- Kibler, W.,and, Zinn, G., edited, *Medieval France : an Encyclopedia*, New York, 1995

参考図

図1 「ルイ9世没時のフランス王国」

Boissière, A., Atlas de l'histoire de France: 481-2005, Paris, 2012, p.87



凡例和訳

赤線：1270年頃のフランスの国境

濃い紫：1223年頃の王領地

薄紫：1223年から1270年の間に増えた王領地

オレンジ：イングランドの領地

図2 「ルイ9世のフランス」

ジャック・ル＝ゴフ著、岡崎敦、森本英夫、堀田郷弘訳『聖王ルイ』、新評論、2001年、
1184-1185頁 ※ポイント、吹き出しについては執筆者が追加

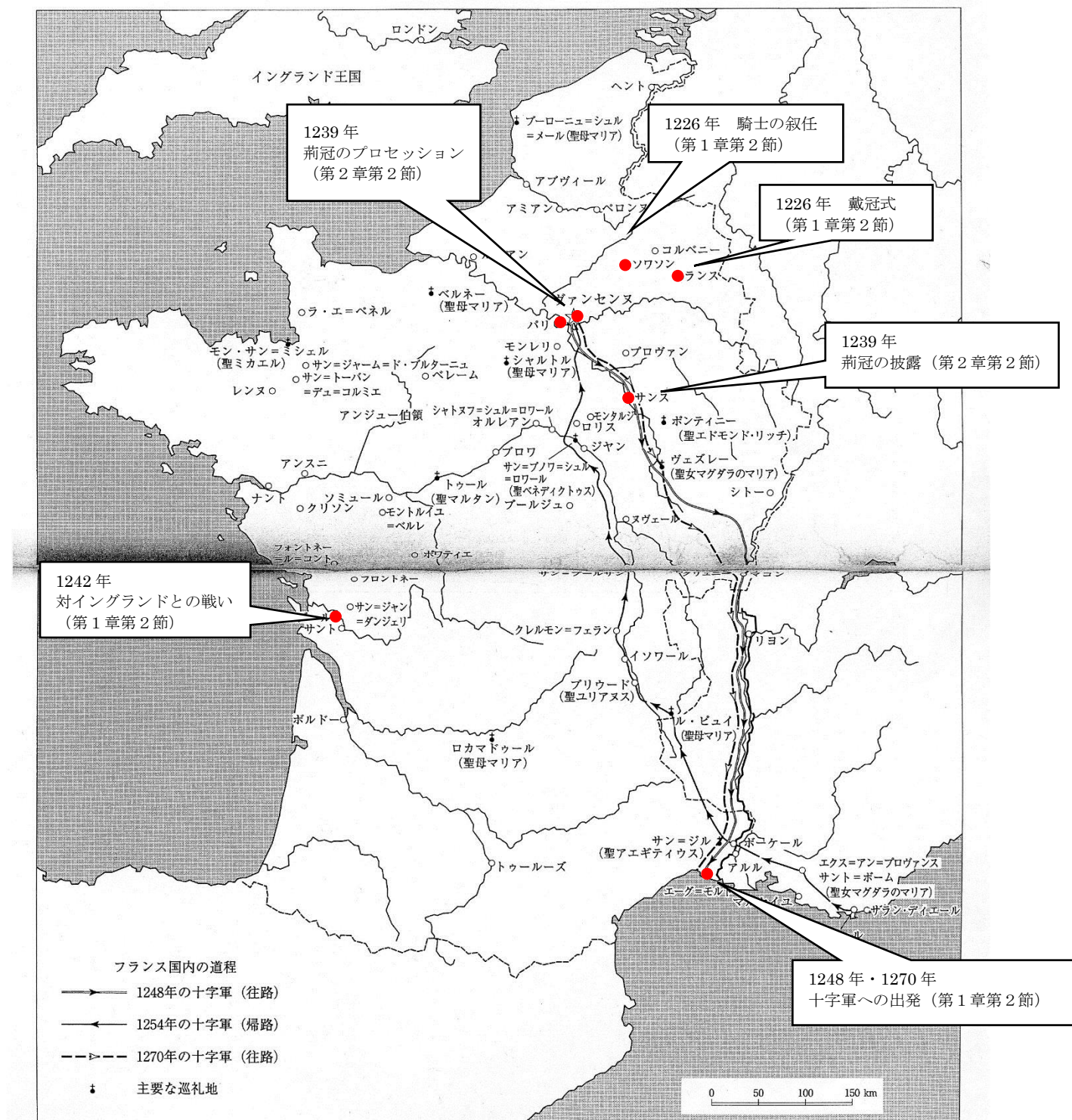


図3 「ルイ9世とその一族」

アラン・サン＝ドニ著 福本直之訳『聖王ルイの世紀』白泉社、2004 pp.iv-v

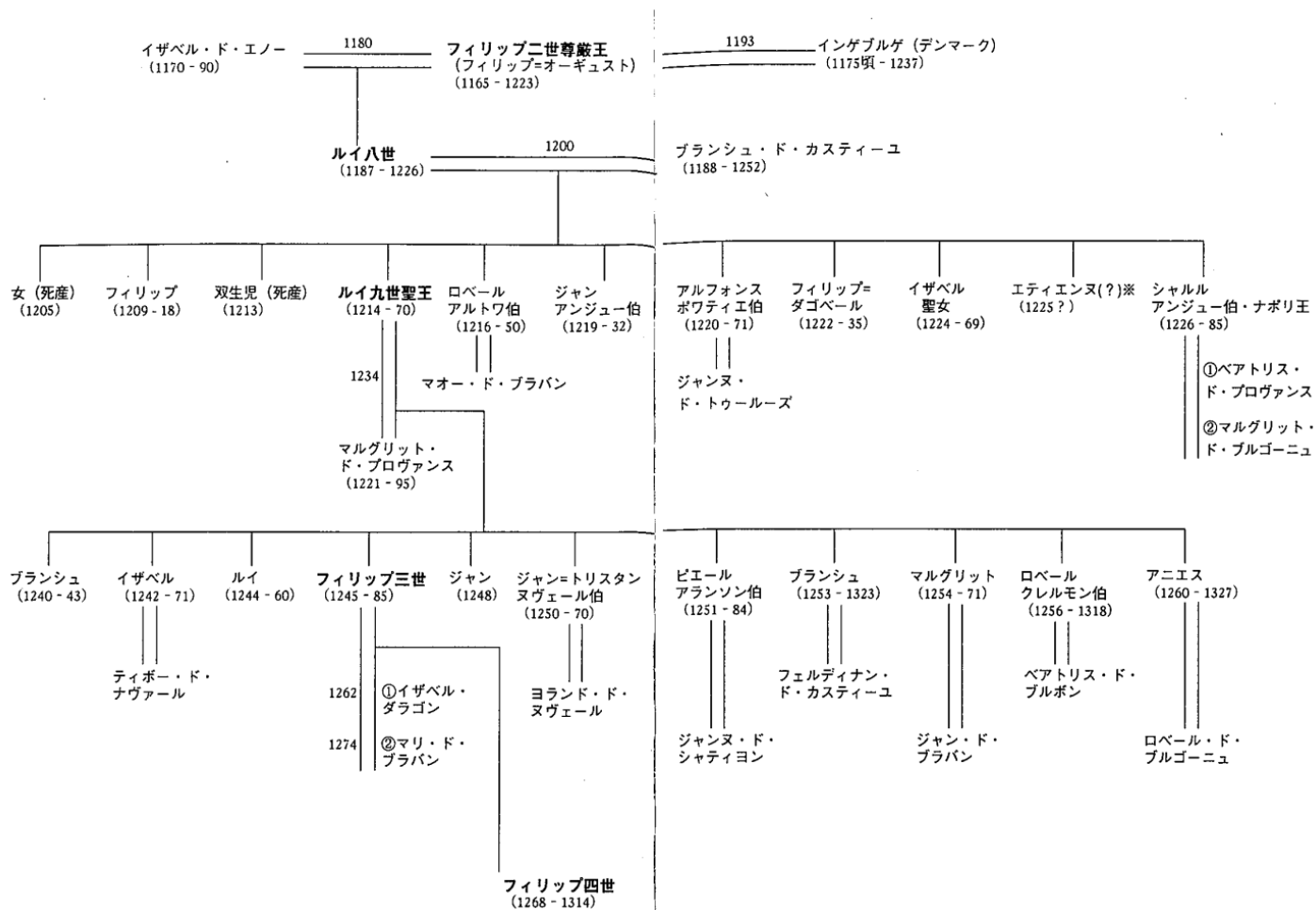


図4 「ルイ9世の生涯」

- 1214 年 ルイ8世 ブランシュ・ド・カスティーユの次男として生まれる（長男は 1218 年に死亡）
- 1223 年 フィリップ・オーギュスト死去
- 1226 年 ルイ8世の死去 ソワソンで騎士に叙任 ランスで戴冠式
- 1227 年（～1234 年）封臣諸侯の謀反
- 1234 年 プロヴァンス伯レモン・ベランジェの娘マルグリットと結婚
- 1239 年 荊冠の購入
- 1241 年 受難の聖遺物 21 点を購入 サント＝シャペルの建設開始
- 1242 年～44 年 大病をきっかけに十字軍の発起を決意
- 1247 年 役人たちの不正行為、権力濫用、不正取得についての一大調査を托鉢教団に命じ、監察使を創設
- 1248 年 4 月 26 日 サント＝シャペル献堂
-
- 8 月 28 日 エーグ＝モルトから十字軍へ出発
- 9 月 18 日 キプロス島に上陸
- 1249 年 5 月エジプトに到着
- 6 月 6 日 ダミエッタ陥落
- 1250 年 4 月 5 日 マンスーラにて敗北、捕虜となる。弟ロベール・ダルトワ戦死
- 5 月 6 日 身代金を支払い解放される
- 1252 年 ブランシュ・ド・カスティーユ死去
- 1254 年 パリへ帰還
-
- 1254 年（～1261 年） 多数の托鉢修道会に土地を寄進、貸付
- 1258 年 5 月 11 日 アラゴン王とコルベイク条約を締結
- 5 月 28 日 イングランド王との間パリ条約が確約
- 1263 年（～1266 年） 貨幣に関する諸王令 王国内における王の貨幣の流通の独占を図る
- 1267 年 3 月 24 日 二度目の十字軍の誓いをたてる
- 聖霊降臨祭 王位継承者フィリップの騎士叙任式が行われる
- 1270 年 7 月 1 日 エーグ＝モルトから乗船
- 8 月 25 日 死去
- 1297 年 ボニファティウス8世により列聖

図5 「現在の荊冠」(第2章第1節で使用)

Duarand, J., et, Laffitte, M., *Le trésor de la Sainte-Chapelle*, Musée du Louvre, 31 mai 2001-27 août 2001, Paris, 2001, p.283



図6 「フィリップ2世が築いた城壁」 (第2章第2節で使用)

ジャン＝ロベール・ピット著、木村尚三郎訳『パリ歴史地図』、東京書籍、2000年、47頁

※ 赤い囲みについては執筆者が追加



(左) 図7「サント＝シャペルの外観」(第3章第1節で使用)
ロランス・ド・フィナンス著、Chikako De Lucia 訳『サント・シャペル』、Éditions du
partimoine, Centre des monuments nationaux, 2014年、19頁



(右) 図8「サント＝シャペルの上階の礼拝堂」
(第3章第1節で使用) 執筆者が撮影



図9 「グランド・シャッスのスケッチ」 (第3章第4節で使用)

Duarand, Jannic, Laffitte, Marie-Pierre, *Le trésor de la Sainte-Chapelle*, Musée du Louvre, 31 mai 2001-27 août 2001, Paris, p.111

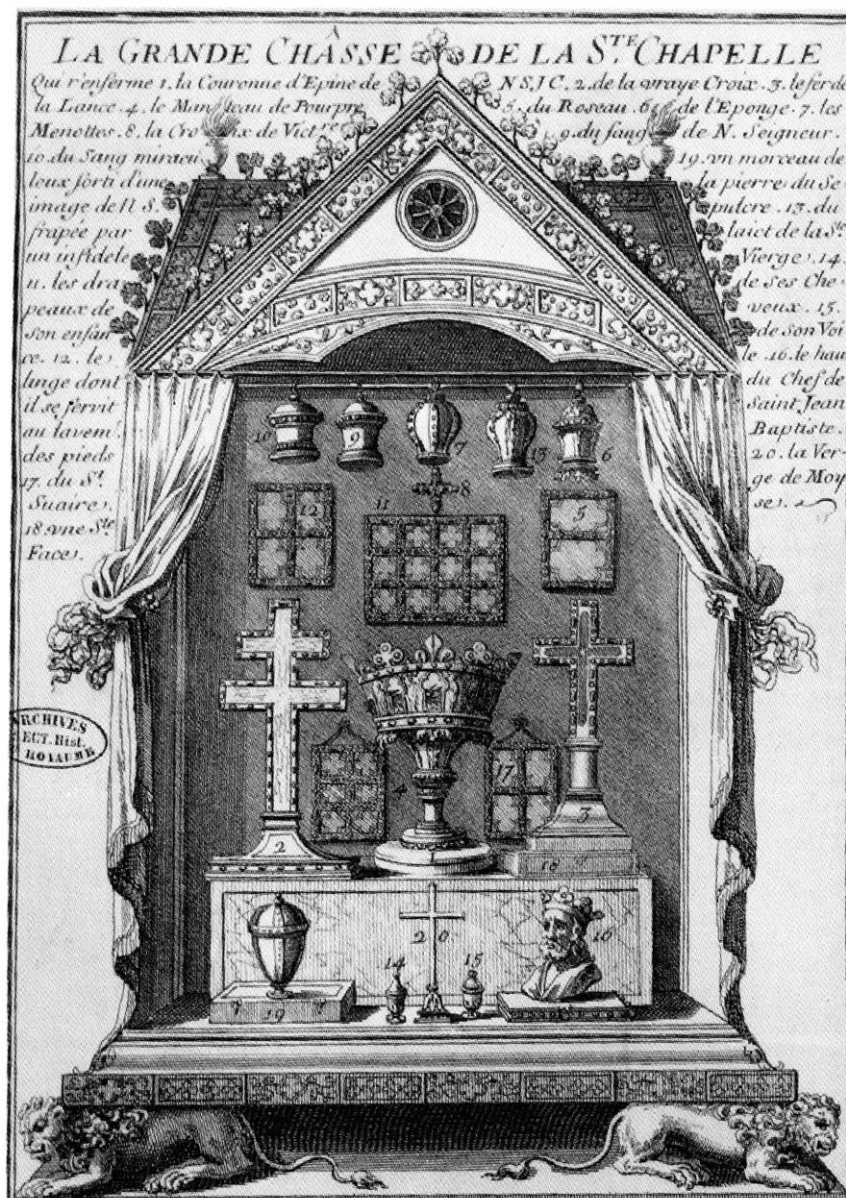
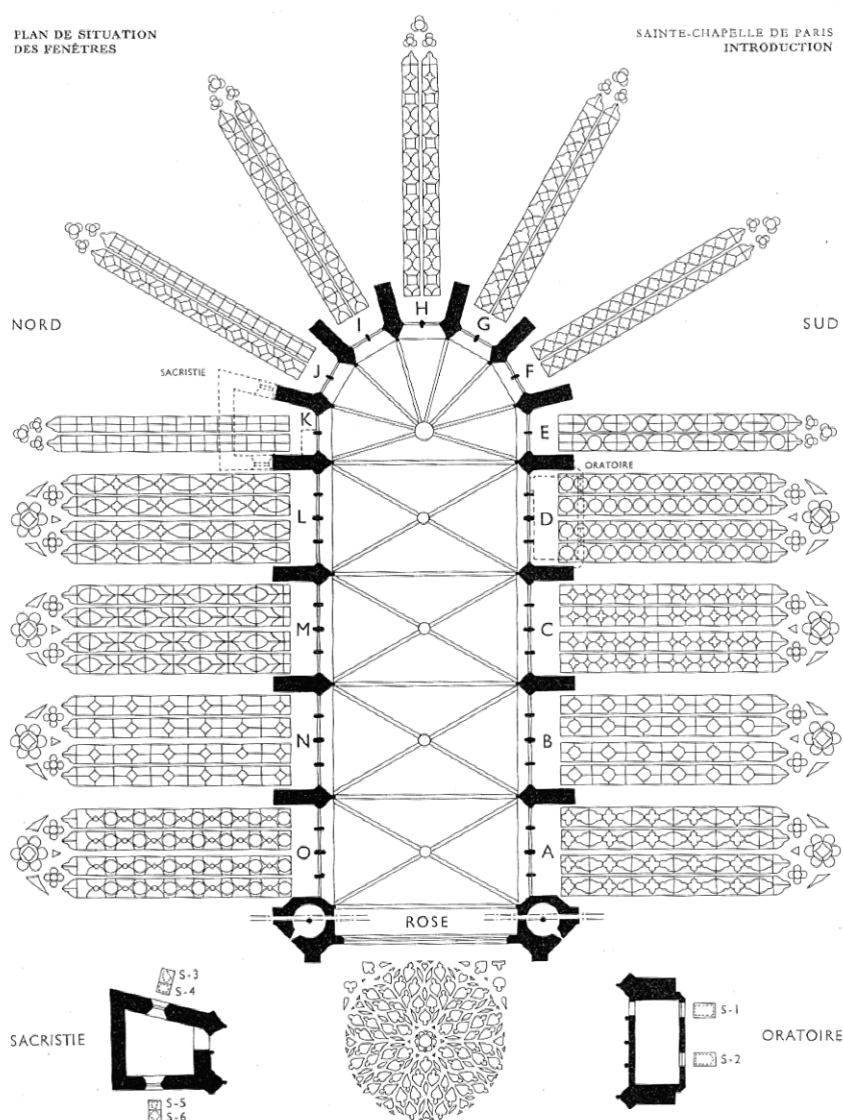


図10 「サント＝シャペルのステンドグラスの配置」 (第3章第4節で使用)

Grodecki, L., et, Aubert, M., et, Lafond, J., et, Verrier, J., *Les Vitraux de Notre-Dame et de la Sainte-Chapelle de Paris*, Paris, 1959p.75



上が、東、右が南。

北側面 O: 創世記 N: 出エジプト記 M: 民数記 L: 申命記、ヨシュア記

南側面 D: ユディト記、ヨブ記 C: エステル記 B: 列王記 A: フランス王

内陣 K: 士師記 J: イザヤ書 I: 福音書記者ヨハネ伝、キリスト幼児伝 H: キリスト受難伝

G: 洗礼者ヨハネ伝、ダニエル書 F: エゼキエル書 E: エレミヤ書、トビト書

西正門バラ窓 ヨハネ黙示録

木俣元一「イェルサレム・コンスタンティノポリス・パリ」『西洋美術研究』14、2008年、40頁

(左) 図 1 1 「Alyce .A.Jordan が再現したステンドグラス A」(第 3 章第 4 節で使用)
 (右) 図 1 2 「ステンドグラス A の通し番号」(第 3 章第 4 節で使用)

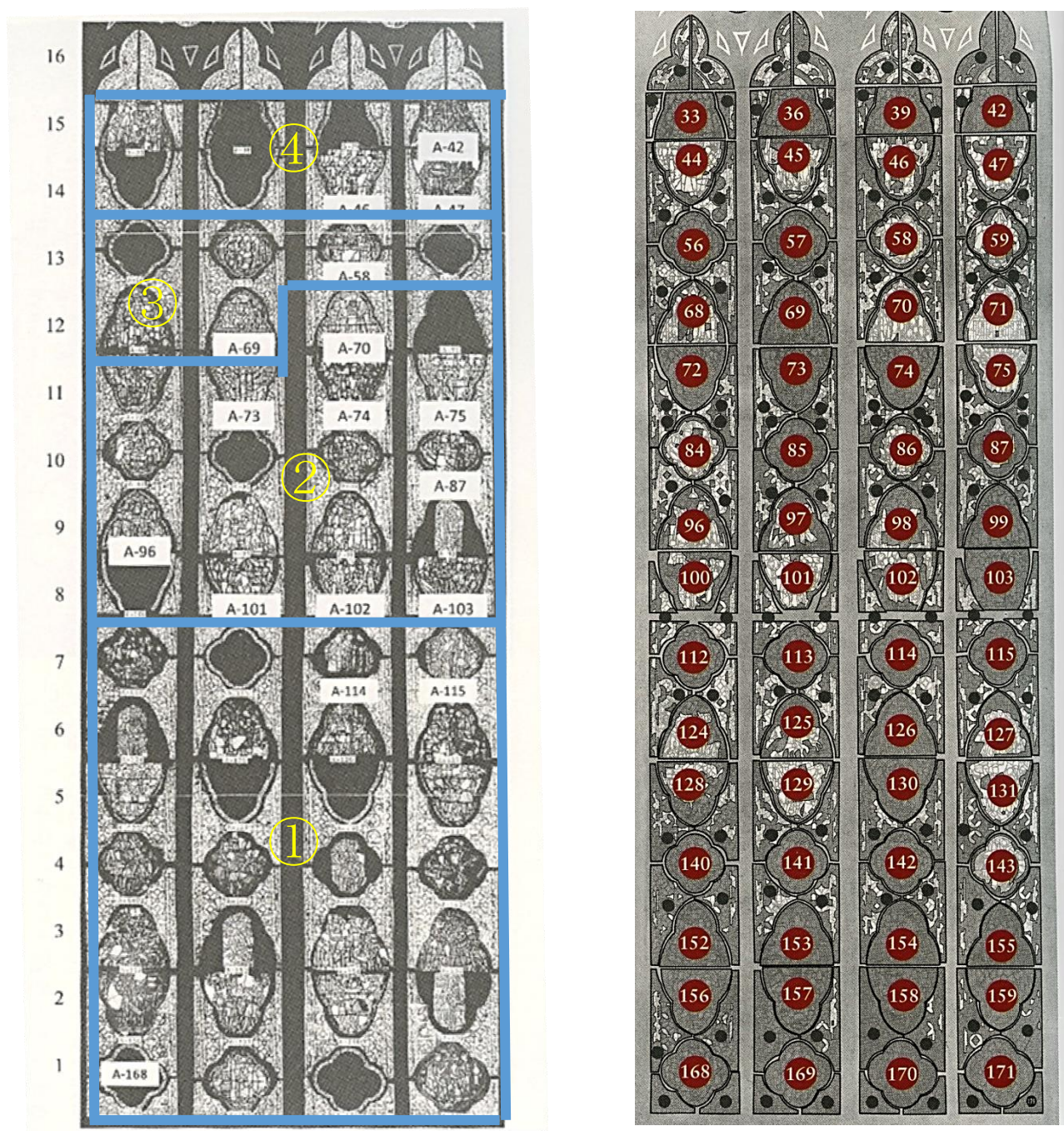


図 1 1 : 木俣元一『ゴシックの視覚宇宙』、名古屋大学出版会、2013 年、146 頁

表 3 - 3 と対応させた枠取り、番号づけは執筆者が記入

図 1 2 : *Les Vitraux de la Sainte-Chapelle : 1200 Scènes Legendées*, édité par Patrimoine, Paris, 2015, p.34

図13～図24「ステンドグラスAの細部」 （第3章第4節で使用）

木俣元一『ゴシックの視覚宇宙』、名古屋大学出版会、2013年

（元の記載ページは図ごとに挙げている）

いずれも Alyce. A. Jordan の復元案。それぞれの窓の主題は木俣氏が邦訳を使用している。



図13
103: コンスタンティノポリスに
到着したドミニコ会士 (147 頁)



図14
102: 荆冠に付き添って移動
する修道士たち (149 頁)



図15
101: 馬の背に載せて運ば
れる荆冠 (149 頁)



図16
96: ヴィルヌーヴ＝ラルシュヴ
ェックからサンスへ運ばれる荆
冠 (149 頁)

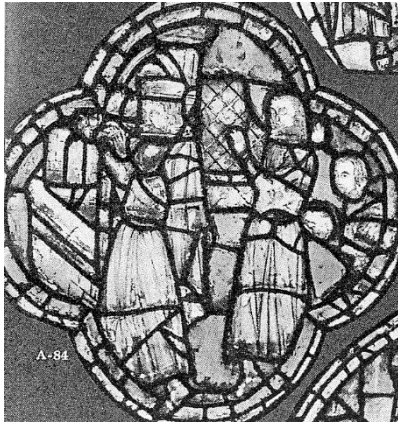


図 1 7
87 : 荊冠をサンスに運ぶルイ 9 世と
ロベール・ダルトワ (149 頁)

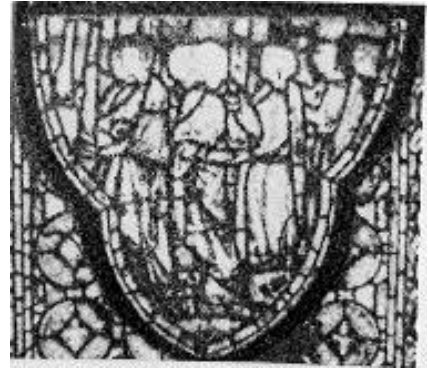


図 1 8
75 : サンスからパリへの
行列 (151 頁)



図 1 9
74 : サンスからパリへ荊
冠を運ぶ行列 (151 頁)

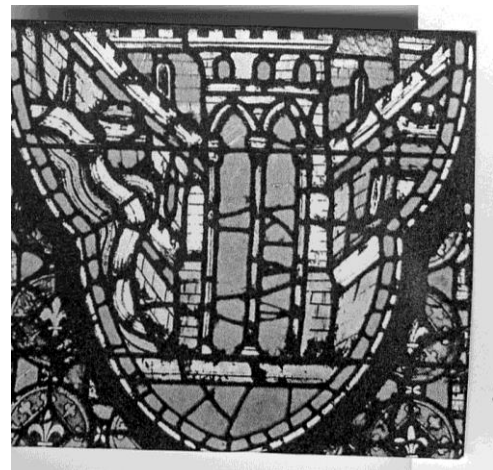


図 2 0
73 : パリまたはシテ島
(157 頁)



図 2 1
70 : 荊冠をパリへ運ぶルイ 9 世
とロベール・ダルトワ (151 頁)



図 2 2
69 : 壇上から荊冠を示す司教、左
にブランシュ・ド・カステイユ
またはマルグリット・ド・プロヴ
ァンス (151 頁)



図 2 3
58 : 祭壇上に置かれた荊冠
(151 頁)



図 2 4
46 : 十字架を捧げるルイ 9
世 (?) (151 頁)